第１３回全国バズ学習研究集会

研究主題

地域の教育課題をふまえた教育内容の創造

―幼·小·中·高一貫教育態勢づくりをめざして―

研 究 集 会 資 料

と　き　昭和53年10月20日㈮21日㈯

ところ　広島県豊田郡豊町・豊浜町

（幼・小・中・高）

目　　次

ページ

開　催　要　項

日　　程

Ⅰ　全体会次第 …… Ⅰ－1

　　記念講演 …… Ⅰ－2

　　分科会構成表 …… Ⅰ－3

　　大会運営役員表 …… Ⅰ－7

Ⅱ　基調提起 …… Ⅱ－1

Ⅲ　豊高校区学校紹介 …… Ⅲ－1

Ⅳ　分科会提案要旨

　　第1分科会 …… 分1－(1)－1

　　第2分科会 …… 分2－(1)－1

　　第3分科会 …… 分3－(1)－1

　　第4分科会 …… 分4－(1)－1

　　第5分科会 …… 分5－(1)－1

　　第6分科会 …… 分6－(1)－1

　　第7分科会 …… 分7－(1)－1

　　第8分科会 …… 分8－(1)－1

　　第9分科会 …… 分9－(1)－1

第13回全国バズ学習研究集会

開　催　要　項

1. 開催期日　昭和53年10月20日(金) 21日(土) 2日間
2. 研究主題　地域の教育課題をふまえた教育内容の創造
   ――幼・小・中・高一貫教育態勢づくりをめざして――
3. 主　　催　全国バズ学習研究連絡会
   広島県豊高校区教育推進協議会
4. 共　　催　広島県教育委員会
   豊町ならびに豊町教育委員会
   豊浜町ならびに豊浜町教育委員会
   広島県高等学校教職員組合
5. 後　　援　広島県同和教育研究協議会
   広島県尾三地区高等学校同和教育推進協議会
   広島県解放・バズ教育推進研究会高校部会
   広島県豊田郡下島ＰＴＡ連合会
   広島県立豊高等学校ＰＴＡ
6. 会　　場　広島県豊田郡豊町・豊浜町

全体会場
分科会会場　豊町立豊中学校

公開授業校 (1) 豊町立沖友小学校・同幼稚園
(2) 〃 久比小学校・同幼稚園
(3) 〃 豊小学校
(4) 〃 豊中学校
(5) 豊浜町立斎小学校
(6) 〃 大浜小学校
(7) 〃 豊島小学校
(8) 〃 豊浜中学校
(9) 広島県立豊高等学校

日　　程

月日 時間	第　1　日 10月20日（金）	第　2　日 10月21日（土）
9：00		
10：00	受　付 （各公開授業校）	分　科　会 第　2　日
12：00	公開授業 （9校）	
13：00	会場移動・昼食 （全体会場）	昼　食
15：00	全　体　会 開　会　行　事 基　調　提　起	全　体　会 記　念　講　演 閉　会　行　事
16：30	分　科　会 第　1　日	
	助言者・司会者・提案者 打ち合せ会 （分科会会場）	

全　体　会　次　第

第１日

Ⅰ　開　会　行　事

開会のことば	第１３回バズ学習研究副会長	脇本　操
主催団体あいさつ	第１３回バズ学習研究会長	新田正彦
	全国バズ学習研究連絡会長	永井辰夫
共催団体あいさつ	広島県教育委員会　教育長	高橋令之
	豊・豊浜町代表　豊町長	多武保清水
	豊・豊浜町教育委員会代表　豊浜町教育長	北恵長右エ門
	広島県高等学校教職員組合執行委員長	佐藤峯生
後援団体代表あいさつ	広島県尾三地区高等学校同和教育推進協議会 会長	宮地信生
歓迎のことば	豊田郡下島ＰＴＡ連合会長	藤田長重
事務連絡		

Ⅱ　基　調　提　起　　第１３回バズ学習研究集会事務局長　越智昭孝

第２日

Ⅰ　記　念　講　演　　名古屋大学名誉教授・南山大学教授　塩田芳久先生

Ⅱ　閉　会　行　事

主催団体あいさつ	第１３回バズ学習研究会副会長	畑本達磨
共催団体あいさつ	豊町教育委員会　教育長	木村吉聰
大会に参加して		
感謝のことば	豊中学校ＰＴＡ会長	宮城秀実
	豊高等学校ＰＴＡ会長	北村初海
閉会のことば	第１３回バズ学習研究副会長	木谷　陽

記念講演

演題「今日の教育課題」

名古屋大学名誉教授・南山大学教授　塩田芳久　先生

分科会構成ならびに

	分科会名	研究主題	研究内容	提案校および
第1分科会	（一貫態勢づくり）	一貫態勢づくりをどうすすめるか。	基調提起を受けて一貫教育態勢づくりの具体的な方向付けを模索する。	船場小　（姫　路） 白鷺中　（姫　路） 校区教推進協・久比幼
第2分科会	（学級集団づくり）	学級集団づくりをどのようにすすめるか。	学級集団からはみ出さされている子どもを中心に集団づくりを考える。	~~千両小　（豊　川）~~ 東部中　（春日井） ~~白鷺中　（姫　路）~~ 城南小　（姫　路） 校区教推進協・豊浜中
第3分科会	（特設バズ）	地域バズなど、特設バズをどう広げるか。	今日までの実践の洗い直しを軸に今後の方向性をさぐる。	高丘中　（姫　路） 林田中　（姫　路） 寝屋川四中（寝屋川） 校区教推進協・豊浜中
第4分科会	（言語と生活）	言語と生活をどのように結びつけるか。	今日もっとも欠除している表現力をどうつけていくかを中心に考える。	~~八万南小　（徳　島）~~ 南部中　（豊　川） 藤山台中　（春日井） 校区教推進協・豊　中
第5分科会	（社会と生活）	社会生活における社会的認識をどう育てるか。	社会人として、地域を中心として社会状況を的確につかませる教育内容を考える	勝川小　（春日井） 高座小　（春日井） 旭陽小　（姫　路） 白鷺中　（姫　路） 大里中　（静　岡） 校区教推進協・豊　中

分科会役員一覧表

提案者	司会者	記録者	助言者
三村　寛次 山本　亀夫 横手三重子	尾上　茂夫　（兵　庫） 松本　重雄　（春日井） 国実　　忠　（豊　中）	岡本　典子　（久比小） 堀江　明美　（久比小）	塩田　芳久　（名古屋） 四宮　恒夫　（徳　島） 梶田　稲司　（愛　知） ~~山崎千代松　（高　知）~~ 深川　　勇　（広　島）
~~丸山　正亮~~ 加納　弘雅 ~~道上　昌幸~~ 森本　俊和 木村　正直	石部　清和　（滋　賀） 堀江　常登　（豊　中）	土井　深枝　（豊島小） 神田みづほ　（久比小）	永井　辰夫　（姫　路） 荒木真寿男　（長　崎）
松浦昭一郎 加藤　倖一 西尾　時雄 亀本　邦彦	纐纈　良久　（土　岐） 永浜　　進　（姫　路） 船越　和吉　（新　潟） 井川　武彦　（豊浜中）	野村　幸子　（豊　高）	鈴木　武士　（姫　路） 清水　快雄　（岐　阜）
~~北村　艶子~~ 鈴木　　昭 大島　郁雄 森岡　　勉	吉田　武雄　（姫　路） 宮崎　淳右　（長　崎） 塩田　博久　（豊　中）	広近　先子　（大浜小）	梶田　正己　（名古屋） 古川　　厳　（徳　島） 鹿内　信善　（名古屋） 荻原　克己　（愛　知） 片山富次郎　（広　島）
佐橋　修吾 田本　安広 池田　正弘 高磯　忠実 安居院達男 住吉　光彦	今尾　啓一　（春日井） 牛尾　照夫　（姫　路） 池上　誉雄　（鳴　門） 大成　　治　（豊浜中）	土井　正直　（豊　高）	高馬　正則　（姫　路） 瀬良　賢一　（姫　路） 前田　義夫　（明　石） 堀田　昭晴　（広　島）

	分科会名	研究主題	研究内容	提案校および
第6分科会	（自然と生活）	自然をみつめ、とらえる力をどう育てるか。	自然認識をどのような教材内容の中でつくり出していくかを考える。	新宮小（兵庫新宮） 八木小（姫　路） 城南小（姫　路） 泉　中（岐阜土岐） 校区教推進協・豊　小
第7分科会	（数と生活）	かずと生活をどう結びつけていくか。	計算でのつまづきの分析から、指導内容を考えてみる。	篠木小（春日井） 安室東小（姫　路） 依那古小（三重上野） 校区教推進協・豊浜中
第8分科会	（健康と生活）	健康な生活を送るためにはどうしたらよいか。	体力増強に向けての動きの工夫を中心に考えてみる。	~~小清水小（豊田市）~~ 五個荘小（滋　賀） 小宅小（兵庫竜野） 高座小（春日井） 東部中（春日井） 校区教推進協・豊浜中 久比小 豊　高
第9分科会	（芸術と生活）	芸術的な表現力をどう育てるか。	感動し、そして創造へと向う道すじを明らかにする。	砥堀小（姫　路） 校区教推進協・豊　中 豊　中

分科会打合せ.
第1日、4題発表、15分発表、5分質疑.
第2日、討論.
内容の概略説明.

提案者	司会者	記録者	助言者
平野　博 撰　肇 山本　剛 小島　幸彦 岡田　真	和田　直（姫　路） 石原　貢（姫　路） 木原　延之（大浜小）	高橋　修（豊島小）	市川　千秋（三　重） 中川　豊（姫　路） 塩津　進（兵　庫） 内海　律夫（広　島）
加藤　一成 堀江　光明 野口　俊史 屋敷　光	水野　明（春日井） 金原　きみ（東　京） 賀戸（かど）　文夫（豊　中）	湯藤　泰浩（豊　中）	宿南勝之助（姫　路） 望月和三郎（東　京） 杉江　修治（名古屋） 原　正治（広　島）
~~野村　豊治~~ 小菅　融宣 郡安　義之 土屋　正広 佐善　康郎 村田　俊六 佐々木力也 鎗野由起江	山本　重信（兵　庫） ~~井口　俊幸（姫　路）~~ 宮地　友成（豊島小）	金子　順子（豊　小） 石井　幸恵（豊　小）	金治　晴治（竜　野） 花本　次夫（広　島）
柳内　翠 長尾　源一 東　登基子	田中　稔彦（兵　庫） 岩田　鎮人（春日井） 花本　喬二（豊　小）	藤原　郁也（久比小）	白井　仁（愛　知） 平野　正宏（広　島）

総員約500名の参加予定

第13回全国バズ学習研究集会

大会運営役員表

指　導	名古屋大学名誉教授　塩田芳久先生	
会　長	新田正彦	（豊中学校長）
副会長	脇本　操	（豊高校区代表幹事）（斎小学校長）
〃	畑本達磨	（　〃　）（久比小学校長）
〃	木谷　陽	（　〃　）（豊高校長）
委　員	服部秀峰	（沖友小学校長）
〃	越田正記	（豊小学校長）
〃	日浦芳穂	（大浜小学校長）
〃	松浦宏守	（豊島小学校長）
〃	長谷川　敏	（豊浜中学校長）
事務局長	越智昭孝	（豊高校）
事務局次長	横手　茂	（豊中学校）
〃	吉岡　晃	（豊小学校）
〃	望月民雄	（豊浜中学校）
〃	永戸　享	（豊島小学校）

事務局員（豊高校バズ教育特別推進チーム）

岡本一士	（豊高校）
佐伯志津代	（　〃　）
竹田勝枝	（　〃　）
奥家豊治	（　〃　）
野村幸子	（　〃　）
笹原法義	（　〃　）
新開涼子	（　〃　）

基　調　提　起（要　旨）

はじめに

全国からお集りいただいた諸先生方、遠路はるばる御苦労様でございました。

はじめに、本来ならば全国バズ学習研究連絡会の責任においてやっていただくべき基調提起を、まだ実践のない当広島県豊高校区教育推進協議会がさせていただくことになった経過を述べさせていただきたいと思います。

昨年度末、お前たちのところで、第13回 全国バズ学習研究集会を開催してみてはどうかと、お申し入れがありました。

と申しますのは、部落解放運動の高まりの中で、同和教育運動が進み、広島県同和教育研究協議会の下部組織として、各町単位にある同和教育研究会が、それぞれの幼・小・中を一つにして組織されており、すでに日常的な取り組みが校種をこえて行われておりました。

また、一方、今春豊高等学校として独立を果たしましたが、当時の大崎高校下島分校が劣悪な教育条件の中で、いわゆる分校差別の中で呻吟しており、その差別をはね返すためには、なによりも教育内容の充実、すなわち、分校であるが故に低位とみられている生徒の進路保障をはかることが必要であるとして、これまた解放運動に学んで取り組みを始めておりました。

そして、そのためには、どうしても中学校との連携が必要であると考え、新入生の聞き取りに中学校へ出向いたのをきっかけに、中学校との交流が始まり、以前より豊浜中学、豊中学共に塩田芳久先生の御指導のもとにバズ学習に取り組んでおり、その成果もあがっていたこともあって、高校側も塩田先生の御指導を受けるようになる中で、多方面の交流研究が行なわれるようになっていました。

その結果、これまで、それぞれがやっていた公開研究会を、春季は豊中学校と豊高校、秋季は豊浜中学校と豊高校と合同で持つようになり、昨年夏、小・中・高合同合宿研修会が、一泊2日で持たれるところまで来ておりました。

その合同合宿研修会を契機に、9月以降幼・小・中・高一貫した教育推進組織を造ろうということで、各校代表が集まり、その上両町教育委員会の参加をいただいて、結成準備委員会が組織されました。

しかし、これまでの各校の実践の経過もあり、原則的には誰も反対はないものの、具体的には踏み出せない状況のままで年度末を迎えていたのでありました。

丁度そうした時期であり、時期尚早ということで御辞退しようとも考えたのでありますが、豊・豊浜両町の全面的なバックアップもいただいており、むしろ、そうした具体的な目標があることで一歩踏み出せるのではないかとお互いに確認し合い、組織の結成が決定されると同時に、本研究集会のお引き受けも決定したのでありました。

そして、6月に結成大会を持ち、具体的な研究テーマの設定が行われました。その研究主題と、推進の具体的な構成、9部会に分け、各部会に幼・小・中・高から参加し、実践を積み上げながら模索を続けていく態勢を一応創り上げました。

その内容を持ちまして、全国バズ学習研究連絡会、および懇談会に御相談申し上げましたところ、面

白いではないか。それでやってみろと言っていただき、全国集会の主題を「地域の教育課題をふまえた教育内容の創造」、当面の具体的な目標である。「幼・小・中・高一貫態勢づくりをめざして」を副題とさせていただいたといういきさつがございます。

そうした経過によって、私共が基調提起をさせていただいているのでありますが、この主題は私共の実践の裏付けがあるものではありません。一つの予測にもとづいた目標であります。

ましてや、バズ学習の取り組みに至っては、まさにこれからであり、今日おこがましくも公開授業と称して加入9校で授業を公開致しましたが、これは御参加下さった皆様に、この地域の学校の実態にふれていただこうという意図のもので、全くバズ学習にはなっていないと思っております。

ごらんいただいて、先進校の先生方はそのことをおわかりいただいていると思いますが、バズ学習とはどんなものか見てやろうとしておいでになった先生方が、私共の授業をみて、あれがバズかとお思いになられますと、塩田先生をはじめ先進校に申し訳けございませんので、一応お断り申し上げておきます。

ただ、そうだと致しましても、これまでにあまり例の見られない、幼・小・中・高一貫した教育態勢をめざした教育推進組織をつくることができましたのは、本第13回全国バズ学習研究集会を当地で開かせていただいたことによるもので、皆様にお礼申し上げたいと思います。

別に組織的に決定していることではありませんが、スタートで皆様のお力をお借りするのでありますから、当然のことながら、3年もしくは5年以内には、もう一度研究集会を持たせていただいて、そのささやかではありましても成果らしきものをご覧いただかなければと、私共は考えておりますし、それをめざして精進を続けていくつもりでおります。

地域の実態

地域の教育課題をふまえるためには、まず地域の実態を見極めなければならないことはいうまでもありません。

したがって、私共の地域の実態について少し述べさせていただきたいと思いますが、瀬戸内海の中央部にあって、いわゆる芸予諸島の中ほどにあります。この地域特有のものも無いとは申しませんが、私共は特殊な地域だとは考えておりません。

この地域の状況は、まさに今日の日本のおかれている状況であり、この地域の将来展望が打ち出されることは、また日本の将来展望につながっていると考えております。

当地域は、かつて瀬戸内海が交通の主要路であった時代、交通の要衝の地でありました。御手洗港として栄えた歴史を持っております。

したがって、文化の交流もはげしく、文化的な水準は決して他に比して遅れているものではありませんでした。

そのことは、この地域固有の文化遺産を持っていないことからも証明できます。この島にしかない民謡はないのかなどとたずねられることがあります。私共はないと答えるしかありません。

この地域で古くから謡われ、あたかもこの地域の古謡のように考えられている民謡は、全て日本で古

くから知られている、すぐれた民謡に源流が求められます。

つまり、よりすばらしいものを求めつづけた先祖の姿が、そこには浮かび上がってまいります。海に生きた人びとの進取の精神がうかがわれるのです。

その精神は、ずっと受け継がれてきました。

例えば、島なるが故に狭い土地 .近代化から取り残される条件である交通の不便さなど、困難な条件もありますが、一方では四方を海で囲まれているために温暖であるといった利点もあります。

そうしたメリットやデメリットと考え、この地の将来を考えた先輩たちは、早くも明治初年には、この地に適した作物として温州みかんの導入をしております。そして、栽培技術を磨き、まさに耕して天に至るということば通り、畑地として開墾可能な傾斜面を全て切り拓き、みかんを植えつづけてまいりました。

その過酷な労働に耐え抜き、島内だけでなく他の島へ、遂には本州にまで耕地を持つに至る苦斗の中で、広島みかんの主産地としての地歩を築いてまいりました。

その結果、昭和20年代を中心に黄金期を迎えたのであります。しかし、40年代以降、農政の歪みから生産過剰となり、価格の暴落によって生産費を割る現状にはなってはいますが、すばらしいエネルギーを示してきました。

また一方、豊島港を基地とする、広島県内最大の漁業は、約700隻の漁船によって 西日本一円に出漁をしております。

その漁業形態は、いわゆる一本釣形態で、今日大部分は延縄漁業ではありますが、通常夫婦二人の乗組みで典型的な小規模漁業であります。しかし、西日本一円の沿岸漁業に、新しい漁場の開拓や、漁法の発見、新しい漁具の開発は、大部分この豊島の漁民によって行われている事実があります。しかも、その人たちは満足に義務教育も終えていない人たちであります。

そして、今では自分たちで開拓した漁場を、地元の人たちから締め出される状況が続出し、苦境に立たされてはいますが、その生活にかけるすばらしさは眼を見張るものがあります。

ただ残念ながら、私共はこのすばらしさを教材化し切るところまでいっておりません。

しかし、この伝統も反面学庭生活に目を向ける時、子どもたちの発達を阻害する要因も作り出しております。

農家の基本的な生活形態は、かつてのように星をいただいて家を出、また星空をみながら帰宅するというほどのものではないにしても、子どもたちがまだ寝ている間に、学校に遅れるなよと声を掛けて家を出ます。そして子どもたちと接触のあるのは、夕食時をはさんでの数時間で、昼間の労働に疲れ切っている親たちは早く就寝します。

そうしたすれ違いの生活の中で、子どもたちとの対話の時間など殆んどないのが現実であり、その短かい時間すら今日ではＴＶが奪っているといえましょう。

また、先にもふれましたように、40年代以降生産費を割るみかんの価格に、生活が圧迫され出稼ぎを余儀なくされ、父親不在の家庭、あるいは両親不在の家庭も増大しております。

現在の不況は、それさえも許さなくしてきています。

一方漁業の方では、大部分の漁船が遠くに出漁し、正月と盆と祭以外には両親共不在であり、祖父母

や、兄弟だけで生活をしている子どもが半数を超えています。また、地元にいて毎日出漁している場合でも、潮流による漁法である関係から、朝3時頃に出漁し昼前に帰る。あるいは一晩中出ていて昼間家にいるという状況があります。

いわゆる共働きであり、不在家庭の問題であります。しかし、子どもたちのために家に居て欲しいなどとは言えない生活のきびしさの上に立たされています。

その結果、一般的には家庭で獲得されるものと考えられている基本的な生活習慣が、あるいは言語能力が身に付いていない現実があります。

次に、行政的に近代化を遅らせられた島は、島であることが即ち差別の対象とされてきた歴史があります。

島の住民であることだけで、あの島かと馬鹿にされた経験は、中年以上の人たちなら大なり小なり持たされてきました。

それは、残念ながら、そうした人たちに差別意識を持たす実態が存在していたことを意味します。曰く、島は便利が悪い、曰く、島は教育水準が低い、島には田んぼがないなど、さまざまな理由によって差別の対象にされてきました。

根本的には、そうした近代化に遅れそうな条件を持つ地域から行政施策をしなければならないのに、常に後廻しにされてきた行政差別にあります。

しかし、ひとたびそうした状況が生まれてきますと、島の住民たちの間には分裂が起こり始めます。自分たちだけは差別対象から逃れたいという発想から自己中心的になってまいります。また一方、そうした状況に追い込まれるから、いわゆる下見てくらせという発想も生まれます。他を差別しなければ立つ瀬がないという心境に知らず知らずさせられて行きます。

残念ながら、この地域もそうした意味では例外ではありません。現在でも、この小さな島の中で、他の地区を下げて言うことばが残っています。そして、その最底辺に被差別部落が位置づけられていることは申すまでもありません。

そうした差別構造の中で、戦後30数年を経なければ、島内に高校すら持つことができなかったのであり、高校教育を受けるためには島外へ、多大な経済負担に苦しみながらも出すことで将来展望を開こうとしてきたのがこれまでありました。

今日、同和教育運動を、民主教育の基底に据えて取り組んでいるのも、被差別部落の完全解放は、即ち、こうした私共の身の回りの差別を取り除くことに、直接的につながっている問題であり、私共自身の問題であるからであります。

本研究集会で、私共の願いとして、同じところを見据えている、同和教育とバズ学習の統合を言うのも、またこうした地域の実態があるからであります。

こうした地域の状況の中では、親たちの発想の中に、私の子でなくて、私たちの子だととらえる土壌はまだないと言わざるを得ません。

しかも、今日の社会は、依然として差別と選別の教育体制を強化しようとしています。人間を一片のペーパーテストで評定しようとしています。

これまで、いささか否定的側面を述べてまいりましたが、しかし、今日このような研究集会が開催で

き、しかも、この際先生方はうんと勉強して下さい。下働きは私たちでするからと言って、今日と明日私共を一切の雑務から解放すべく、多忙な時期にもかかわらず仕事を放って手伝って下さっている保護者のその姿の中に、教育疎外百年の重みと、それを受けた教育の中にこそ今後の展望を期待している地域の人びとが確実に動き始めていることも事実として受け止めていただきたいと思います。

本研究集会に期待するもの

地域の実態を、ごくかいつまんで申し上げました。細かく見てまいりますと、歴史的には七つの村で形成されており、それぞれの発展段階もあり、とても総括的にはお話できませんので、大きな流れを申したにすぎませんが、私共が地域の教育課題としてとらえなければならない大筋は、その辺りにあろうと考えています。

それでは、お前たちは今後どうしようとするのかと問われました時に、私共は現時点では明確な方向付けをまだ持ち合せておりません。

したがって、本研究集会において、先生方のお力をお借りしたいというのが、私共の虫のいい期待であります。

今日、これから始まります分科会には、数の割合はまちまちではありますが、確実に幼・小・中・高の先生方が参加しておられます。そして、それぞれの立場から実践を出し合っていただくなかで、必ず新しいものが生まれてくると信じています。その叩き台にしていただくべく、私共も各分科会に提案を用意致しております。

ただ、全般的には、次のように考えていることを申し上げてみたいと思います。

前述の地域の実態に対応して、私共がこの地域の子どもたちに期待するものは、よりよい地域社会を創造しうる子どもに育ってもらいたいということに尽きると思います。

そのためには、現状から将来を見通せる力、即ち科学的な思考力を身につけ、新しい価値感あるいは人生感を持ち、目標達成のために自他共に認め合う中で協同して進める子どもになってくれなければなりません。

そのことを目標と置き、地域の実態、とりわけ、その中での子どもの現実をみつめる時、まずなによりも地域ぐるみの教育態勢の確立があると思います。

今日の家庭の状況、地域の状況を考えた時、学校は学校、家庭は家庭といった仕切り方ができない現実にあると思います。

即ち、家庭、地域社会、学校の三者が有機的に結合して教育を進めていく方策をたてなければならないであろうということであります。

次に、今回の研究集会においては、昨年姫路での第12回大会にはありました同和教育の分科会がありません。

これは、バズ学習において、常に態度目標と認知目標の同時的達成をねらうということと、全く同じものととらえているからであります。

つまり、同和教育、即ち差別を見抜き、差別を許さない子どもを育てるということは、教育の全領域において目的的意識的に行わなければならない内容であるからであり、教育の基盤が人間関係にあるな

らば、教育の基盤として絶対に忘れてはならないことだからであります。

ただ、政党などの介入もあり、同和教育のとらえ方がまちまちであったり、あるいは地域によっては、いまだに全くそのことばすら聞かれない状況もありますが、そのことも含めて、全分科会において、その基盤にすえていただきたいという発想であります。

具体的には、取り残されようとしている子に常に焦点をあてていただきたいということであります。

次に、第4分科会から、第9分科会までの、いわゆる教科内容にかかわる分科会は、全て何と生活というように、生活ということばをつけております。もちろん、学校教育法においても、高校段階までは、生活に結びつけて段階的に示してあるのでありますが、そのこともさることながら、地域の教育課題が、生活から遊離したところに教科があるとするならば、おそらく課題はつかめないだろうという考え方から、このように設定をさせていただきました。

最後に、そうした取り組みを進める上での一貫教育態勢づくりでありますが、その第一点は当然のことながら、一人の子どもの立場から言えば常に一貫態勢であり、一貫していなければ困るという自明の事実があります。

しかし、私共の側からみますと、そのことは具体的にはどういうことを意味するのか。なかなか多くの問題をはらんでいます。

先ほど地域ぐるみの教育と申しました。その意味では、まず学校ぐるみの教育を成立させる営みの中で、校種を超えた、幼・小・中・高ぐるみの教育がなによりも必要であるといえます。

ところが、これを一歩押しすすめて、どうあるべきかを考えてみる時、態度目標を共通にすることから始めなければならないとか、つまづきの要因追求から始めるべきだとか、さまざまな問題が提起されています。

こうした、さまざまの視点の中で、まずこれから行こうではないかといった方向付けを示唆いただければと願っています。

おわりに

バズ学習の研究集会でありながら、バズ学習について、基調提起の中では殆んどふれることを致しませんでした。

一つには、私共にそれだけの実践がないことに起因致しております。

もう一つは、バズ学習が、すでに塩田先生御自身が述べられておられるように、教育の科学的研究の中で、教育の本質そのものの研究段階に至っていると受け取らせていただいて、私共のかかえている問題は、今日のバズ学習が全て包括している内容なのだと、大へん甘えた位置に立たせていただいたことにあります。

私共、私共と、自分のところに引き寄せて、しかも私共だけのためにあるかのような提起になってしまったように思いますが、どうか、御参加下さった先生方全てに実り多い集会に、これまた先生方のお力でしていただくようにお願い申し上げて、基調提起を終らせていただきます。

分 科 会　　提 案 要 旨

わが校・わが園

沖友幼稚園・沖友小学校

「伊予の島山彩やかに、波が呼んでる瀬戸の海、ここは平和の浜の里」と校歌にあるように、広島県の南端で南向きの斜面の段々畑に良質のみかんを産し、学区全部が農家で、児童数48名、幼稚園児7名の小規模校である。みかん産業の不振と過疎現象の中できびしい事象が生まれる。「わたりどり」方式といわれる複式学級の指導は、地域の特性と学習指導の二面から問題を見い出すことができる。

地域の特性の面では、へき地に育つ子どもは生活環境が他地域に比べ必要なすべての要素が存在せず（生活の単一性）地理的にも不便である。従って外的刺激が少なく、それにともなう思考活動の場が少ない。　学習指導の面からは、複数学年を含む小人数の学級編成の中で思考の多様化と深化ができにくく、また、単一学級に比べ教師との対面時間は$\frac{1}{2}$にとどまり、学習内容の深化を欠く問題、教師の交流がはげしく、継続研究が困難等の問題をかかえている。　しかし、子どもは、素直で明朗、且つ従順な点が長所としてあげられ、これを学習指導改善のための一つの視点として生かしていきたい。

複式学級のもつ悩みは、教材内容の精選、思考力をねる時間をどの様にして生み出すか等がある。そのためには、間接指導の効率化が一番問題になってくる。それらの問題解決の方法として、　①問題との出合いを大切にして主体的行動の持続ができるようにする。　②シート式磁気録音機を間接指導に導入し、間接指導といえども質の高い学習をする。　③子どもの自らの力、みんなの力によって問題にとりくみ解決していく力をつくりたい。　本年度は、複式学級で最も指導上問題点の多い理科、幼稚園では自然分野をとり上げ研究し、以上三点の実践を重ねていくことにしている。

研究主題　問題との出合いを大切にし課題をもって追求する子どもを育てる。　幼稚園では自然と遊ぼう。　低学年では発見したり、試したりして成功の喜びを味わせる。　高学年では経験をもとに課題をつかみ、すじ道を立てて確かめる。　研究仮設　学習の成立をとらえるためには、ひとりひとりの子どもがその子なりに課題を見い出し、その子なりに追求していく過程を大切にする。

A. 学習課題の成立

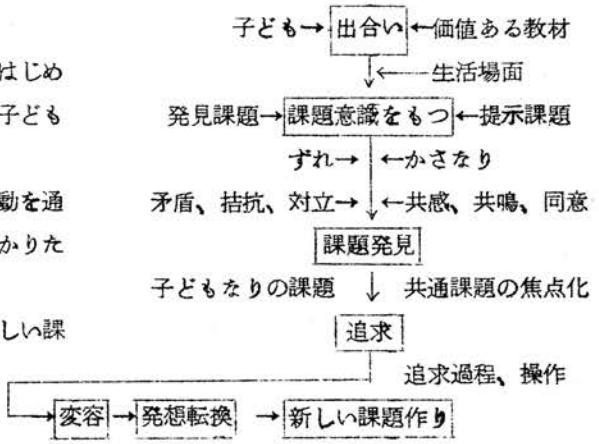
課題作りの手だてとして子どもと教材の出合いをとりあげる。その時子どもが主役の場合もあれば教師が働きかけることもある。生活場面は具体的代表的な場面を選ぶ。子どもは能動的、個性的である予想もたてる。

B. 課題追求と変容場面

ひとりひとりが主体となって課題追求をはじめると学習は拡充深化する。　追求過程では子どもに変容がみられるような指導をする。

生活課題を持続させる場合は、体験的活動を通してねばり強く追求する態度と実践化をはかりたい。

変容がみられると発想に転換を示し、新しい課題に結びつける。



わたしたちの学校

久比幼稚園・久比小学校

1. 学校の所在地　広島県豊田郡豊町久比2411の1番地（〒734-02 TEL084666-2351）

o 幼稚園（昭和25年開設）は、同敷地内に併設され、園長を小学校長が兼務する。

o 広島県の南端の島で大崎下島と称し、一部豊浜町が隣接している。

o 正面に県道をへだてて、今年度独立した豊高等学校がある。

2. 児童・職員数　o園児数 42名（男 21，女 21）　児童数112名（男 60，女 52）

o職員数 12名（校長園長兼、教頭、教諭6、助教諭2、主事、主事補）

3. 施設の状況　o幼稚園　木造2階建　396㎡

o小学校　鉄筋コンクリート3階建1676㎡（昭和 45年度）

o体育館　鉄筋　576㎡　　o運動場2450㎡（1人当り21.8㎡）

4. 児童数の推移と地域の実態　明治6年に開設、幾多の変遷を重ね、昭和 21年には高等科を含めて515名に達したが、その後特に 40年代後半より減少し現在に及んでいる。

o久比地区　総人口　1541名（男713、女828）　世帯数 481

o地場産業の主体は柑橘栽培（段々畑で山頂近くまで）で、出稼ぎ兼業農家が多く、みかんの安値、過疎化等により不況で経済状態はよくない。また、高令化現象がいちじるしく、若年層は島外に出るので後継者対策に悩んでいる。

o区民は、古くから教育に深い関心と熱意をもち、学校教育についても住民すべてが協力的であり、ＰＴＡ活動や奉仕活動（労働力提供）等には、惜しみなく積極的にとりくむ。

oＰＴＡは、子ども会活動、交通安全対策に熱心である。

5. 学校の特色　o交通事故ゼロ　17年と273日（昭和 53年 10月1日現在）

o特記すべき特色はないが、園児・児童は島としての閉鎖的な雰囲気の中で、平和で温和で素直である。反面、積極性に乏しいため自己主張することが少ない。精神的に進歩性を養い言語能力を高めようと努力している。

6. 今年度の目標と重点教科　o「ひとりひとりを伸ばすための授業をどのように展開していくか」

・教科の本質を見きわめ、自分の授業をつくり出す。

〔授業の組織化・考えさせる。教える・学習評価・反省・課題・研究と実践〕

(主)o音楽科・「正しい発声法を身につけ、歌唱力を高め、すなおに表現する心情を育てる。」

(副)o体育科・器械運動「跳箱に興味を抱かせその特性に応じた技能を身につける。」

広島県豊田郡豊町立豊小学校

広島県豊田郡豊町大長字前大浦4090の1番地

児童数310名　　学級数12　　職員数18名

校地面積11160㎡　校舎昭和48年鉄筋4階建新築　建坪4001㎡

1. 学区の環境

本校は、豊町の中央にあり、前方は愛媛県関前村との間に景観のよい海を船が走り、後方は一峯寺山の頂上まで大長みかんが栽培されていて、自然環境には比較的恵まれている。

学区内においては、殆どがみかん栽培を営み、農船を利用した出作が多く多難ではあるが、学区民こぞって教育熱は高く、学校に対して非常に協力的である。

2. 本校の概要

本校では、かって科学的能力の育成をめざして、科学環境を整え、理科教育に力を注ぎ、ソニー理科教育振興による賞を2回(昭和34、35年)受けるほどの功績を挙げている。

現在では、教育機器を活用し「子どもひとりひとりの能力を開発し、学習効果を高める方策を深めて」の研究主題をたて、教育研究の基盤としている。

(1) 新校舎

校舎は、バッテリー型教室、学年棟等、いわゆる新しい学校スタイルで教室自体がゆとりを持った新校舎である。教科担任制を一部実施しつつ、教育機器の全面的利用に新機軸を求めている。

教育施設の特徴は、同軸共聴方式を採用し各教室からそれぞれ全放できる設計の点にあり、放送室は3元デスクアンプのほか、全館連動時計の親機の設備があり、調整室は、カラーTV調整卓の操作室のほか研究室の兼用である。スタジオのほかに視聴覚教室、音楽教室がスタジオにもなるようになっている。また視聴覚室にアナライザー、プラネタリウム室に五藤プラネタリウムE5型が設置されている。

(2) 教育機器の活用

児童会の放送部が中心になって、月曜日の「学校放送」はスタジオから、火曜日の「学級放送」は音楽教室から音楽の実演を放送している。

主題研究部や視聴覚運営委員会、同係によって授業研究を中心にAM放送、TV利用、VTR、TA、OHP等の導入による、教授二学習過程の最適化など、作業目標に従いながら実践を続けており、51年2月第1回の公開授業を実施し、54年2月第2回公開授業を予定している。

(3) 教科担任制

教師の特性を生かすと共に子どもを多面的に指導していくために、学年共同経営を5・6年生に実施して8年目になる。多面的にみるために火曜日の放課後、学年部会を開き共通な意識のもとに水曜日の学年朝会で指導している。また授業研究グループで開き深まりのある教材研究をしている。

4. 今後の目標

○主体的に問題のできる子どもの育成をはかる。○機器の特性を生かす授業の創造をしていく。

○教師の特性を生かすための分担と協力の指導体制をさらに深めていく。　○望ましい環境を構成する。

校章のシンボルになっているように、太陽に向かって、子どもは希望のある明かるい若芽のように育っている。私たちは両手を広げ愛情を持って育てていきたいものである。

学 校 紹 介

豊町立豊中学校

1. 基本とする信条　教育とは、先達者と後続者とが一定の目標にむかって、具体的で計画的に創造にむかって、継続する相互の営みであることの確認の上に立って実践を進める。

2. 学校経営の目標　(1) 生徒が喜びを持ち、全力をうちこんで、ともに力を出しあい、練りあいながら自己実現力を高める学習活動づくりを目指し、(2) 父母と教師が気軽く学習を重ねあい、生徒の進路保障に向って協同し、地域の教育づくりに向う活動の推進をはかる。(3) ことに教職員は、専門職としての資質と能力、とりわけ、「生徒を見る力」「教材を見分ける力」「学習を組織する力」をバズ学習法のとりくみに焦点をおいて、出しあい、練りあい、確かめあいながら実践により高める。

3. 教育目標　人間の基本的欲求、即ち、「知りたい、あじわいたい」「ともに伸びたい」「たくましく、はつらつと生きたい」「あせをだして、工夫をこらして作り出したい」「正しい道すじにそって生きがいを得たい」の願にむかって、一つ一つ、一歩一歩近づくことの力をつけさせたい。

4. 具体的な行動目標　「知るために」ためしてみて（テストを正しく活用）、問題点をはっきりする。問題点は勇気を出して進んで、まわりの人に情報を求める。提起をうけた問題点は事を正して受けとめ、自己の情報を出し、少しでも多くの人の情報とからみ合せ練り、整理してより確かなものにする。確かになったものは自分の言葉で説明する。「なかまとのびるために」　素直に自分を出し、気軽く自分を役立たせて自己発見をする。他のよさを認める。自他の役立つ場としてのグループ、共通の課題には集中してきびしい交流のあるグループ、更に所属して良かった事実をつくるグループづくりにつとめる。グループがより結合してより深く学習しあえる学級集団をつくる。「たくましく、はつらつとするために」　ルールを科学的にわきまえる。ことに交通ルールや、生活のルール。生活のリズムをつくり、リズム的けじめのある行動をする。一方に偏りがないようにきびしく律する。進んで体力を練り、健康をつくる。常に背すじをのばし、胸をはった正しい姿勢を保つ、「汗と工夫をだしてつくりだすために」　労作に気軽くとりくむ。一つの方法にこだわらず、発想をかえてやってみる。試みたら、評価して、よいところを相互に承認しあい、不充分なところに発想を出しあって、もうひとふんばりがんばる。わずかな事でも、やりとげた事実を認め喜びあう。やってみることから学ぶ。「正しい道すじで歩むために」目標を定めて、めやすをもって順序立て、やってみて、どこがどうであったか整理評価して、更にねばってみる一連のすじ道で実践をする。

5. 努力していること

○学校の緑化については、教師と生徒が「あせと工夫」をだして手造りでやろうという事で出来上ったものであるし、自分達の育つ姿を夢にたくして卒業時に手植えをして残してくれた累積である。

○掃除や校庭の草むしり、わずか15分であるが「汗と工夫」と「協同」の労働学習に位置づけている。

○自主的・協同的・創造的学習活動づくりの基本づくりを六校時終了後の30分学活に位置づけている。

○本年度、見通しをもって、自主的・協同的・創造的な能力・態度を高める意図で、単元単位（ユニット）学習法の実践にとりくみはじめた。単元を通してのプリテスト→単元の見通しての内容説明→課題提示と自主的・協同的解決活動→まとめ→ポストテスト→単元の補充強化の一連の学習法である。

地域学習会へとりくみをはじめた。

学 校 紹 介

豊浜町立斎小学校

斎島に渡って来られる旅の方はめったにいない。交通の不便と島の産業経済のもたらすゆえんであろう。二棟あるとはいえ、平屋建て、普通教室に換算して5教室分しかない校舎をみた或る旅の方が、「これ学校か？」　「そうよ、ちやんとした独立校で校長も教頭もおるんで」と話し乍ら通り過ぎるのをみたことがある。

本州まで最も近い所まででも 27Km、本町の中心である豊島（地教委・役場所在）から7.7Kmの海上に浮かぶ0.7 Km²の孤島、これが豊浜町大字斎島であり、へき地指定3級地である。51世帯100名程の人口であるが、過疎の波は容しやせず今尚減少の傾向を続けている。

児童数は少なくとも、学校を存続して欲しいという区民の要望と、それにこたえる町当局、教育行政の努力によって独立校として存続し、本年度は在籍児童数2名と、県費負担教員3名、町費負担職員1名の典型的な小規模校である。報道関係者が取材を申込む回数の多いのも当然か？、へき地教育の研究会ならともかく、バズ学習研究での公開授業実施については二の足を踏んだが、地域の実態を直視するなかで、教育とは何か、指導とは何かを追求していく内容の研究会ということで積極的に参加することにした。

児童数2名ということで、指導が行き届いていいだろうといわれる方が多いが、2名ということで多くの問題点がある。問題解決学習等において集団思考の場の設定が甚だ困難なことであり、子ども相互のはげまし、認め合いが少なく、また、慣れ合いということから意志表示があいまいになり易く、いわゆる根性も育てにくくなる。加えて、児童数2名という安易な気持から子どもの実態を固定的に捉える危険性のあることである。

指導にあたっては、暖かさと厳しさを常にコントロールしてなければ、教育はだ性に、なれ合いに流される危険性を多分に含んでいる。この点を強く意識するなかで本年度の具体目標を、①、体力づくり②、基礎学力の充実、③、教師も含めて認め合い、はげまし合う仲間づくり、④、基礎的生活習慣（社会性）の育成の4点に集約して実践している。

なかでも、自分の意志をはっきりと相手に伝える表現力の育成と基本的生活習慣（社会性ともいい得る）の陶冶が地域実態からして特に重要課題であると捉えている。

2名（5年男子、3年女子各1）しかも、学校生活・地域生活を問わず常に行動を共にしている実態では、話す内容に限度があり、主述を明確にしなくとも意志の疎通は得られる現状である。大きな集団に所属した場合に色々な面での表現活動が不充分であればある程進路保障に大きな障害となる。相手によく解る話し方、最後まではっきりいい切ること、相手の話す内容を正しく聞きとる力の育成等に努めている。また、少数での学校生活では具体的事実を通しての対人関係のあり方を反省し学び合う機会が極めて少ない。これら課題を学校教育全領域を通し解決していく筋道を明らかにしない限り、子どもに真の学力向上を期待することは出来ず、記憶中心の学習にとどまる結果となる。ワンツーマン型式では記憶中心的なものには効果的であるとしても、思考力、人間性の面に大きな問題がある。典型的な小規模校に於ける教育とは、指導とはということについて、本研究大会を通して明らかにし、迫っていくなかで、1対1の教育を創造していきたい。

○大浜の実態　　大浜小学校

(1) 位　置

広島県の南端、愛媛県と県境を接する。周囲 20 キロメートルの大崎下島の西部に位置している。

(2) 産　業

離島振興法や過疎対策法等の適用をうけるなかで第一次産業の振興（柑橘栽培、漁業）に重点がおかれ開発がすすめられている。尚大浜の主要産業はミカン栽培である(柑橘家庭226戸漁業家庭 9戸)

(3) 家庭の環境

出稼ぎ兼業化は家庭経済を豊かにし、生活水準を高めてきた。その反面父親不在の家庭がふえるとともに、仕事の関係でそろって食事をしたり話し合ったりといった心のふれあいや、やわらぎの場が失われているようである。そこで児童が下校しても留守家庭が多く、多くの子どもは夕方おそくまで、学校・神社の境内で友だちと遊んでいる。

(4) 課　題

農業経営の構造改善、生産技術の向上による良質みかんの生産等によって現在をどう切りぬけるかが当面の課題である。また、子どもの生活環境の改善、留守家庭でも自分で生活リズムを整える子どもに育てるかが教育的な課題である。

○学校の概要

(1) 沿　革

明治5年学制施行の翌年の明治6年 12月6日文明舎と称し、創立106年目を迎える。

(2) 児童数・学級数・職員構成

○校　長　1　　○教　頭　1

○教　諭　4　　○養護婦　1

○事務員　1　　計　8名

学年		1	2	3	4	5	6	計
学級数		1		1		1	1	4
児童数	男	7	2	2	4	5	6	26
	女	1	8	4	5	6	2	26
	計	8	10	6	9	11	8	52

(3) 本校の歩み

○昭和 46年　2月 24日　広島県へき地教育研究会推進校中間研究発表会

○昭和 47年 10月 20日　広島県へき地教育研究大会

○昭和 49年　2月 26日　文部省研究指定校研究発表会

○昭和 50年 10月 22日　全国へき地教育研究大会（3日間）第8分会場体育科発表

(4) 児童の実態

○少人数でお互知り過ぎてよく口論するが、その反面覇気に乏しい。

○ともすれば依存的になり、主体的な姿勢や、ねばり強さが足らない。

(5) 教育目標

いつも明るくはきはきとものが言え行動し、ねばり強く最後までやりとげる子どもを育てる。

○情操が豊かで、健康な子ども

○不合理や矛盾を許さないで真理を追求する子ども

○自主的に仕事をし、最後までやりとげる子ども

以上を学校の目標とし牛歩ではあるが地域の支援を得て、同人協力へき地教育にとりくんでいる。

豊島小学校　13学級　393名　　豊島幼稚園　5学級　95名

豊島は広島と今治を結ぶ内海航路の寄港地で、愛媛県と境を接する周囲12Km、面積5·2Km² の瀬戸内海の島で、産業は柑橘栽培の農業と大部分は小型漁船による（一本釣り・はえなわ漁法）水産業が主なものである。

しかし近年では200浬問題による漁獲の減少で、各地からのしめ出しに、漁業権確保の為移住する家庭が多く、過疎化現象が起き、かっては近在にはまれな1000人に余る児童を擁したマンモス校も、390余名に、数年後には300名を割りそうで年々減少の一途をたどっているのが現状である。

特に漁業家庭では両親が揃って3ケ月以上にも及ぶ長期出漁の留守家庭もかなり多く、幼稚園・小学校・中学校の子ども達の中には学寮で生活している者、子ども達だけで生活をして通学、通園している者も50名余りとなっている。

児童はいたって素直で、明朗であるが、基礎的学力と基本的生活習慣に課題があることから、子ども達の進路を保障する為、基礎学力の充実に努め、学力の向上を計ることを主題として次の様な教育目標をたてた。

教育目標

ひとりひとりを大切にし、お互の立場や願いを認め合い、助け合い、補い合って学び、健康で明るく情操豊かな子どもの育成に努める。

努力目標

1. 基礎学力の充実
2. 健康教育（疾病予防と体力づくり）
3. 学習集団づくり
4. 問題行動の発見と健全育成

具体的計画

1. 基礎学力の充実
   - ○算数科指導主事の指導訪問を受け授業研究を進める。
   - ○計算力と漢字の読み書き能力調査を期末毎に実施する。
2. 健康教育
   - ○業間体育（毎日15分間）を設定し、体力づくりに努める。
   - ○体力テストを実施して、その診断をし、体力についての自覚を高める。
   - ○給食の偏食を矯正し、食べ残しをしないように給食指導を行う。
   - ○給食後の歯みがき、うがいの励行をする。
3. 学習集団づくり
   - ○算数科の授業研究で指導過程と併せて学習集団づくりの研究をする。
   - ○人権学習、学級会活動を充実する。
   - ○児童会、委員会活動、学級の係活動を有機的に結びつけ「わたし達の学校」を意識づける。
4. 問題行動の発見と健全教育
   - ○児童を全職員で細かく観察して記録をとり、全体研で問題を分析して、課題を設定する。

豊浜中学校紹介

1．本校がバズ学習を取り入れた動機

辺地のため経験の幅、言語量が貧弱で、消極的になりがちな生徒の実情を克服して主体性を身につけけ、意欲的に学力を高めるには、生活態度の確立なしには学力の向上は望めない。人間関係の好転なしには生徒を変革することは困難であるということと、教育の進展は父母や地域住民の理解と緊密な連携が重要であるという考えのもとに、地域住民に教育に対する関心を深めてもらうためにゆさぶりをかけるというものであった。

2．本校におけるバズ学習のあゆみ

○復習バズ　毎日放課後30分、生徒の教科委員を中心に復習バズにとりくむ。(昭和42～45年度)

○町内バズ　地域父母の教育に対する啓蒙と学習の手だてをつかむことをねがい町内バズにとりくむ。(昭和46～47年度)

○学校生活でのバズ学習　清掃、クラブ活動、生徒会活動の中へ積極的にバズを活用し、給食教育の徹底をはかる。(昭和47年度)

○地域課題をふまえた道徳教育　「道徳授業における指導法の研究」を行なう。(昭和48～49年度)

○創造力を高めるバズ教育　「地域課題をふまえた指導のあり方」にとりくむ。(昭和49～53年度)

3．本校における公開研究大会

昭和43年　2月21日　第1回バズ学習研究大会
昭和43年11月22日　第2回バズ学習研究大会
昭和45年　1月23日　第3回バズ学習研究大会
昭和45年10月28日　第4回バズ学習研究大会
昭和46年12月　3日　第5回バズ学習研究大会
昭和47年　8月　2・3日　第4回全国バズ学習研究大会(第6回バズ学習研究大会)
昭和47年10月20日　第12回広島県へき地教育研究大会(第7回バズ)
昭和49年10月24日　広島県道徳教育研究大会(第7回バズ学習研究大会)
昭和50年10月22・23日　全国へき地教育研究大会(第8回バズ学習研究大会)
昭和51年11月26日　第9回バズ学習研究大会
昭和52年11月17日　下島地区秋季公開研究会(第10回バズ学習研究大会)

4．生徒の地域別通学状況

地域	山崎	小浦	内浦	立花	大浜	斎(寄宿舎)	学寮	合計
学年	徒歩	徒歩	徒歩	渡船	渡船	徒歩	徒歩	
1年	8	30	7	1	8	2	10	66
2年	7	59	17	3	6	1	3	96
3年	3	49	17	1	9	2	5	86
合計	18	138	41	5	23	5	18	248
%	7	56	17	2	9	2	7	100

豊高校までの30年の歩み

1．本校は、今年4月広島県立大崎高等学校下島分校から、分離独立した高校であり、昭和23年に昼間定時制として発足した。

設置学科は、農業科（のち園芸科）と生活科（のちに家政科）であり、地域産業の中心である。かんきつ栽培の後継者育成を主眼に、施設、設備は全額地元負担で、地元民の勤労奉仕でつくられていった。しかし、昭和46年度、園芸科入学生が10名となり、しかもかんきつ産業の不振から、島内にとどまることのできない状況があるなかで、地元中学の希望調査を勘案し、より広範に対応できる学科として、普通科への転換をはかった。（昭和51年に家政科募停により普通科2学級へ）

2．本校の30年間の歩みは、この地域の教育課題、教育要求の歩みでした。

島であるが故に、差別と分断のとりことなり、教育疎外を疎外と感じなくさせられていた歴史、そうさせていたものに対する怒りが真に地域高校として根づくための取り組みとなっていった。

勿論こうした取り組みは、分校に対する、社会意識としての差別観念との闘いであり、私たち自身その方向性を見失っていた時期もあった。

こうした状況に対して、明確にその方向性を示してくれたのが、昭和44年度頭初に起きた、財称語差別事件と、それをめぐっての部落解放運動の高まりの中で、私たち自身がおかれていると立場の認識ができた時でありました。

3．本校における教育内容の創造、進路保障の取り組みは、まず生徒の枠組みの中に迫ることから始められた。つまり、われわれ教師は、自分の都合のいいように事実と所見を混同して生徒をとらえていることに気付かされ、個々の生徒をとらえきる取り組みとして、新入生に対する中学校からの聞き取り、度重なる事例研究の実施、生徒の親たちの意識変革をはかる場として、春、秋二度の地区別懇談会、学校と家庭とを結ぶかけはしとして、ＰＴＡ機関紙「かけはし」の発行を進めてきた。

その間、昭和46年尾三地区高校分校部が結成され、私たちと同じ状況で呻吟している仲間のいることを知り、横への運動の広がりを得た。（以後、教科別の研修会、夏の全員合宿を続け、今年度独立校化に供ない解散。しかし、その精神を発展し、広島県解放研究（高校部会）の発足）

しかし、私たちの様々な取り組みも、学力保障につながる授業の中味に、さしたる進展がみられなかった。「わかる授業」の創造をめざす取り組みが、生徒が「わかりたいと思う授業」からかけ離れていた。

4．昭和49年度の入学生が、ある課題を提示した時、「先生、班でやっていいか」という問いかけをしてきた。中学校で何か学習法らしきものを身につけているらしいということで、中学校へ出向いたのが昭和50年2月のことでした。

昭和50年5月から、50分授業を5分間短縮し、掃除の後に30分学活を持つ日程に踏みきった。

以後、朝バズ→教科授業→30分学活→家庭学習という学習のサイクル化をめざす取り組みを続けてきている。

真に地域高校として根づくためには、地域の課題を踏えた教育内容を創造していかねばならないということから、自主性、協調性、創造性を本校の教育目標としている。

広島県豊高校区教育推進協議会 会員校

学　校　紹　介

第１分科会（一貫態勢づくり）

幼・小・中教育の共通の場を求めて

兵庫県　姫路市立船場小学校　　三村寛次

1．一貫態勢づくりの意義するもの

2．小学校の立場よりとらえられる一貫態勢教育の現状とその反省
　――船場小学校（市街地校）の実態を中心に

(1)　同和教育の面から

○幼・小・中の異校種間研修のねらいとその実情

○幼から小、小から中をつなぐもの、地域社会の中で

・児童の変容のすがた
・教師の連帯感
＞ ジレンマ

(2)　生活指導の面から

○児童生徒の問題構造と生活指導

○児童生徒の愛護補導　　学校－ＰＴＡ－地域社会

○消極的な非行防止から、積極的な社会の一員としてのあるべき姿へ

(3)　学習面（特に言語認識）から

○小学校教育の実態と幼・中に望むこと

○保護者からみた幼・小・中の教育から

○解放への学力づくりをめざして

3．一貫態勢づくりの視点から小学校教育を見直して

○横わりの学年中心主義に、たてわりの教育を

・奉仕活動　・児童会活動　・校外児童会
・子ども会活動

○同和教育における小学校内での一貫態勢を

4．一貫態勢教育のあるべき姿の模索

○高校入試をめぐって

○姫路の地域性

第１分科会（一貫態勢づくり）

一貫教育態勢づくりの具体的な方向付けを模索する。

兵庫県　姫路市立白鷺中学校　　山本亀夫

1．はじめに

教育とは、いうまでもなく、人間の教育のことであり、知・徳・体の調和的な発達を遂げる人格の形成者として、価値ある目的意識に貫かれた人生を生き抜く人間を育成することである。同和教育も「人間尊厳の真実を貫き、その事実をつくり上げていく教育はどうあるべきか。教育の本すじはなにか。」を追求するもので、どう生きていくべきかを考えるとき、その根底に「差別を許してはならないものである。」ということを基盤にすえなければならない。したがって、生徒ひとりひとりに応じて、ひとりひとりを生かす指導に最大の努力をはらわなければならない。さらに生徒は未来に無限の可能性を持っている。その可能性を追求するためにも、毎日生きがいのある生活をさせたい。このことをふまえて、一貫態勢づくりの方途を考察してみたい。

2．本校の地域の実態

(1) 姫路市の中心部を校区にもち、かつ大部分が商業を営み、一戸独立の商業地域で、職業構成も多岐にわたり、土着の住民の少い所で、経済的にも上下の差が大きく、在留外人家庭もかなり多く混住している。

(2) 城下町として栄えた町でもあるので、大人たちの意識の根底に深く食い入っている身分意識（社会の階級構造を反映している意識）が生活の構造の中につくりあげられている。子どもの民主的成長をはばむ地域社会（特に家庭）の条件が子どものパーソナリティのうちに内在している。

(3) 地域社会を支配しているさまざまなものの見方、考え方を子どもたちは受けとり、そのパーソナリティのうちに定着させている。むしろ人間解放を阻害するものをもつ。

(4) かっては他校区から越境通学生が多く、いわゆる有名高校への進学率が高く、名門校といわれた意識がまだ消えないでいる。うらがえせば、学習結果にこだわり、子どもの生活基盤が「競争」と「せきたてられ」にあり、利己的な保護者や子どもが多い。

3．地域の教育課題

(1) 主体性、可能性を促進する

○学習や生活の場のあらゆる面において、現実の問題をみつけ、互いに認め支え合い、励まし合うことによって、みんなで解決する方法を仲間とともに考え、それに基づいて行動できる主体的な子どもを育てる。

○学習や生活を通して生きて働く力を身につけさせ、可能性にいどむ子どもを育てる。

○同和教育の場で認知が先走り、態度目標としての行動力、実践力が遅れるという知と実践のズレを克服するため認知獲得と態度形成過程における望しい経験獲得をはかる。

(2) 教師の姿勢

教師は「概念くだき」の筋道を二つの根源にさかのぼって、これをくだく手だてを組織せねばならない。

図のように仲間づくりを阻害している根拠が多くは子どもたちの概念にあり、この概念がくだかれなければ生き生きとした人間関係は恢復されないのが常だからである。

(2) 「なにを学ぶか」より「いかに学ぶか」

社会の変化はつねにけわしく、教育内容を社会にあわせて設定することじたい無理であるという認識が強まっている。したがって今日では「何を学ぶか」というだけでなく、「いかに学ぶか」ということの方が重要。現在の社会に適応する教育内容を学習することは、最小限度必要なことではあるが、それだけにとどまらず、未来社会に生きるための学習こそ必要なのである。

5. 具体的な方向づけ

o人間性を豊かにする生きて働く力を育てる。

① 新しい学力観

学力は知的な学力であり、生活力、創造性といった、いわば人間的な学力がおろそかにされていた。現在では人間の全人的発達、個性の開花、個人の自己実現等という個性を持った存在として人間が尊重されている。したがって、個人の知性の開発・発達が学力問題の中心をなすと考えることは妥当であろう。

知性の発展が当の子どもたちの頭だけに収められてしまう事柄でなく、まさに、生きて働く力になり、生きる力へと彼の行動力へ転化するものとしてとらえなければならない。

広義で知識がみずからにとって生きる力（あすの生活をきりひらく力）にと転移するような学習指導が展開される必要があると考えられる。

そのために次の二点が留意されなければならないであろう。

a. 学習内容が転移し、発展する基本的事項（知識内容および、学習のしかた）であるということ。

b. 学習者の主体の経験やイメージや情意的活動と結びつき、学習の意味がわかるような指導が展開される必要があるということ。

小数の核となる事がらを学ぶことによって、それが縦にも横にも、放射状に広がり発展していく可能性があるものを学習内容の中心におく。

「今、自分は何をしようとしているのか。そのために自分は何をしなければならないのか。どうすれば発見されるのか。それで、十分なのか。」という問いを発し、それに従って行動できるということが、プロセスを学ぶことの本質ではないだろうか。その問いに従って行動できる人間をつくることが新しい学力の内容として考えられる。従来の教授内容の定着、記銘、そして、再生という学習の基本形をまず変えなければならない。

② 学習の意味がわかる指導

知識が個人にとって意味のあるものとして、学習者の主体に深く結びつかなければならないということ。

○ともに学び合い、自他の解放をめざすとともに、指導を確かなものにし、ひとりひとりの学力を高めていく。進路保障につながる学力の育成。

(3) 地　域

○親子の対話を大切にして、共に学ぶ体制づくり。

4．一貫態勢づくりのための基本的な考え方

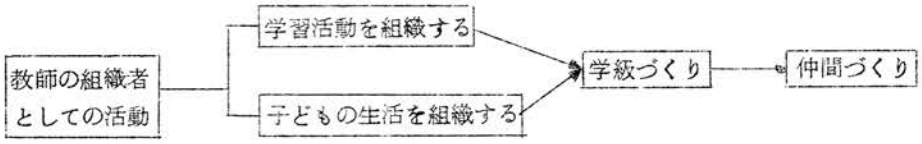
学習は自分自身その中核としての自分の反省であり、自己更新の喜びがある。その意味で自己を見つめる時間や作業を用意することは、教師や学校の任務であり、その任務をはたす機会や方法は至るところにあろう。子どもたちのためにも見つけ直さねばならない。生きることについての期待目標にかかわる。それを求める心の構造＝生きがい感とその対象になるもの＝生きがいの対象という側面を持つ、生存の充実、変化、未来性、自由、自己実現、意味と価値の欲求によってみたされる。

(1) 教師の活動の再確認

○生活を組織する。

教育活動はまず第一に組織者の活動である。学級づくりの重要な基礎となる。学級づくりとは、「学級の子どもたちを仲間として高める。ことであり、それと同時に、そしてそのために「子どもたちの学級における生活を組織する」ことなのである。したがって教師の活動は子どもたちを仲間として組織することであると同時に、子どもたちの生活を組織することなのである。

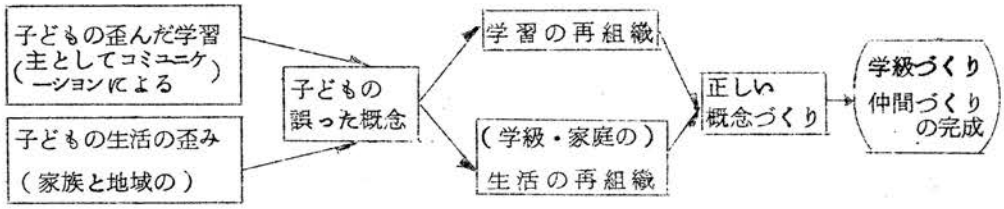
教師の教育活動はとにかく組織者の活動であるということを確認する。



「つまり仲間づくり」は学習活動をどのような質のどのような組織にするかによってきまるし、子どもの生活をどのように組織するかによって決まる。

○概念くだき

子どもの頭の中につくられた一定の概念を取りのぞき、この概念と固く結びついた一定の感情をほぐし、もっと事実にそくした科学的な概念におきかえる。そして正しいものの見方、感じ方、考え方を可能にし、そのようにして子どもの行動を生き生きとさせようという操作の全過程をいうのである。



知識の獲得の過程が個人の関心や興味や経験と深い結びつきを持ちえないというところに「落ちこぼれ」という学習不適応児たちを生み出す原因の一つがある。

学習課題が子どもたちにとって興味あるものであるというだけでなく、学習意欲を持続、強化させる学習指導が必要である。

兵庫県でも生涯教育を提唱している現今、学習意欲は自らの学習計画をたてることのできる人間というときの中心をなすものである。学習意欲はまさに学習を推進していく力である。特に小学校段階では、抽象的なコトバで思考をすすめる以前において、自分の持っている経験による裏づけやイメージに結びつけ、それを変容していく指導が必要である。そうすることによって、固有の「知的装置」を訓練し、単に知識の受容器としてでなく、それを修正し、発展させていく習慣がつく。

つまり、学習者にとって、知識が自分以外にあるのではなく、自分自身を変えていくために存在するものであるということを学ぶことになる。

③ 自律性の育成

自発的学習態度は自律性の問題である。人間には自ら成長しようとする欲求があると認めなければならない。この欲求が自律的に働くようになるのは、小学校高学年以降であるとしても、それ以前の子どもに対してもこの欲求を育てる方向での適切な指導が必要である。

子どもの学習面ばかり気にして、他の生活面を軽視してはいけない。「勉強さえしてくれればよい。」という親の態度が学習への自覚を持たない子を作り出す甘いしつけを生み出す源である。子どもの独立心、自主性、自己責任性を育てる配慮が学習面に限らず、子どもの生活全般において必要である。

o承認、信頼

人だれでも「承認されたい」「信頼されたい」といった欲求を持っている。この欲求が満されないと、より高次の「自己実現の欲求」は発達しない。自発的学習態度を育てる根本的条件はこの承認と信頼である。子どもを肯定的に信頼し、承認することが、子ども自身自己の成長を目ざした自律的態度を育てることにつながる。

6. 終わりに

どのような社会においても自分の力で生きていける人間、個性的な適応と自己決定の力をもった人間そのような生きる力を持った人間を未来に生きる人間と考えられる。人間は自分なりの生き方をつかみとり、自分のやり方で歩むほかない。その方向は社会や周囲の人々が決めるのでなく、自分で決めなければならない。教育はこのような自己選択的な方向決定に対する援助活動であり、それによって個人の中に主体性という羅針盤をつくり上げることだといえる。

第１分科会（一貫態勢づくり）

研究主題にかかわって

― その模索の方向付けは ―

豊高校区教育推進協議会　横　手　三重子　（久比幼）

はじめに

本研究集会の研究主題である「地域の教育課題をふまえた教育内容の創造」を目標にかかげ、その目標に迫るための基盤としての幼．小．中．高一貫教育態勢づくりをめざして、広島県豊町．豊浜町の両町に所在する全ての学校教職員が結集した教育推進組織が「広島県豊高校区教育推進協議会」である。

しかし、このテーマはひとつの見通しを立てたものにすぎなく、具体的には何一つ実践として報告できる内容を持ち合せてはいない。

したがって、本研究集会において、先進的な実践を積んでこられた方々から多くの示唆をいただき、今後の活動の具体的な方向付けを明らかにしたいと願っている。

結成に至る背景

今春、豊高校区教育推進協議会が結成されるに至った背景としては、次の二つの要因があった。

その第一は、昭和44年に豊町、46年に豊浜町、それぞれに部落解放同盟支部が結成され、解放運動が前進する中で、同和教育運動も高まり、両町共に、幼．小．中の教職員で組織されていた同和教育研究組織の活動が活発になり、日常的な研究活動が行われ、両町の交流も大崎下島地区というブロックとして、しばしば行われてきた。また、両町の小．中ＰＴＡも下島ＰＴＡ連合会として結集されている。

次に、早くからバズ学習の実践を積んできた。豊浜中、そして豊中。一方できびしい分校差別を教育内容ではね返そうとした豊高校（今春まで大崎高校下島分校）とが、入学生徒の進路保障をめぐっての連携から、塩田芳久先生のご指導を一緒に受けるなかで、バズ学習を軸に、春季公開研究会は豊中と豊高、秋季公開研究会は豊浜中と豊高と、共同で開催するところまで来ていた。

こうした二つの教育推進の流れが、両町教育委員会の物心両面における全面的なバックアップによって一本化されたのである。

いうまでもなく、その背後には離島なるが故に、永い教育疎外に呻吟してきた地域住民の教育に対する深い願望があったのである。

地域の教育課題とは

今後の活動の方向付けを明らかにするためには、地域の教育課題とはどういう内容をもっているのかを具体的に模索しなければならない。

そして、その前提として、まず両町の児童．生徒をとりまく地域の実態を、とりわけ家庭状況を中心に把握しなければならない。

この地域における産業は、広島における温州みかんの主産地としてのみかん栽培が農業の全てである

と同時に主産業である。

一方、豊島地区は、延縄漁業・一本釣漁業の県内最大の基地であり、その大部分は沿岸漁業ではあるが、他県に出漁しており、しかも家族（ほとんど夫婦）による乗り組みである。

したがって、地域住民の90％以上は、このどちらかに関係していることになる。

その両者に共通していることは、親がたとえ在宅していても、子どもの生活とは完全にすれ違いの生活であり、しかも、柑橘の生産過剰からくる低価格によって出稼ぎを余儀なくされており、不在家庭の全体に占める割合はますます増大している。

こうした状況の中で、児童・生徒が従来は家庭で獲得されるものとしてきた、基本的な生活習慣が充分に身に付いていない現状がある。

特に不在家庭においては、対話の欠除からくる言語能力の未発達がみられ、また、そうでなくても、ＴＶなどに時間がさかれ、家庭での対話の機会が大巾に減少している。

一方、過疎化現象が進む中で、自己中心的な発想も強くなり、よその子はよその子とする傾向があり、問題行動等にも、見て見ぬふりをする場合が多くある。

また、地域産業の不振は、地域の将来展望を暗いものにし、青年層の島内定着の条件をなくし、住民の老令化に拍車がかかっている。

たとえ、若者たちが島内に残りたくても、勤務する場もなく、親たちも後継者になってくれることも望めない状況の中で、過疎化が進行している。

このような実態の中で育つ子どもたちが、足元をみつめることができなくなっていくのは当然のことであろう。

そうした現状打開の方策は、政治をはじめ種々の側面から考えなければならないことであるが、教育の分野においては、基本的には次のような目標の設定が必要であろうと考える。

それは、よりよい地域社会を創造することのできる子どもを育てることである。すなわち、現状から将来を見通すことのできる、科学的な思考力をもち、新しい価値観（人生観）を身につけ、協同して社会に立ち向い、誇りの持てる地域社会を建設できる荷負い手を育てることである。

私たち教師が、そうした目標達成のために、当面何をしなければならないのか、その具体的な中味が「地域の教育課題」ということになるであろう。

その視点は、家庭と学校を有機的につないでいる地域社会の変革も含めた、いわば三者の統合された教育活動とは何かに焦点をあてたものでなければならない。

少なくとも、私の子どもから、私たちの子どもという発想へ変革した地域づくりが、その基盤とならなければならない。

そうした状況をつくり出すために、まず学校教育において、地域ぐるみの取り組み、すなわち、地域の幼・小・中・高の一貫した教育態勢づくりがなされなければならない。

そして、私たちの立場から言えば、なによりも児童・生徒の変革を、具体的な教育実践の中でめざしていくことである。

基本的には、そのように考えたい。

幼・小・中・高一貫教育態勢とは

前述のように考えを進めていくと、幼・小・中・高の一貫した教育態勢づくりは、当然のことと考えられる。

また一方、子どもの側に立つと、一人の子どもが、幼・小・中・高と成長して行き、自己実現のできる社会人に成長していくのであるから、常に一貫態勢でなければならない。

言いかえれば、教育が子どもを伸ばすのでなくて、逆に駄目にしている現実は、さまざまな問題の起きている現実は、学校教育における一貫性の欠除にも大きな責任があるのではなかろうか。

また、今日、すぐれた教育実践を積み上げている学校は、殆んど例外なく校内に一貫した教育推進態勢が整っている事実も、これを裏付けるものであろう。

それがより拡大され、一方では地域ぐるみに、一方では、幼・小・中・高にとなれば、これは当然すぎるほどの必然性を持っている。

しかし、それでは、何が一貫性なのか、その具体的な課題はまだ明確になっていないし、その模索すら、今始まったばかりである。

また、それが示している内容は多岐にわたっており、とても包括的につかむことは困難なことでもあろうと思われる。

観念的には、教育基本法、そして学校教育法に示されているが、その目標到達のために、また、先に述べた地域の教育課題を果たすために、当面どこから始めるべきか、はっきりしていない。

ただ、その道すじは、児童・生徒の全人的な発達を願う、バズ学習に見えてきはじめたところと言えるであろう。

おわりに

はじめに述べさせていただいたように、本研究集会に参加された方々から、さまざまな御指導を受ける中で、なにか一つでも一貫した取り組みが始められることを期待している。

第２分科会（学級集団づくり）

学級集団づくりをどのようにすすめるか。

兵庫県　姫路市立城南小学校　　森本俊和

1．はじめに

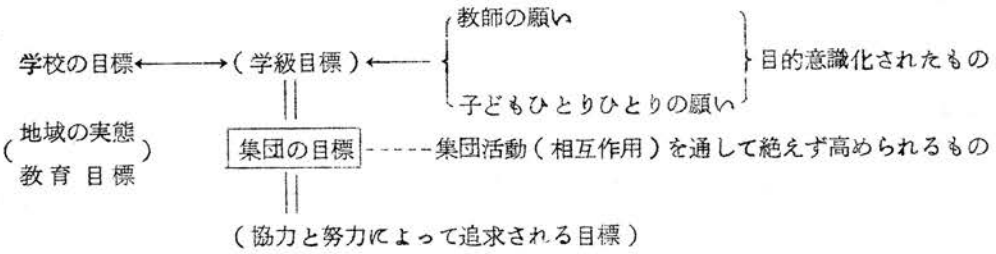
子どもたちみんなが生き生きと目をかがやかして授業に参加し、校門を出る時には「楽しかった、よかった」と満足した顔で帰っていく学校や学級でありたいと願っている。

それにもかかわらず、最近では、学校ぎらいや登校拒否、無気力でやる気をなくした児童生徒が多くなり、非行にはしる傾向がある。この原因は種々考えられるが学級における人間関係がうまくいっていないことにあるといっても過言ではない。

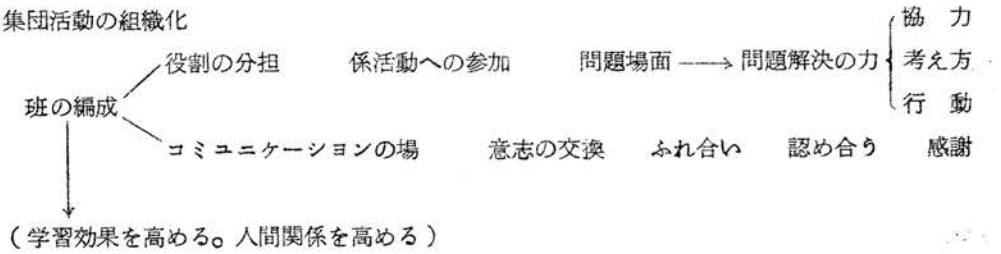
学級内に望ましい人間関係を育てるためには、競争を原理とせず、教師と子ども、子どもと子どもの心のふれ合いを大切にして、協力しあい、お互がはげまし合って学習や係活動に参加できる学級集団を意図的、計画的に組織しなければならない。

2．望ましい学級集団をつくるために

(1) 集団の目標を持つ



(2) 集団活動の組織化



(3) 教科指導の充実

授業の中でこそ豊かな人間が育つ

(イ)教材の研究 …… 学習内容の精選、課題の明確化（学習の手引き、学習のしおり）

(ロ)教育機器の活用 …… 授業の効率化、即時評価

(ハ)バズの導入 …… 全員参加、コミュニケーションの方法を知る（態度を育てる）

(ニ)特設時間（７校時バズ）の設定 …… 生活の点検と学習の援助

(4) 教師の学級経営の姿勢

教師の人間性を高める →学級づくりへの意欲 →支持的風土ときびしさ →指導の一貫性

3. 研究経過の概要

(1) 学級の実態を明確に把握し、問題点を知る。

○前学年の反省 ○新学級に対する期待 ○新旧担任間の連絡 ○家庭訪問

○標準学力テスト ○ソシオメトリック・テストによる集団構造

(2) 学級目標の設定と組織づくり

◎目標(めあて)づくり ○自分の努力目標 ○班(学習班、生活班)の目標 ○学級の目標

◎班編成 ○男女混成、集団内異質、集団間等質、4人を原則

○役割分担、係活動の決定(学習班、生活班、リーダー)

○編成替えは2カ月毎(4月、6月、9月、11月、1月)

○編成の方法 —— 仲よし、教師による、係中心、班長選出、自由・・・・・・・

(3) 生活態度、模範の育成

バズノート、日番日誌、作文、日常生活の中から悩みや問題点を知る

A子について・・・・・「私ばっかり」の作文より

○本人・・・・過保護、自己中心的な考え方、学力は中上、身体的欠陥はないが行動がにぶい

○作文の内容(事実)に対する考慮 問題点は何か

○学級の取組み・・・今までの反省、A子の願いに対する班や係の行動、A子に対する願い

○教師の手だて・・・学級づくりのあまさ、A子に対するかかわり、家族との連絡、班の指導

(4) 学力をつける

授業 ———— 7校時バズ(復習と予習課題に対する学習方法等)

(全員発表を目標 支え合い、協同) プリント、問題集 ┌→協同学習・・・・・・・おくれた子に対する
└→自主学習・・・・・・すすんだ子

4. まとめ

学級づくりは、教師と子どもとの根比べだと言われる通り、一つの問題が解決するとまた新しい問題があらわれる。これが生の学級の姿である。悩みと期待を持ちながら教師は豊かな人間性を持った子どもと望ましい人間関係のある学級集団をつくるために熱意と創造を持つとともに、教師集団が同じ基盤に立って一貫性ある教育をすすめることが大切である。

5. 提案する問題

(1) 学校生活の中に家庭環境や性格からの問題行動が起こるが、このような子どもの指導にどのようにかかわったらよいか。

(2) 形式的には組織づくりができたが、実践面で子どもの点検活動のあまさや価値基準のちがいにより、集団が高まらないがどうすればよいか。

第２分科会（学級経営）

学級集団づくりをどうすすめるか

１年生の学級集団づくり

愛知県　豊川市立千両小学校　　丸山正克

1．１年生の学級集団づくりはどう考えたらよいか

校舎新築移転に伴って、学区の一部変更があった。それまでは、１学年１クラスの小規模校であり入学前保育園で集団生活をしていた者が、学校という場に生活を移したにすぎないという感じであった。しかし、本年になって、他の保育園からの入学、１学年２クラスという今までにない経験を子ども達はしなければならない。何となしに集団を作っていた子どもたちは、新しい集団の中で新しい経験をしなければならないのである。

そこで、１年生なりの集団づくりを手がけているわけであるが、自己中心的未分化な子どもたちを学級集団を媒介にして協力精神に基づいた自主的な活動を通し民主的人格を育成するという目的をかかげ実践したところで、形式的にそれが可能であっても、子どもたちが、それに価値を認め実現のために積極的に活動するということは期待できない。学級集団づくりはかくあるべしということばとしての計画や学級像は描くことはできても、子どものめざましい活動を期待することは不可能に近い。そこで、１年生の学級集団づくりは、子どもたちが、自らの手で学級集団づくりを志向することを期待する学級経営の在り方ということになる。

2．開かれた学級が学級集団づくりの基本ではないか。

入学式を前に、子どもたちひとりひとりに夢と希望に胸ふくらませて学校に来られるように手紙を出すことから学級集団づくりを始めた。

また保護者に対しては、学級だよりを毎週発行することによって、開かれた学級にすることを考えた。開かれた学級というのは、

(1) 教育は、教師の独占行為ではないという考え方に立つ。
(2) 教師と親が共に学級を見るという目を持っている。
(3) 親は、うちの子どもであると共に学級の一員であるという認識を持っている。
(4) 教師・親・子どもの三者が、みんなでみんなのことを考えるという姿勢がある。
(5) 親も教師も要求が素直に出せるというきっかけがある。

親と教師が共同で学級集団をサポートすることである。その意味では、学級集団づくりを教師ひとりの仕事にしたり、教師のひとりよがりにしてはならないと考える。「お願いします」「引き受けま

した」という契約行為から、共に学級を見つめるという風土の中に学級集団づくりの基本があると考えている。

3、ひとりひとりを認めることが学級づくりではないか。

リーダーが居て、ある提案をし討議をし、クラス全体がそれに応呼し行動する。確かにすばらしい学級集団であろう。しかし、気がついて見ると、ひとりひとりは陰にかくれ、ある種のリーダーによって学級が動いてしまっているという経験がある。これで望ましい学級集団と言えるだろうか。

1年生の学級集団づくりは、みんながみんなを認めあう、支え合う態度づくりだといってもよいのではないか。ひとりひとりを認め合うというのは、親も教師も子どもも必要である。そして、その子どもなりの成果を認めてやることが、学級集団づくりそのものであると考えている。

(1) ひとりひとりを認めるきっかけを作る

カルテの作製をし、とり組んだ事実を認めそれを大切にする。望ましい行動の模倣を奨励し同一視傾向を強化する。学級だよりを通して家庭でもひとりひとりを認めるきっかけを作る。

(2) 集団の一員としての自覚の芽を育てる。

「きょうのお手本」という役割行動を全員経験させることによって、全員がリーダーであるという自覚の芽を育てるとともに、集団の一員としての望ましい行動を期待する。

(3) 他人を認める発言のしかたを指導する。

「○○さんちょっと違います」「もうすこしくわしく言います」というような形式の発言をさせることによって、相手の考え方感じ方などを認めた上で、自分の考えを言わせ、常にみんなを意識させることにつとめる。また、それを通して、みんなに意識されている、つまり集団の一員であるということを感じとることを期待したい。

1年生の学級集団づくりというのは、教師の定めた路線にしたがって子どもを整然と活動させることだろうか。望ましい行動を期待し、形式を整えたり組織や規則を作ったりすることを否定するわけではない。しかし、きわだった形式や組織がなくても、学級集団づくりに必要な意欲や態度を育てることが結局は、学級集団づくりに欠くことのできない側面であろう。

わたしの学級集団づくりのねらいは「みんなで支え合い認めあって何事にも意欲的に取り組む集団」である。ＩＱ 50程度の障害児がひとりで水泳の練習をしていた。水に顔をつけることすらできない。すると、だれかが行ってはアドバイスをしている。10日余り、ビート板を使ってどうやら伏面ができるようになった。「これで、みんな泳げるようになったぞ」と言った時、「ワーイ」とクラスがあげたかん声が、ささやかなわたしの営みを支えている。

第２分科会（学級経営）

学級集団づくりをどのようにすすめるか。

豊高校区教育推進協議会　木村政直（豊浜中）

1．はじめに

子供達が学習活動を行なう上で学級集団が及ぼす影響は大きい。まとまりがあり、相互が強い信頼感で結ばれている学級にあって子供達は安定感を持ち意欲的な学習活動がなされる。しかしながら、そのような学級集団は初めからでき上がっているものではなく、子供と子供、子供と教師が作り上げていくものであり、ここに教師が学級に果たす役割の重大さがある。幼・小・中・高の教師が一同に会して、個々の学級の実態のもとに、どのように学級集団を作るか、またそのためにどのような方策をとればよいか、集団にとけ込めない子を中心に考えてきた。その過程で共通理解を得、むずかしさも再認した。

2．実　態

学級集団にとけ込めない子は、現象的に２つに分けられる。その一つは、自己中心的な行動をとる子（きままを通す子）と逆に、自分を表現できなくて存在を無視されているような子である。自己中心的な子は、年少では、きままを通そうとし、年長では自分の意志を決して曲げようとせず言動が浮き上がり嫌われる。表に出ない子は、自分の考えがうまく表現できなかったり、対立意見があると口を閉じてしまう子で、ばかにされたりする。しかし、学級にうちとけない子の周囲の学級集団にも問題がある。失敗をばかめたり、自分達の活動の判断を教師にゆだねたり、問題行為を学級で解決できない。自分も他人も学級を構成する一員で共に成長しようとする意識がうすく仲良しグループで行動する。

3．集団目標

学級にとけ込めない子の背景を探ると、家庭環境・地理・性格・親の職業などからくる問題があり教師が働きかけるところもあるが、学級集団が有機的に相互作用をしていくことによって解決できるものが多い。相互作用し得る学級集団づくりをめざして目標を設定した。

○相手の立場を考えて発言や行動をする。

・人の発言をよく聞く。　・失敗したときに笑わない（人をばかめない）

○何でも話せる。

・わからないことをみんなの前に出せる。　・つまったところでは他の人が助ける。

○やる気を起こさせる。

・互いによい所を認め合いほめ合う。　・成功の喜びを味わう。

4．手だて（実践例）

教師がただ傍観しているだけで子供が変容するものではない。学校生活のいろいろな活動場面（授業・ＨＲ・班活動・係活動・学校行事）で、幼・小・中・高それぞれの発達段階に応じて適切に系統

的に教師が指導・援助する必要がある。

〔実践例1〕

集団に入りこめないAさんへのとりくみ　　豊島小　1年

(1) 入学当時の実態

○入学当時、幼稚園の先生より話をきき、見かけると声をかけていたので、走って来て頭を下げるようにはなっていた。

○友達がいない（友達の名前がわからない）

○文字の読み書きができない。数を数えることができない。

○ベルの合図で行動できない。（ブランコにいることが多い）

○返事だけ「はい」は小声で言える。

○友達から特別扱いされている。何も言わない、何も出来ないと決めこまれている。

(2) 取りくみ

月日	Aさんをめぐって	集団づくりの中で
4.12	・名前を呼ぶ。「ハイ」と小さな声。後、何を聞いても「ハイ」皆が笑う。「Aさんはー」という者もいる。バカにしているのが感じられた。	・人の失敗を笑わない。わからぬことはだれにもあることを話し合う。 ・自分が笑われた時のことを考えさせ、どんな発表でも笑わない約束をした。
4.18	・朝会、みんな走って出ているが、一人遊んでいる。だれも誘ってあげる人がいない	・朝の会で、どうしたらよいかを話し合う Aさんに限らず遅い友達に声をかけるように
4.27	・放課後、何十回書かせても字にならない「ダメジャ」が出て、しまったと思ったが手おくれ。Aさん涙をこぼす。残っていたT君「先生がダメじゃ言うけんよ。でも字のようなのもあるで」とかばう。	・思わず短気になってしまった自分を恥じT君の心根にうたれた。 根気よく指導していかねばならぬことを再認識させられた。学級の中に「T君」をふやしていかなければ。
5.10	・今日やっと姓の4字がノート4列かけた。大きな丸をつけ、全員に見せると拍手が起こる。「お母さんに見てもらいなさいね」とだれかの声。	・Aさんの喜びを、自分のことのように喜んでいる。
6.1	・放課後残っている時「え、ええ」と低い声、いつもなら「やかましい」とすぐ言うC君。「Aさん読みながら書くようになったで」と報告して来た。	・Aさんの成長を暖かい目で見守っているC君を感じた。
6.2	・算数のドリル、カード読み、たまたま(1)がAさんに当たる。皆の前で初めて(1)が読めた。	・一斉に拍手

	・次に(4)が当たるが、これも「イチ」と読む。皆笑わなかった。 ・朝、教室に向かっていると二人走って来る。「早よ来て」「Aさんが字書いたんよ。見てあげて」とのこと。	・隣のBさん小さい声で「シ」と教えていた。 ・黒板にやっと○○の二字が判読できた。消さないでよろこんでいる。

略

(3) Aさんのこのごろ

○文字・・・・・見て大体書ける(読めない)。名前がひとりで書ける時もある。

○算・・・・・・・1～10まで呼唱できる。具体物3までわかる。

○黒板に書くことを好む。

○ノートを見せにくる時、友達の中に入り、順番を待つ。

○時々、人にいたずらができる。

○給食当番を喜んでする。

(4) 課　題

○Aさんをとりまく時、してあげる、教えてあげるの意識が前面に出やすい。

○「Aさんだから」の声が出る。

○班がえする時、Aさんにつく人が数人に決まる。

○競争になると、Aさんに対してやさしさに欠ける。

○教師のいないとき、充分面倒を見てくれる学級に育っていない。

○Aさん以外にもAさんに近い者がいるのではないか。

〔実践例2〕

学級にとけこめないBさんへのとりくみ　　豊浜中　2年

(1) Bさんの実態

○一年時に隣の教室にいたことや授業に出ていたことから、しばしば話をする機会があった。

○同地域からの入学者が他になく、気心の知れている友達が少ない。

○神経質なところがあり、人の目、表情を気にする。

○健康面で異状を訴えることが多く、欠課がときどきある。

○語調があらく、人から誤解を受けやすい。

○自分の考えを素直に言わないで黙り込むところがある。

○毎土曜日、実家へ帰り、平日は祖母のもとから通学しており、家庭での対話が少ない。

(2) 学級での取り組み

Bさんをとりまく学級の雰囲気としては、まじめで消極的で個々が地道に活動している。何かがあってもそれに対して意見や考えを述べる者は少なく、許容しているのか、非難しているかつかめないことがある。したがって、Bさんをすすんで学級集団に誘い入れてくれる者が少なく、自分からとけ込もうとしても入り口が見つからないような状態であった。

そこで、学級でいろいろな活動を班中心に行なわせ、対話を多く持たせ、問題発見、解決をさせ

ることが必要であると考えた。一方、個別に教育相談の機会を多く持って援助することも大切だと思う。

○班編成・班長選出

男女2名づつで4人班とし、班長は班員間で互選させ、自分達で自分達の班をつくるように指示。

○班活動 ・・・・・学級生活のほとんど大半が班で行動する。

・清掃・給食・復習バズ・1日の反省

ある日の反省項目から ・・・・・「授業中手わるさをしているが直したらいい。」

放課後、事情を聞く　　班員「注意したらおこったが手わるさはやめた」

Bさん「私ばかり注意してばかにしている」(意外とあっさりして)

○週間目標 ・・・・・反省項目より、各班が出し合って決める。このことは、班の課題が共通の課題となって学級の目標に発展させている。

○新聞作り ・・・・・ 2班で合作

係分担
記事内容の選択
紙面構成
仕上げ

活動を通して

班員の得意・不得意(個の理解)
互いに問題を見い出す(班)→(学級)→(学校)
相互協調

○学力の充実

・試験予想問題の作成 ・・・・・朝の学習会(定期試験前)

・復習バズ(毎週一回)

○レクレーション ・・・・・・・・・・・班で内容を提案し、クラスで決定、係が企画、運営する。

Bさんの姿「バスケット」 ・・・真赤な顔をして走り回りスローインはほとんどBさんがしていた。

「バレー」 ・・・・・・・声をかけ合いながら抜けたボールをみんなと追う。

(3) 教師の連絡

教科担任制であるため生徒一人一人を理解しにくいところがあるが、教師間の情報交換によって知らない一面が理解でき、指導の充実につながる。

5. 反省・課題

○良いところをほめてやる(ややもするとくさすのが先になってほめることが後になるが、この逆にしないと閉じた子供の意志は開かない。)

○子供の活動をよく観察して理解をはかることによって適切な指導をする。(ふれ合いの場・資料の確保)

○いろいろな活動がゲーム化しないように目的(目標)意識を把握させ、指導の系統化を図る。

○集団に入り込めない子と集団とのかかわりをどのように組織づけるか。

○話し方、話し合いのルール等は、教科の指導を通じてより充実したものにする。

第2分科会（学級集団づくり）

学級集団からはみ出ささされている子どもを中心に集団づくりを考える。

兵庫県　姫路市立白鷺中学校　　道上昌幸

1. はじめに

中学校における学級集団づくりは、教科担任制ということから道徳・特活を中心に毎日の学級活動を通じて行う場合と、各教科学習活動を通じて取り組む場合とが考えられる。前者は、学級担任でなければ実践できないが、後者は、教科担任が授業の中で行うことができるであろう。すなわち、学級集団づくりは学級担任が主に努力すべきことであるが、教科担任といえどもおろそかにはできないことである。そこで、学級担任としての〃学級集団づくり〃ではなく、教科担任としての〃学級集団づくりのすすめ方〃について、理科の学習活動を通じて取り組んできた実践から、本課題について考えてみたい。

このことは、中学校と同じように教科担任制をとっている高校についてもいえるであろう。

2. 経　過

本校は、人口45万の姫路市の中心部に位置し、商業地域を主として住宅地域とから成り立っている。また、一部には少数ではあるが戦後の混乱期から引き続いて住みついているバラック住居地域があって、ここは主として外国人の居住地となっている。このような環境から学校の教育活動の思潮には、商業地域・住宅地域の人々の考えがはいりやすいといえる。したがって、他の都市に見られるように、教科学習活動のあり方には非常に関心が高いといえる。過去においては、友人を蹴落してでも自分が優位な立場に立とうとする空気が強かったようである。バズ学習がねらっている協調性・思いやりなどが育つ素地は薄かったといえるであろう。このような生徒の風潮も、高校入試の改善から、一時は打破されようとしたけれども、進学率の高まりがかえって塾通いの増加を誘い、正常化と従来通りの二面性の学習生活を広げる結果になっている。理科学習においても、実験・観察をおろそかにして、参考書などによる既成知識の暗記に時間を費すことが学習活動だと考えている生徒が多いことからもうかがい知ることができるであろう。

教科学習活動で暗記の多少を競うような学習活動をとれば、必然的に脱落していく生徒がでてくる。これらの生徒が〃落ちこぼれ〃となって、学習の場から逃避し、学級の望ましい姿をこわしていくといえる。将来に希望をもって学習している生徒では、何とか遅れないように、と努力するであろうが夢も希望ももっていない場合には、これらの活動が相乗作用となってはたらき、だんだん手に負えなくなっていく。バズ学習をとりいれることによって、ひとりひとりの生徒が自分の活躍の場を得れば楽しく学習活動を営むことができる学級づくりが可能になるであろう。それは、実験・観察の場であっても、実験・観察後の思考・まとめの場であっても、グループの中で個の活躍する面があるからである。

理科学習におけるグループとしては、男女4人の班編成とし、4人の学習能力は異なるようにするのが適当と思う。座席は、実験・観察、実験後の思考・まとめの活動、いずれの場合も、男子どうし、女子どうしが並んで座るよりも、対角線に座るのがよいように思われる。しかし、1学級の男女の人数に差があるときは、学習活動をしていく上で問題を抱えている生徒が属する班だけは、必ず男女各2人にすることが必要なように思う。いわゆる〝落ちこぼれ〟の生徒と同じ性別のものが3人で、1人が異性という場合には、班の中でまともな話し合いがなされないばかりでなく、他の班にも影響を与え、ひいては、学級全体の雰囲気をこわすようになる。実験・観察では、割合いうまく相互作用がはたらいているようにみえても、思考・まとめとなるとグループの話し合いから離れていく生徒が〝はみ出た〟生徒の中には多い。このような場合のことを考慮してグループを編成することも、教科学習で学級集団づくりをするには必要なことである。

次に、生活グループと学習グループは同じがよいか、異なるのがよいかについて考えてみたい。現在、授業にいっている3年生の理科では、生活グループ即学習グループとして各学級とも学習活動をしているが、学級担任との考え方、生徒個々に対する観察の相違、生徒の教科に対する得手・不得手などがあることを考えると、2つのグループは変える方がよいように思われる。しかし、生活グループでしっかり指導がなされており、学級集団づくりが努力されておれば、同一がよいと思う。別な見方をすれば、生活グループが学級集団づくりに役立つようにしようと思えば、同一にすべきなのかも知れない。また、教科学習活動の中で発表させる場合、同じ生徒が何回も発表しないで、全員が一回は発表する機会をもつように配慮することも〝はみ出た生徒〟をつくらないためにはたいせつなことである。

以上述べてきたようなことが、学習進度を急ぐあまり、教科学習では見逃されているように思う。〝落ちこぼれ〟から〝はみ出ていく〟生徒がでないようにするためには、教師の学習活動への配慮が必要である。生徒にだけ原因をかぶせるわけにはいかないだろう。

バズ学習をとり入れることによって、学級集団づくりを目ざして教育活動を進めている現状の中から、障害となっていると思われることをまとめると次のようなことがいえると思う。

(1) 学校のおかれている環境から受ける暗記を主とした知育中心が重点関心の教育課題と協調性・思いやりの社会性とを学習活動の中でどう関連づけていくか。

(2) 教科の内容指導だけが学校教育の使命ではなく、全人的教育を目ざした教科学習活動が必要であることの共通理解にたって、教育活動を進める中で自らはみ出そうとする生徒を指導する教師の考え方・態度（姿勢）はどうあるのがよいか。

(3) 将来への展望を持たないで生活が荒れている生徒は、どのような質の班編成で学習させるのがよいか。

(4) 生活グループと学習グループとは、同一がよいか。異なるのがよいか。

3. 問題提起

上記まとめの4項目

第２分科会（学級集団づくり）

短学活で培われた力を通したバズ

愛知県　春日井市立東部中学校　　加納弘雅　他

1．はじめに

生徒ひとりひとりの学力を高め、相互の人間関係を深めるようにと進めてきたバズ学習への取り組みも、今年で13年目になる。そしてその間全教師が積極的な姿勢で取り組み、共通理解のもとに学習を深め、新任・経験者を問わず同じ基盤に立ち進めてきた。

しかしながら、研究13年目ともなると高い次元への深まりを考えがちであるが、年度当初の定期異動のたびに、教員構成も大きく変化した。そこで、「原点に立ちもどれ」を合い言葉に、バズ学習に対する体制づくりから再出発したわけである。

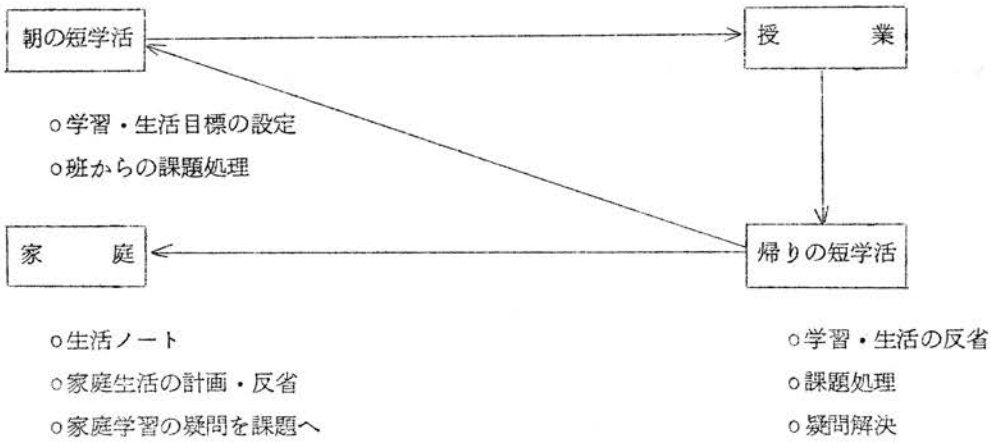
まず、今年の研究主題をどこにおくかについて年度当初話し合い、「短学活で培われた力を通したバズ学習」と決めた。そこで、全体会、学年部会等で、班編成・短学活・授業等各々の分野について過去の研究実践記録をもとに学習を深めた。その研究成果の上に立って、短学活・授業・家庭生活等を密接なつながりをもたせつつ学習面・生活面にわたるバズ学習をいかにするかを、わたしたちの研究目標において学習を深めることに決めた。

2．主題にせまるために

(1)　方　　針

短学活において培われる生徒相互の人間関係（社会性）、望ましい生活規範、自主的な学習態度とそれに伴うバズ学習の基本的なルールなどを日常の学習面や生活面に生かすことを考えなければならない。そのために授業と短学活と家庭生活の有機的なつながりをもった体制づくりを次のように考えた。

学　　習



ア．相互作用による自主的な学習や生活目標の設定・反省の場となる短学活を重視する。しかし全く自主的な活動は初期の段階では望めない。そこで、節度ある効率的な学習や生活反省習慣の基盤のできるまで意図的に課題を用意する。

イ．朝の短学活においては、班から提示された課題（曜日によって科目の変更）を学級全体で処理する。課題を提示する班は交代する。その日の課題は、前日までには用意される。また課題は約１５分以内の時間で処理できる内容を考える。

ウ．授業におけるポイント及び帰りの短学活への課題の提示を行う。

エ．生活ノートを使用し、学校生活と家庭生活との関連をはかり、計画的な学習生活の習慣を身につけさせる。

(2) 具体的な方法

ア．バズ学習への体制づくりの確立

○バズ学習の理論を学び合う。

教師側だけでなく生徒側にも理論を！（「バズ学習のてびき」を利用）

○基本的学習ルールの徹底

○班編成の意味とその方法

・リーダーを選ぶときの姿勢

・班になじめない生徒の指導

○班長と班員の機能

○教室の環境

イ．バズの意識化のてだて

生徒を自らがバズ体制づくりの問題点に目を向け、自ら解決していこうという意識を育てる。

○学級の係活動の組織づくり

○学級を高める級訓・週訓の決定

○個人の問題、班の問題、係の問題等を気がるに書けるような班日記・単学ノート・生活ノートづくり。

○学級・班・個人の諸問題を解決するために、積極的に話し合える学級会

○学年の問題を話し合える組織づくり

ウ．意欲的な短学活参加へのてだて

短学活への参加度を高める要因は、「短学活をしてよかった。」という満足感であろうと思う。こういう内容のある短学活にしていく。

○短学活の意義について自覚させる。

「バズの手引き」を利用

○短学活のあり方を考え合う。

短学活の公開（教師・生徒）

短学活の内容を問い直す。

○短学活の内容・形式を学級で工夫する。

○学習面では、短学活・授業・家庭学習との関連を、生活面では、短学活・学級会との関連を密にする。

エ．学年部会・教科部会・全体会との調整をはかる。

オ．少経験者の研究会・授業交換、短学活の参観を随時計画する。

カ．年間指導計画（例：1年）

	バズ学習体制づくり	短　学　活
4	・仮班編成 ↑ ・一般的学習ルール徹底 ・学習態度の折り目、切り目 ↓ ・一列体型 第一次環境づくり	・一列体型や班編成での様子、違いを見る。 ・係活動内容の把握
5	・班編成（暫定） 班長指導 バズのルール バズの意義 第2次学習環境づくり ・第1回目の班編成、授業へ移行（班の必要性を実感させる。）	・バズ学習を経験させる ・短学活の公開 意見交換（学年部会） 学習相談（班・個別） ・授業へ移行できるような体制へ
6	・第2回目の班編成 てびきで学びあう	・係活動の指導と評価 ・短学活の公開 生徒相互観察 ・短学活の見なおし 意義を自覚させる
7	・バズに対する意識化 こうあるべきだ こうしたい	・短学活の公開 意見交換 指導のまとめ

キ. 短学の内容

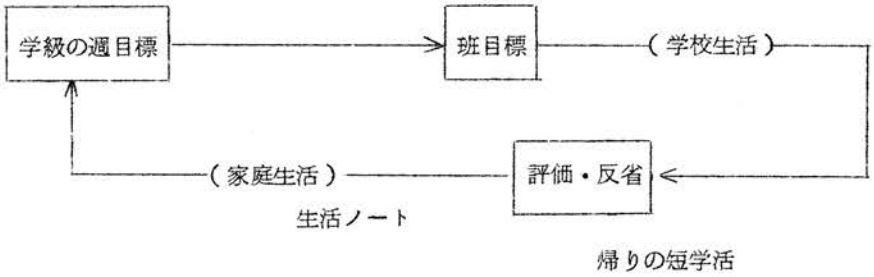
短学活とその指導のために（例１年）

区分				生徒の活動	指導上の留意点
A	短学活ノート	学習課題	個人	短学活の準備をする。 ・不要物をかたづけ、短学活ノート用意 ・課題を黒板に書く。 ・何をどんな方法でやるのか確認（係） 課題に取り組む ・まず自分で ・練習・テスト・調査など場合に応じて能率的にすすめる。	・第６時授業者による準備指示と確認 ・まず学習体制にけじめをつけさせる ・個人でしっかりできるように ・共同思考に移った場合の体制づくりのための One Step.
B			班	解答の発表とバズの指示（係） ・疑問点・不明確な点を話し合い確認 ・不明な場合教科担任へ質問を用意 ・ポイントは１０分放課に短学活ノートに記録しておく。	・その日の授業でわからなかったことを教え合い、確め合い、自分のものにする機会にするための One Step.
C		生活課題	個人	生活目標の反省（生活日記の記入） ・何をどんな方法でやるのか確認指示(係) ・内容　個人的生活問題 班内の生活問題 学級・学校内の生活問題 個人 ・交換方法　個人一班 個人一班一学級	・個人、班、学級の成長過程が記録されていく日記をねらう。 ・単なる事実の記録ではなく、主張・提案を具体的に書かせる。 ・目標達成、あるいは学習促進のために役だてる。
D			班	・朝や帰りの短学活、給食時、放課時を利用して日記を輪読する（問題討議）	・個人の問題を全体の問題としてとらえていく。
E	生活ノート	家庭学習課題	個人	生活ノート記入の指示（係） ・各自が家庭学習のプランニングをする ・科目、どこからどこまで、どんな内容で何が重要か。 ・短学活ノートのポイントと合わせて検討する。 ・右ページに内容をメモする。	・家庭で学習すべきものの課題や重要事項、学習の方法を具体的に授業で指示しておく。 ・学校の授業と家庭学習を結びつける接点として家庭学習のプランニングをこの場面で行う。
F		班・学級の課題	班・学級	連絡事項の指示（係） ・すべての活動を中断しメモの用意 連絡事項は生活ノート予定欄に記入 ・係からの連絡や要望を伝達する。 ・班内確認活動 明日持ってくるもの、調べてくること約束など。 さらに翌朝確認	・内容、運営方法など学級経営における係活動が生かされるように工夫する。 ・担任所感・評価

3．実践の中から

(1) 生活にどのように生かしているか。

生徒自ら生活課題を見つけ、解決し身につけていく過程を日々の生活リズムとして学びとらせるよう「生活の輪」を設定し、その完成をめざしている。



ア．学級の週目標

生徒が学級の目標をいかに自分たちの目標としてとらえるかを工夫する。それには班日記、生活ノート、毎日の活動のようすなどの中から、学級の実態にあった適確な目標を設定しなければならない。またそれにともなう指導計画を立て実践される。さらにフィードバックとしての短学活ノートの活用があげられ、生活面における教育活動を組織化するように図っている。

イ．班目標

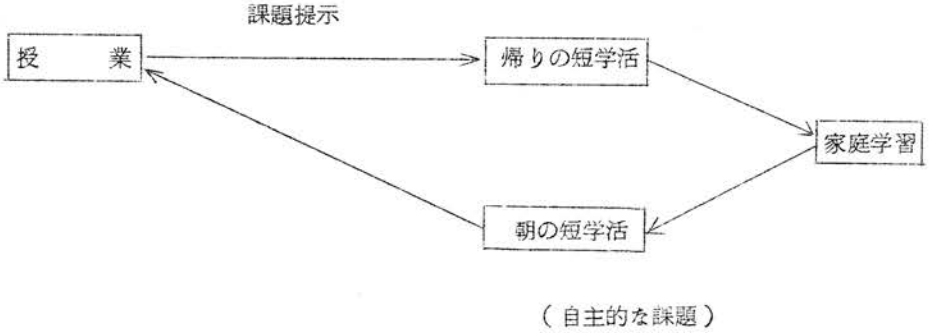
学級の週目標を具体化したものを班目標としている。これは帰りの短学活において、一日の生活の反省を短学活ノートに記入したものをもとにして決められる。一日だけの目標とはかぎらなく、目標がある程度達成されるまで、その目標は二日、三日と続くことがある。これは、目標を決めることや形どおり反省しあうことだけに意味があるのではなく、可能なことを決め、それを守ることに意味があるからである。このように班目標を生きたものにするために、弾力的にあつかい、目標を教室内に逐次掲示している。

ウ．反省および評価

どのような効果があったか、あるいは今後どのように調整して指導していくべきかを診断するために、短学活ノートの反省欄があり、短学活の点検表がある。短学活ノートにおける反省欄は主として自己評価としての機能をもち短学活の点検表は、相互評価としての機能をもつ。これらの評価活動は、ただ診断することにとどまらず、どのように治療（指導）するかが問題になってくる。そのために生徒自身が自主的かつ協調的にとりくみ方を考えるような処方が必要となってくる。そこで班内における話し合いや、班長会議で評価表を集約して、とりくみ方の問題や成果などを検討する。これらの方法は単に目標をかかげるだけに終わりがちな活動を意図的に調整し意識化するうえに効果が認められた。

(2) 学習ではどうか

（学習の輪）



ア．帰りの短学活

その日の授業で解らなかったことを教え合ったり、学習のポイントを確め合ったり、学習課題を解いたりすることによって、「解ったこと」「解らなかったこと」を明らかにすることができ家庭学習の計画、明日の授業への足がかりとすることができた。

イ．家庭学習

帰りの短学活で、家庭で学習することを明確にしたことをもとに生活ノートに計画し、その方法を確かにすることによってより充実したものにする。

また、生活ノートに記録することによって、家庭学習を自らコントロールする資料としたり、家庭学習でのつまづきを明らかにし、明日の学習への意欲づけを図っている。

ウ．朝の短学活

ある教科の授業で「どうも解りにくかった」ということで、班で教え合ったり、話し合ったような課題や家庭での復習でつまづいたような課題を班でまとめ、学級全体に提示する。またその課題内容を教科担任は知ることによって、生徒の弱点を把握、次時への参考とすることができる。

エ．短学活ノート

朝の短学活	課　題

	内　　容	ポ イ ン ト
1		
2		
3		
4		
5		
6		

帰りの短学活	課　題

班目標	
反省	

○短学活ノートの反省欄より抜粋

数学の負の数をひくの計算があまりよくわからなかった。アの練習問題であっていたのもあったけど、間違っていた方が多かった。だから短学活で－8－（－5）の解き方を班の人に教えてもらって解った。家庭学習で他の間違えたところをやりなおそうと思っている。(原文のまま)

オ．生活ノート

月日	予　定	5	6	7	8	9
月日						
	家庭学習 時間 分 ABC					

・家庭学習の疑問点・重要事項
・家庭生活のようす
・等を書く

週反省	今週の家庭学習合計時間　　時間　　分

保護者のひとこと

(3) 評価はどのようにおこなわれているか。

班毎に班長を中心に話し合いで評価を試みている。

評　価　表

4. 今後の課題

わたしたちは、短学活で培われた力を授業・生活（家庭生活を含む）に発展させるべく研究を進めてきたが、まだまだ体制づくりの段階で充分とはいいきれない。今後に残された課題は山積している。

○学級経営における担任の指導と教科担任の授業における指導のずれの中で、主体的な学習をどんな形で指導していくか。

○短学活におけるマンネリ化をどう防ぐか。

○個人思考と集団思考のけじめなど基本的なバズ学習ルールの継続をどうはかるか。

○班毎に今日の目標を守っていこうとする意識化は見られるが、実行・実践に移させる指導のてだてはどうすべきか。

○班や学級での約束事が守れない生徒への突き上げはよいが、班の仲間への配慮が少なく、自分を同一視した評価で批判しがちである。

○生活ノート、短学活ノート、班日記から生じた個人の問題や学級の問題を解決していくための時間をどのように生みだすか。

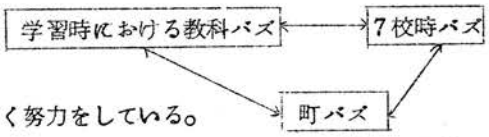
今後、わたしたちは、上記の課題解決のため、全教師共通理解のもとに強力な実践を続けたい。

第3分科会（特設バズ）
地域社会と結ぶバズ学習

兵庫県　姫路市立高丘中学校　　松浦昭一郎

1. はじめに

本校では生徒の自主性、相互作用を養うため



の形式による教育体制のもと、自他共に高めるべく努力をしている。

具体的には各教科におけるバズの他に、7校時を設け、教科の復習バズ、生活反省バズを行い、相補的な関係をつくり、さらに7校時バズでの過程を地域にもっていき、町毎によって学年の枠をはずしたオープンなバズも行なっている。その進展として各町には、地域生徒と保護者による自主活動のための中学部会も活動をしている。かくして学校教育、社会教育、家庭教育を支える支点としての町バズが効果をあげ、三者のパイプ役を果していると思われる。

2. 町バズ実施の現況

(ア) 町バズのねらい

① 学校、家庭、地域を結ぶパイプ役にする。

② 父母の目を自分の子だけでなく、地域全部の生徒の上に注がせる。

③ 集団の相互作用により、人間関係を高め、個人の発達と集団の成長をねらう。

④ ＰＴＡ活動の正常化、活発化をねらう。

⑤ 中学部会を通し、地域の社会行事に参加することにより、地域社会への連携を進める。

(イ) 実施方法

① 日時　木曜日　午後3：20～4：20（会場により時差あり、弾力的運営を行なう。）

② 内容　a学習バズ　3：20～4：05（45分）　　反省バズ4:05～4:20（15分）

○学習バズは、課題方式とし、各学年毎に町バズ委員が教科の担当を決め、輪番で課題プリントを作製する。（町バズ係の先生が指導する）

○プリントは3教科（9教科を3回に配分）を集め、45分の復習分に収める。配布の都合上プリントは各クラスで、バズ委員が配布する。正解答は明金曜日の朝バズで委員が行なう。

○反省バズは、その日の町バズの反省の他、校外地域生活での反省、良かった行為の発表もさせる。他に町別での行事の話し合いもある。

(ウ) 参加方法

○生徒　6校時が終了し、清掃後公民館に直行し、終了後はそのまま帰宅する。

○父兄　輪番による責任当番制で、生徒の出欠確認、町バズ日誌の記入、その日の状態に対する意見発表、欠席の多い生徒の家庭への連絡、公民館の整備、戸締り等。

○職員　各町担任は可能なかぎり復習バズの指導、生徒役員の助言をする。課題プリントの事前

指導、生徒からの相談に応じる。

出席父兄との対話を可能な範囲で行ない、学校と家庭、地域とのパイプ役になる。

(ニ) 実施時期（下記以外）

短縮時、長期休業中、定期考査中、学校行事の場合は止する。

3. 町バズ日誌の形式

右に示す日誌は町毎、学年毎に町班長、町の父兄が記入する。

昭和　年　月　日 自　時　分 至　時　分		担当印	
父母出席者			
欠席生徒			
教科	内　容	問題点	
生活バズ			
感想	生徒		記録者
	父母		

4. 町別中学生部会と非行問題

１０年の積み上げた伝統の発展として各町単位による地域ぐるみの自主的活動が盛んになってきた。各町毎に地域中学生部会結成へ歩みを続けている。具体的には姫路城や書写山の清掃奉仕作業、テレビ局見学等の社会見学、キャンプ、海水浴、栗拾い等のリクリエーション、野外活動へと保護者からの働きかけ、生徒の自主的運営などにより、自分の子どもだけでない地域の子どもへの親近感、逆に生徒からは、自分の町のおじさんへの信頼と責任感が生れるようになってきた。その成果として非行問題などは年ごとに減少してきた。

5. 同和教育における町バズでの役割

本校におけるバズ学習推進の発想は、その初期において同和教育と無関係でなかった。バズ学習の推進が即同和教育の発展であった。同和教育の一環として行なわれている解放学級の開講への運び、組織・運営等町バズの果した役割は大きい。同和教育を進めていく上で町バズの積み重ねが学力充実や学習への意欲向上へ及ぼしたものは大きい。

6. 問題点と今後の展望

はじめてから１０年余になり方法的にも定着化がみられるが、現実を眺めると問題点や困難点も多い。以下その苦しみや課題を列挙して提案としたい。

① 学校と各町がマンモス化し、公民館などのバズで会場収容人員の問題

② 年度毎の職員、生徒、保護者の入れ替わりが大きく、共通理解やそれに対する認識に手間どることが多い。

③ 形式化とマンネリ化の問題、ややもすると形式的に流れ、時間の無駄と比判する人も出てきた。

④ 町バズ日と部活動の問題

⑤ 各生徒個人の能力差の問題、ただ教えてもらう、答を写させてもらう生徒についての問題。
バズ学習の深化、訓練のいきとどいた学級とそうでないものの格差による問題

⑥ 高校入試制度とバズ学習のねらいとの価値感の相違から生ずる問題

第3分科会（特設バズ）

学力保障をめざした特設バズ

兵庫県　姫路市立林田中学校　　加藤倖一

教育の場には厳しさと秩序がなければならない。そして不断の努力によって螺施状階段を登っていくように向上し、人格の完成をめざしていくものである。

教育の荒廃の声を聞いて久しい。そこには種々の原因はあるだろうが、我々教師には生徒達に日々の生活の中に生き甲斐を持たせ、息吹かせることが要求されている。生徒が将来自立し、正しく判断して行動し得る学力、希望に満ちそして展望を持って生活し得る基礎を保障してやらねばならない。助け合い励まし合える連帯感や正しい人間観と人間関係を育てていくことが我々教師の使命でもあろう。

1．バズ学習をとり入れた動機

農村地帯で平和な環境であるが小規模校であるが故に刺激に乏しく、学習意欲もあまりなく、又学習態度も受動的で主体性はそれほど認められなかった。又過去においては授業中に嘲笑や攻撃が平然と行なわれていた。しかしその反面生徒会活動は自主的で立派にできていた。そこで認知と態度の同時達成をめざし、一斉授業での一方通行の弊害を改善するため校内研修部を中心に小集団によるバズ学習を始めた。

2．バズ学習を活かした授業研究

㋑生徒に活動の機会を与える。　㋺積極的に授業に参加させる。　㋩学ぶ意欲を持たせ、生きいきした雰囲気をつくりだす。　㋥学習意欲をつけさせる。

等を目標に49年度より基本的な体制づくりを行なった。50年度は更に学力の向上と人間関係の深まりを高めるため、「学ぶ姿勢の確立」を目指し毎月研究授業を公開した。

3．第七校時バズの特設

従来の短学活は生活バズのみで「学習へのつなぎ」がなかった。　㋑話し合いの訓練　㋺学習内容のポイント把握　㋩自主協同的態度の確立　㋥時間の効率的運用

等の定着を学級経営の中で位置づけるために52年度より30分間の復習バズを第七校時に特設した。

4．評価と反省

気力的で、積極的になってきたが、個々の発言が集団の中に広がりをもたらす要素となりきっていない。特設バズをより密度の高いものにするために教科指導内における授業改善が再度必要になってきた。

5. 校内授業研究

復習バズや家庭学習を定着させるためには授業そのものを充実させねばならない。

㋑支え合える仲間づくりをし、楽しく学びながら基礎学力の定着を図る。　㋺認知と態度の同時達成をはかり、個の高まりに努める。　㋩積極的に学習する態度を養い、意欲的に行動できる生徒の育成。　等を目標に計画的に研究授業を公開したり、空き時間を利用しての授業相互参観を行なった。授業参観の視点を　㋑一人ひとりを生かしているか　㋺低学力の生徒への配慮は　㋩実態に即した指導展開であるか　㋥予習課題が活かされているか　㋭バズの時間配分と方法は適切か　㋬教師の指導技術は　等に定め厳しさを追求してきた。

6. 53年度のとりくみ

授業　→復習バズ　→家庭学習　→朝バズ　→授業という一連の流れが円滑に行われてこそ教育効果があがるものである。復習バズは思考的な問題や内容把握面で表面的に流れる傾向があり、家庭学習の習慣化も表皮的なものであったことを反省し、本年度は　㋑家庭学習の定着　㋺学習の手引き」の活用を中心課題にすえとりくんでいる。

学習意欲が直接的に高揚されていく場は授業である。生徒と教師が、又生徒相互が教材を通して真実を厳しく追求する過程で培われる態度が望ましい人間関係をつくりだす基になる。又家庭学習の裏付なくして授業の効率もあがらない。両者の「つなぎ」として特設バズを位置づけ、進路保障につながる学力保障をしていかねばならないものと考えている。

第3分科会（特設バズ）

自主的・主体的学習（活動）をめざした第7限（特設バズ）

大阪府　寝屋川市立第四中学校　　西尾時雄

1．第7限（特設バズ）とは

現在、本校では6時間の教科学習のあと第7限（30分間）を特設している。6限終了後全員による清掃活動が行なわれ、気分を一新し、第7限の活動にはいる。第7限は単なる教科学習の延長でもなく、また教師や各係からの連絡・終礼的な時間でもなく、一日の学習・生活を総括し、かつ家庭学習・家庭生活の指針を各人が確認する時間である。換言すれば、学級経営と教科指導の契合が最も集約された時間である。したがって、この時間をその場かぎりの無計画な運営がなされるなら、そのことは学級経営・教科指導を根底からくずすことに他ならないのであり、そういう意味において、この時間は教師にとっても、生徒にとっても厳しさが要求される時間なのである。

2．第7限のねらい

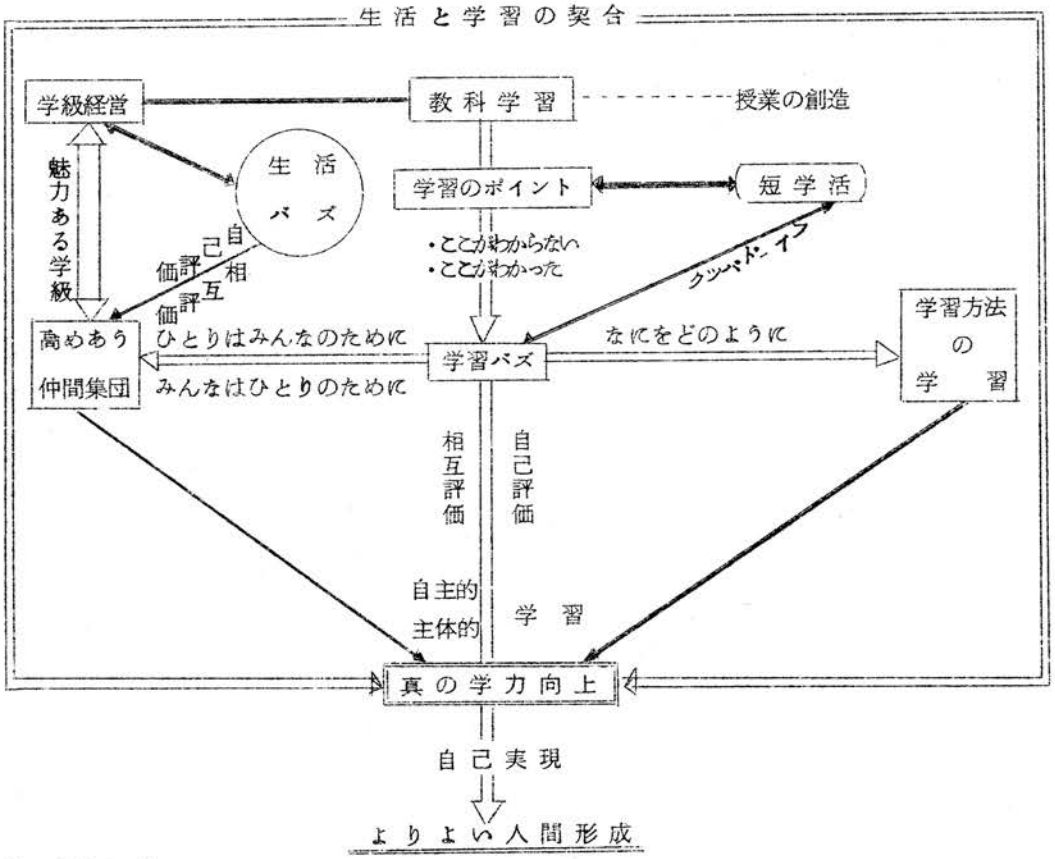
第7限の各学年の実践形態は若干のちがいはあるが、各学年とも生活バズと学習バズの融合の上に成りたっている。生活バズと学習バズを二元的にとらえるのではなく、学習そのものが生活であり、生活そのものが学習であるというとらえ方である。このことは、ひとりひとりが自主的・主体的に活動しうる時間となってはじめて達成できるものである。自主的主体的な活動を成立させる条件は何といっても、ひとりひとりが意欲をもって活動できるということである。そのためには、誰もがわからないことはわからないと言え、正しいことは正しいと言え、悪いことは悪いと言える個人であり、集団でなければならない。このことを通じて、ひとりひとりが幸せに生きる力、幸せに生きる道すじを築く力がはじめてできるのである。ここに、第7限の存在意義があると考えている。特に、つぎの諸点を第7限の具体的なねらいとしている。

① つまづきの早期発見・解消

② 学習方法の学習・・・・・何をどのように（家庭学習のつなぎ）

③ 学力の向上

④ 高めあう仲間集団の育成



3. バズノート

各学年の生徒の実態に応じて、第7限の活動記録として、一日の学習・生活の総括として、家庭学習・生活のつなぎとしての役割を果すバズノートを使用している。このバズノートは、生徒相互の教師と生徒の意志疎通をはかるうえにも重要な役割を果している。

4. 第7限と教科担任・学級担任のかかわり

第7限目は生徒の自主的主体的な活動の時間であるが、学級経営的な面から学級担任が、教科指導的な面から教科担任が深くかかわっている。生徒が学級担任や教科担任との連携を密にするのはもちろんのこと、第7限の運営は学級担任と教科担任の連携がもっとも強く要求される。だから、第7限は、単に各学級で担任を中心とした閉鎖的な運営でなく、むしろ、学年経営的な色彩をもっているといえる。

5. 第7限・短学活（朝の学習）の実践例

(1) 日程

	月	火	水	木	金	土
朝の学習	目標・掲示	生徒朝礼	評価問題	評価問題	評価問題	評価問題
第7限	要約	要約	全員クラブ	要約	要約	

(ロ) 第7限の展開

過　程	時　間	学　習　活　動	留　意　点
準　備	3:20	家庭学習のポイント、課題の記入	○背面黒板に記入してあることを各自のバズノートにうつす
評価問題の解答・解説	3:25	自分のまちがいを正し理解する	○まちがいやすい点の解説 ○評価結果の発表
要　約	3:30	1教科委員による要約 2個人学習 3班学習 4全体学習	
反　省 点　検 連　絡	3:50	1家庭学習ポイント、課題の点検 2全体反省 3日直の仕事の逆点検 4個人反省、自己反省 5担任評価 6連絡	○班長が中心となってすすめる ○全員による点検 ○△○◎の三段階で評価する（自己に厳しく）
終　礼	3:55		

(ハ) 班構成と係活動

○4人の男女混合

○各班が教科と生活をうけもつ ――― 生徒会組織と一体化

○班ノート

○班長会議

○清掃活動・給食活動・日直活動など

(ニ) 朝の学習のすすめ方

8：20　出席点呼（日直）

8：25　評価問題

8：40　回　　収（教科班が採点し、7限目開始までに各個人に返却する）

6. 今後の課題

○学習内容や評価問題などの作成・検討に要する時間的な問題

○落ちこぼれの程度がひどい生徒（重度の学力遅進児）を第7限の学習面において、いかに位置づけるかという問題。

第３分科会（特設バズ）

地域バズなど、特設バズをどう広げるか。

提案者　亀　本　邦　彦　（現地）

はじめに

特設バズを現在実施している学校は、豊中学校、豊浜中学校、豊高等学校の三校である。昭和46年度以降、中，高の連携が深まる中で、統一された学習法として高校においても、50年からバズ学習への取り組みが始まる。ともに、学習意欲を盛り上げ、学力の向上、生活態度の確立、人間尊重の精神を基調とした教育内容の創造をめざしている。

バズの取り組みは、復習バズから始まり、30分学活、町内バズへと発展してきているが。生徒自身が主体的な学習者となり、自己変革、自己実現をめざす人間形成を目標にして今日に及んでいる。

地域実態

呉線竹原駅より、約22.5Kmの南西方面海上に大崎下島、豊島がある。町区画は、大崎下島の一部が豊島の行政区域に入り豊浜町を、そして豊町の二つの町を構成している。地域産業としては、柑橘の栽培を主とする専業農家（近年、柑橘産業の不振で兼業化が進む）と、豊浜町の約半数を占める専業漁業とがある。兼業化の進む農家においても、父親不在家庭が多くなっているが、特に漁業家庭においては、三箇月、六箇月と両親が留守となる。その間、祖父母と過すか兄弟姉妹で過ごすことになり、その実態は、豊浜中学校では、両親不在が34％、父親不在10.5％、豊中学校では、両親不在が0.4％、父親不在20.9％に及び、高校では、一人で生活しているとか、弟や妹の面倒を見ながら学校に通う者が多い。

目標

- 自己の課題をつかみ解決していく。
- 基礎学力をつける。
- 家庭学習の習慣化をはかる。
- 保護者、児童生徒、教師のコミュニケーションをはかる。
- 地域住民の教育に対する関心にゆさぶりをかけ、理解と協力をより啓蒙する。
- 地域へ教育課題を提起していく。
- 地域への奉仕活動にも進んで協力実行する。

取り組み

三校とも、特設バズへの取り組みは、生活指導上の問題が出発点であり、問題行動の主たる背景をさぐる中で、「わからん授業」を改善しなくてはならないこと、学級集団を学習集団化するために、生徒個々のつまづきの背景をさぐる教育相談活動の強化、のぞましい授業の基盤づくりをする方法論として

バズ学習法を取り入れた。

町内バズ（豊浜中）、毎週水曜日の6校時を終えて、町内のお寺、神社、公民館、集会所等の10会場に分かれてバズ学習をする。会場までは交通安全訓練の場でもある。バズ長の号令で進行されるが、まず個人で取り組み、次に班で取り組んでいる。年度頭初に作製された計画により、毎回2教科を学習する。学習後、グループ活動の反省、保護者の気付き、教師の気付き等を発表、掃除をして解散する。

この間の時間は、1時間30分である。プリント課題は、翌日教科委員を通じ、教科担当者に提出する。教師は、評価と補充をする。この他、地域活動を8回、清掃活動を6回組み込んでいる。

30分学活（豊中）、30分学活は基礎学力を高める立場から、自己課題を見つけ、どうつかみ、その課題へのせまり方や、解決のしかたを30分学活で練り強化する。その方策として、授業の中での確認テストの実施、毎週、火、水、金と3回の朝の10分間テスト（問題は教師が作製、採点とその後の正誤一覧表、問題別誤答率表を教科委員で整理作製し、クラスに提示、クラスとしての課題を出す。）誤答の部分は、自己課題として他に説明できるまで取り組ませる。また30分学活は、教師としての専門性を問われる場でもあり、生徒の評価活動を含め相談活動の場として活用している。

朝バズから30分学活まで（豊高）、中学校との連携の中で取り組み始めた特設バズであるが、高校の場合、生徒の「つまづき」に焦点を置いた実力診断テスト、学期毎の総括作業、科学的に生徒をとらえる場として、諸検査をもとにした事例研究を進めてきた。進路保障の観点に立った取り組みをしてきたと思っていたが、その根底にあるべき、学力保障の面での進展がみられず、生徒が「わかりたいと思う授業」になっていなかったのである。

そうした時に、私たちに新しい学習法らしきものを提示してくれたのが、49年度の入学生でした。中学校との連携の中で、暗中模索の状況ではありましたが、現状に不満があるのなら、よりベターな学習法を導入しようということで取り組み始めたのが、現行の特設バズである。50分授業を5分短縮し、掃除の後で30分学活を設置し、以後、15分間の朝バズ →教科授業→30分学活 →家庭学習という学習のサイクル化をはかってきている。評価作業として、自己課題帳を用いて、朝バズで前日の家庭学習で取り組むものを明示するようにしている。

反省と展望

私たちが生徒の願いを保障する営みは、主体的に自己確立に向かい、自己表現力をつけていく生徒に変革させることであり、自他相互に尊重し合い、認め合い、協同して民主社会を創造する人間を育成することである。特設バズはこうした点で重要な役割を持つものであるだけに、内容についても、方法についても常に研究していかなくてはならない。①漁業地域において、保護者の出席が得にくい点の取り組みはどうするか。②特設バズが復習バズの域を脱しきれず、家庭学習の代替化していないか。③マンネリ化から脱するため取り組みの方法、チェックポイントを明示しなくてはならない。④家庭学習の習慣化につながるような課題の工夫をどうするか。④個々の生徒に対する相談活動の場としてのとらえ方が不十分でなかったか。また同和教育の観点から、地域社会に働きかけ、3つのコンビ、即ち、学校、家庭、地域社会が1つになる場としての地域バズへ広がっていくことが、今後の課題と展望である。

第４分科会（言語と生活）

言語と生活をどのように結びつけるか

徳島県　徳島市八万南小学校　　北村艶子

1. バズ学習への期待

本来人間尊重でなければならない教育が、理論としてはそれを唱えながら、一歩教室に入ると人を押しのけても競争や発言を求めるハイ・ハイ学習に陥り、一部の子供を除いては、学習意欲が阻害されている。これが優越感と劣等感に支えられた差別の教室を生み、教師中心の授業となり学ぶことの本質を歪めている。これらのことから、自主性に乏しい忍耐力や協調性に欠ける現代っ子の弱点が作られたのではないだろうか。だとすると教育者は信念をもって

○楽しい学習を創造し－わかる・できる喜びを感じる学習

○差別の教室から、解放の教室への脱皮をはかり－本音をはける学習・わからないことが、わからないといえる学習。

○自己の可能性に挑戦する学習－ひとりひとりが自分の可能性にいどみ、自己開発を支える学習。

○豊かな人間関係を促進する学習－はげまし合い・助け合う学習。

などの確立をはからなければならない。いいかえると、授業の中で仲間と思いめぐらしながら、みがき合い追求していく集団学習。やる気をおこし可能性を最大限に発揮して、ひとりひとりが生きる喜び・わかる喜びが湧く楽しい学習方式。よい個人はよい集団によってつくられ、よい集団はよい個人をつくるという相互作用により、個人と集団の関係を統一的に理解し、学級が学習のための望ましい集団として伸びていく。これを基盤として、みんなで話し合い、励まし合い、矛盾を解決し、みんなでよくなり、ひとりひとりが高められる学習方式－これが〝バズ学習〟なのである。

2. バズ学習への取り組み

前述のようにバズ学習は、ひとりひとりの学力を伸ばし、人間関係を高める指導の統合である。そこで指導目標もこの両者で設定する。

① 認知的目標（知識・技能・能力など）

○気付くこと

○知ること

○発見すること

○洞察すること

② 態度的目標（人間関係）

○学習に対する構え

○教師や仲間に対する態度

○協力・自立・積極性などの社会的態度

課題のないところに学習は存在しない。適切な課題の構成と提示、解決方法の指示などが必要となる。

課題解決への取り組みとしては

① 拡散反応（分類）　類別・弁別・比較・対応などによって考え、解決への予想を立て、方向や見通しをもつ。

② 集中反応（初発）　課題解決に没頭し、予想を実証する解決行動

③ 思索反応（持続）　努力を積み重ねる

④ 主体反応（確認）　学習を反省し、問題点解決事項などを明確にする。

⑤ 発展反応（応用）　練習により、より確実に知り他へも適用する

などの方法をとる。

実践にあたっては、まず機能としてのことばづくりから始めなければならない。それは、明るい人間関係に支えられた集団作りを母体として、機能的に練習を積み重ねていかなければならない。

(a) 対人法（二人バズ・ペアバズ）　教え合い・相互確認

(b) 輪番法（四人バズ・仲よしバズ）　順番に意見や感想を述べ合う。全員発言

(c) 自由話法（自由バズ・コンパニオンバズ）　自主グループ・自由課題・意見をまとめる。

(d) 問題解決法（単純バズ・複合バズ・深化バズ）　複雑な思考を要したり、問題解決をする場合、多面的な見方や考え方ができる。
ラダーステップ・自由発言・解決事項をまとめる。

(e) 発展法（おはようバズ・さよならバズ・ゴツコバズ）　楽しい方法を創作

バズ学習による授業過程としてはいろいろ考えられるが、基本原理としては、次の五つが考えられる。

○個人　課題取り組み、学習方向付けの明確化

○グループ　情報交換、相互援助、共同思考

○全体　グループで未解決問題の共同思考、問題解決

○グループ　学習事項の確認、まとめ

○個人　定着、応用、発展

学習は本来、個人に始まって個人に終結する。だとすると、評価もまず自己評価をふまえなければならない。計画・指導・評価というサイクルに従った自己調整機能、つまりフィードバックの効果を期待しよう。

以上バズ学習の取り組みについて概略述べてきた。望ましい集団作りから出発し、それに命を与える位置づけ、楽しい展開、フィードバックによる定着、更に教師の創意をこそ期待したい。

3. バズ学習の実践

① 出　発

話し合いの出発は、うまく話せることよりも参加できることである。そのためには明るい学級作りが必要であることは前に述べたが、話し易い場、話題を提供してやらなければならない。更に国語学習を中心として「話し聞く」学習を発達段階に応じてしっかりとらえさせる。こうして情緒的にも技能的にも楽しく話し合える準備から、バズ学習に入る。

② バズ活動

○ペアバズ……となりの子と二人で話し合う。

○四人バズ……指名役をきめて、順番に全員が発言する。

友達の言うことをよく聞いて、自分の意見と同じところ、ちがうところを聞き分け、特にちがうところを大切にする。

指名役は固定しないで輪番にする。

能力の低い子を、みんなで助け合って発言できるようにする。

ここでは、楽しいバズから、気付くバズへの段階を確かに進ませる。

③ バズ学習

○単純バズ……学習指導の展開に従って、ここで、このようなことを、このように話し合わせたいという指導意図に従って設問する。この場合、問題解決につながるものでなければならない。

○深化バズ……学習展開にそって、ラダーステップによるプログラムを作成し、これを一つのフレームとして、その構成をする。そのステップの一つ一つは、教師の教材観によって、最も適切に作られ、児童間の相互作用によって、ひとりひとりの立場と意見を尊重しながらも、気付く力、高める力を育て、自主的に学習を進める効果的学習方法なのである。

④ バズ教育

○生活バズ……教育というものが、望ましい社会形成者としての人間作りだとすれば、その基盤である小学校教育に於ては、全生活の指導がなされなければならない。そう考えてみると、教科教育以外の指導の場でも、ひとりひとりを認め、人間として伸ばすために、話し合いによる相互作用を重く見て、実践に結びつけたい。

4．今後の課題

未来への可能性を無限に秘めて絶えず伸びる子供達、教師も常によりよい指導法の実践を求めて研究がなされなければならない。バズ学習がよろこびである。……という子供達の声に支えられてその効果と価値を信じて歩んできた。

――― 学習の主体は、子供である。――――― との前提に立って、方法は固定化せず、実態に合わせて、絶えずよりよいものへと進めていきたい。そして、真に自己教育できるバズへと更に研究を深めたい。

第4分科会（言語と生活）

自己評価・相互評価を生かした作文指導

愛知県　春日井市立藤山台中学校　　大島郁雄

1. はじめに

作文の授業になると、「どう書けばよいのかわからない」という生徒の声を聞く。こういう生徒は想を練る段階でつまづきを持っている場合が多い。これらの悩みを解決してやるには、生徒ひとりひとりの特性を把握することが前提条件である。その上に立って、日常生活の中でとらえた感動を文章にまとめる方法を身につけさせる指導が必要である。本論では、記述前の過程で自己評価、相互評価を活用して、文章表現力をどう高めていくかについて考えてみたい。

2. 生徒の実態

文部省「書くことの指導　」の評価の観点を参考にして、分析・考察してみた。本校1学年の実態の概要は次の通りである。

○内容面　(ア) 素材内容の追求が概念的で、平板に流れている。　(イ) 山場がなく、主題の不明確な作文が目立つ。

○構成面　(ア) 改行は、形式で、無意味なものが目立つ。　(イ) だらだら文が多い。
　　(ウ) 接続詞、接続助詞の適切な使い方のできない作品も一部みられた。

○記載面　(ア) 句点はよいが、読点の打ち過ぎが目立つ。　(イ) 既習の漢字の使用量が少ない。

3. 研究の方法

学年の実態の上に立って、次のような方法で実践した。

(1) 文章表現過程において、文章を書くまでの活動を大切にする。

(2) 生徒相互の働きかけを中心とする情報交換の場を指導段階ごとに設定し、そこで自己評価、相互評価できるようにする。

(3) 文章表現過程において、学習状況を知ったり、作品を教材として取り上げたりするために、抽出生を選び、指導の手がかりとする。

(4) 物の見方、考え方を深めるために、班ノート、読書感想メモ、短文づくりを行わせる。

4. 基本的な指導過程

基本的な指導過程を次のように設定してみた。

(1) 目標を決め、計画を立てる。（自）　　(2) 主題を決め、材料を集める。（自・相）

(3) 材料を精選し、構成を考える。（自・相）　　(4) 記述、推考する。（自・相）

(5) 清書する。（自）　　(6) 発表する。（相）

自己評価、相互評価を表現過程の各段階に位置づけることにより、現時点での学習活動を確認し、反省し、次の段階への具体的な手がかりを持つことができると考える。

ア. 評価の方法

評価は、資料(1)のような観点に従い、表現過程の各段階でさせた。その記述前での方法は、各自で想を練る →教材について全員で検討する →自己評価 →修正 →隣り同士で説明し合う →相互評価 →修正。記述後での方法は、自己評価 →修正 →作文を読み合う →相互評価するという過程を取った。そして、授業を進めるにあたって抽出生を設定し、指導の手がかりとした。

5. 授業の実際

(1) 主題を決める過程でA子の主題を取り上げた理由

学級全体として、物事のとらえ方が表面的で、何を書き表そうとしているのか、主題が焦点化していなかった。そこで、A子をその代表例として取り上げ、検討させた。主題は、約50字にまとめさせた。

○A子の主題、ピアノの練習とクラブ活動を両立させるのは大変だ。勉強もしなければならないし毎日がいそがしい。　全体の場で指摘された概要は、(ア)身近な題材を選んでいるのはよい。(イ)自分のどんな気持ちを書こうとしているのかわからない。(ウ)何を書こうとしているのかわからない。ということである。その結果、次のように修正された。

○ピアノの練習とクラブ活動を両立させるのは大変だが、ピアノは私の生きがいだ。自分の弱い心に負けないで頑張りたい。

(2) 材料を精選し、構成を考える過程でA子の材料、構成を取り上げた理由

学級全体として、材料の選択にも片寄りがみられ、同一的なものが多かった。また、材料も少なく論理的に筋道の通っていない構成もみられた。そこでA子をその代表例として取り上げ検討させた。

○A子の材料、構成	○A子の材料、構成（修正後）
①幼稚園の時から始めたピアノ	①幼稚園の時から始めたピアノ
②最近、ピアノの練習時間が短い。	②クラブの練習でつかれて満足にできない。
③ピアノを練習する時間が限られている。	③母とピアノの練習のことで口げんかをする。
④かたよった練習しかできない。	④ピアノを休んだ日はさみしい。
⑤両立させるための計画を立てる。	⑤両立させるための計画を立てる。
⑥ピアノは、私の生きがいだ。	⑥ピアノは、私の生きがいだ。

全体の場で指摘された概要は、(ア)うまく文にまとめてある。(イ)似たような材料がある。(ウ)気持ちも書くとよい。(エ)ピアノに関係ある経験や出来事があればつけ加えるとよい、ということである。

その結果、類似的な材料が省かれ、新しい材料がつけ加えられ、前述のように修正された。

6. まとめと今後の問題

相互に話し合い、評価することにより、常に立ち止まって考える習慣が身についてきた。また、教材文として取り上げたことにより、文章にまとめる方法が身につき、作文に対する親しみが持てるようになってきた。

今後の問題として、個性的で、創造的な文章をどう書かせていくか。評価の多用さ、評価の観点は一律でよいのか等々の問題が山積みしている。今後、さらに検討を加え、よりよい指導法をめざしたい。

第4分科会（言語と生活）

発言とノート指導による表現力の養成

愛知県　豊川市立南部中学校　　鈴木　昭

1. 表現力の指導で思うこと

宮城まり子さんの「ねむの木の詩がきこえる」の映画の中で、安ちゃんという子どもに対するまり子さんの精魂傾けた実践がでてくる。安ちゃんは重度自閉症で、全く言語表現を失ってしまっている子どもである。

今まで約30年間のうち、28回学級を担任してきた私の学級にも、安ちゃんに近い、ものを一言も言わず、何も書いてくれない子がいた。私はそうした子どもをいつも手近かに置き、体で表現させていくようにしてきた。一般的な話題として表現力については、時宜に応じ内容に応じて適切な応答ができ、話ができることや書くことができるためにどうするかということがでて、あまり特殊な例については話題も少なかった。そして「授業中活発な発言をさせるにはどうしたらよいか」「相手にわかるように伝達する技能は、どのような内容と方法で養成すればよいか」「思考のあらわれや表現力養成の場として、ノート指導をどのようにすすめるか」「見たこと聞いたこと感じたこと考えたことなど表現させる（多分に作文指導の面から）にはどうしたらよいか」‥‥ 等々、教師のもっている要求とかなりずれていることがらについて、問題が提起されてきた。

私は、子どもたちに対し、「表現する」ということについて、話さなければだめ書かなければだめだという要求をしていない。とにかく何らかの方法でもって、自分の言いたいことを正しく相手に伝えることができればよいと考えている。いくらさそいかけても絶対にしゃべらない子、しゃべりすぎる子、大人のようなことをいう子、全く自分でもわかっているのかと思えるほどわからない話をする子、おどろくほどすばらしい文を書く子、書こうとしない子、書けない子など、ほんとうに幾層もの段階をもち種々様々である。したがって「表現させる」ということについては、必ずひとりひとりということを考え、生育歴、既成の能力などよく調べ、ひとりひとりの表現方法が違うこともよくのみこんだ上で、あらゆる機会をつかって指導にあたらなければならない。決して無為無策であってはならないのである。もちろん、表現力についての到達目標はもち、指導の平均的なステップはもっていなければならないが、具体的に指導する段階では、その子に応じた個別指導が大切だと思う。

にっと笑って顔見合わせ心の通じることもある。ねむの木学園の安ちゃんのように指でトントンやることによって応答できることもある。表現方法は、話すこと書くことだけでなく、全身の機能をつかえばいくらでもできる。それを教師は認めて生かしていかなければならない。ただある到達目標をもっている以上、それに近づけるように時に訓練を必要とするが、子どもが口を閉ざさない程度にすすめるべきで、相手に即応して機微な指導がのぞまれる。

以上のことをもとにすべてをとりあげると、問題も広く複雑なので、今回は授業にかかわって二つの問題だけについて考えと実践を述べ、提案にかえたいと思う。

第４分科会（言葉と生活）

豊かな表現力をつける為にどう取り組めばよいか
―――英語の基礎学力の向上をめざして―――

豊高校区教育推進協議会　森岡　勉（豊中）

1、地域・生徒の実態

何か一つのことに対して取り組みをする場合、その取り組みの道しるべとなる実態を充分把握する必要がある。そこで子供達の実態を述べてみると、

○幼児期からの生活環境による語い力の乏しさ・限定された言語運用能力

○生活様式から推察できるように家庭学習が定着しにくい。

○しかし、近年豊浜・豊町においても地域バズがおこなわれるようになり、親・子供に変化がみられる。

英語科の場合

英語科は中学校に入学し初めて習う教科で、最初は好きな教科の１つであるが、半年、１年とたつにつれ、生徒の興味も薄れ学習意欲が低下している。

○基礎学力が低い
○学力差が大きい　→　学習意欲の欠如

○しかし、豊浜・豊中学校でバズの取り組みが始まって以来、だんだんと学力の底上げがみられる。

○英語意識調査（別表参照）をみると、英語学習の目的は

①高等学校へ入学するために必要だから（６０％）
②学校の授業にあるから（５４％）
　→受け身的な意識である

また、好きか嫌いでは、嫌いな者が４０％近くいる。

○基礎学力調査（中３の４月）・統一学力検査（高校入学時）（別表参照）を見て悪いのは、doとdoes、疑問文、時間の表現、動詞の変化、形容詞の比較級・最上級、受動態等である。つづりのミスは、日本語や発音にまどわされたり、ローマ字的に表記している。

2、分科会「言葉と生活」の本年度の歩み

６月　幼～高校の教職員１９名が集まり、言葉と生活について話し合う。
幼～高一貫態勢をめざす中で、地域の児童生徒に豊かな表現力をつける取り組みをどうするかというテーマで研究していこう。
（背景―言葉を通して自分の気持ち・意思を相手に伝達しにくい。表現力がない）
○国語科――表現力の中で、作文について各校の実践を出し合う。
○英語科――表現力の前に、まず、基礎的学力のつまづきをみつけ、それから言語認識力（日本語と英語の相互）を高める取り組みをしていく。

８月　提案は英語科をやり、国語科は提案はしないが、指導法・生徒作品を通して研究する。

3．取り組み

○上記の事から、取り組みの柱として

(1) 興味づけ

(2) 反復強化

(3) 辞書引き・使用

(4) 見通しをもった学習法

(5) 語順のまちがいをなくする指導

(6) 単語の綴りと読みの法則を知らせる

(7) 自己表現活動ー身近かな題材

(8) 入門基礎講座（高校）

(9) 生徒相互点検確認活動

を考え、実践例を出し合った。

4．今後の課題

(1) 幼・小・中・高一貫態勢を、授業研究・情報交換することにより具体的に実践する。

(2) 分科会の活動を定例化、活発化する。

(3) 学力格差を克服し、生徒にとってわかる授業を作る。そのためには、内容ある教材の精選・整理編成をする。

(4) 上記の取り組みの柱をもとに実践し、子供達に少しでも良い変化がみられれば、それに深みを加え、逆の場合には別の角度から創意工夫を試みる。

(5) 国語科と英語科は教科は違うが、言語として共通課題があり、それをみつめ、とらえることにより相互に向上させる。

思考の基礎として言語認識力を高める。ー日本語の力も高めていく取り組みを考える。

第5分科会（社会と生活）
ひとりひとりが意欲的にとり組む授業をめざして
自己評価をとり入れて

愛知県　春日井市立勝川小学校　　佐橋修吾

1．はじめに

私たちは、小単元や単元ごとの指導後にテストを行ない、採点をして各自の評価をするが、時として「なぜ、この問題ができないのか」と、期待はずれで落胆するときがある。むろん、児童の記憶違いや早合点による誤答もあるが、教師としては、自らの指導をまず反省しなければならないだろう。

本校では、ここ数年来小集団の学習形態をとり入れて、学習の効率化をはかる指導法の研究にとり組んでいる。

私は、日々の授業の中での評価を重視することによって、ひとりひとりが1つ1つの事柄を確実に理解するような指導を考えている。

ここでは、昨年度と本年度の実践から、5・6年の社会科指導を中心に発表する。

2．小集団の中での即時評価

(1) 小集団（班）づくり

5年生になると学級編成が行なわれたが、4月末になると、児童の顔と名前が一致でき、また、各児童の個性もほぼ把握できるようになったので、一斉学習形態から4人（一部5人）グループの男女混合小集団（班）の学習形態にした。

班づくりは、まず班長（男女各1名）を選び、次に希望する児童を組んで1つの班をつくった。

児童たちは、班づくりにとても興味をもってとり組むけれども、困ったことに、いつもあぶれてしまう児童がいる。それに、上位児童の多い班や反対に下位児童の多い班も出てきた。このような原因は、児童たちの交友関係のせまさにあると思う。

私は、学級の児童が皆仲良く学習させるように、以下のことを行なった。

①前に同じ班であった児童とは一緒にならない。（特に同性同志）

②班長になっていない児童を優先的に班長にさせる。（下位児童にも班への意識を自覚させる）

③下位児童の多い班は、教師がメンバー替えをする。（班ごとの能力差を小さくする）

④1ヶ月ごとに班の再編成をする。（多くの児童との接触）

⑤1ヶ月に1～2回の班長会を開いて、各班の問題を話し合ったり、学習ルールの徹底や下位児童への気配り等の指導した。（リーダーとしての責任感をもたせる）

⑥班ごとの研究発表会等の催しを行なった。（協調性を養う）

このようにして進めて行ったら、仲良し同志だけで固まることがなくなり、自分から新しい仲間づくりをしようとする態度が出てきた。

(2) 学習目標・態度目標と即時評価

本時の学習への見通しや心構えを持たせる上で、学習目標をはっきりと児童に示すことが大切であると考える。そのためには、学習目標を板書し、それを黄色チョークでかこむことによって、学習の構えを集中させた。また、問題提起の形をとって、学習を進める効果もねらった。

児童は、目的意識を持って授業にのぞむようになり、学習内容からの脱線はなくなった。その上授業の流れを、まとめながら学習できるようになったようだ。

態度目標は、当初授業開始前に決めていたが、小集団での学習が進んだ所で、班で話し合わせてその日やその週のきまりを決めさせて学習にのぞませた。班ごとの目標は帰りの会で自己評価、相互評価をして反省させた。児童たちは、多少とも意識するので効果的である。

(3) 即時評価の実際

①隣接法

主に学習事項の確認のときに活用させた。導入時の前時の学習確認や本時の目標の確認などに行なわせた。

向かい合った2人(男女)が発表し合って、学習事項の確認を確かにさせることをめざした。

これは、時間もかからずしかも簡単な発表なので、全員が得意になって行なっていたようだ。

2学期頃から、簡単な問題の答合わせのときにも、この方法で確認させた。

②自由会話法

1つの課題を班全員で考えさせ、ひとりよりも数多くの考えを出す中で、より深い学習をさせようと思った。

5月の時点では、騒がしいだけで本当に話し合いにより学習が深まっているのかはなはだ疑問であった。指名すると「わかりません」の返答も目立っていた。そこで、次のルールを作って、深まりのある話し合いの定着をはかった。

ア. まず、自分で考える。

イ. 自分の考えを発表する。(班で)

ウ. 友達の考えを自分のと比較する。(班で)

エ. 気づいたこと、改めたことを発表する。(班で)

オ. 学級全体で発表し合う。

カ. 先生の教えにより、まとめ、確認する。

初期では、班で発表する前の自分で考える所で充分時間をとった。しだいに、班での話し合いは上手になったが、意見を出し合った後班でまとめる段階では、自分の考えに固執して言い争いに終わるときもあった。私は、学級全体で発表し合う機会をとらえ、上手な話し合いのし方の指導をしながら、班での話し合いの深まりを助長させて来た。

また、学級全体で発表するときに、班の上位児のみが発表しないように、順番で発表させた。(班指名の場合) さらに自分の考えを明確にすると同時に、友達の意見をよく聞くようにするため、自分の考えと異なる考えも班で出た考えとして一緒に発表させた。

児童たちは、皆が発表することにより、学習への参加度が高まり、学習意欲もそれにつれて高まって来たのを感じる。だが、1時間中にあまり多いと授業に落ち着きがなくなるため、多くて

3回位にした方がよいようだ。

③ハンドサイン

教師の問いかけや友達の意見に対して、自分の考えをハンドサインによって明確に意志表示させることをねらった。これは、4年のときから使っていたので、児童は抵抗なく行なうことができた。

しかし、友達の顔色を見ながら、サインを出す児童がいないわけではない。自分自身の学習のために、わからない場合は「わからない」のサインを出して、わかるまで頑張ることの大切さを説きつつ学習させた。

ハンドサインという簡単な意志表示をさせることにより、児童の参加度や意欲づけの面でも効果的であり、班や全体での話し合いに活用した。「つけたし」や「質問」などのサインで、話し合いも活発にスムーズに行なうようになった。

授業を進めるとき、学習事項1つ1つが確かに理解されなければ、次の段階への移行は適当ではないだろう。私たちは、課題が正しく児童に理確されたかを確かめる手段として即時評価を活用してきた。上記の方法で、児童の理解度の状況把握をして、次の課題へ進むかの判断材料とした。「わからない」ときは、むろんフィードバックして指導した。

3. 「自己評価」に対する基本的な構え

社会科の学習は、いろいろな社会的事象をいろんな角度から考えさせ理解させることが大切だから小集団を使った学習は、とても有効的な学習方法であろう。

私は、ひとりひとりが意欲的にしかも1つ1つを確認しながら学習を深めるように、自己評価を用いた。これは、ひとりひとりの思考過程を知る上でも役立つと思う。（資料参照）

原則的には、右の4段階ごとに評価をさせながら、学習を進めた。基本とする考え方は以下のようである。

	自分で考えた後
	班での話し合いの後
	学級全体での話し合いの後
	教師の指導後

（×：わからない。
△：だいたいわかった。
○：わかった。
◎：よくわかった。）

(1) 自分の理解度を自覚し、学習の構えをつくる。

教師や上位児によって学習事項を教えてもらうといった受動的な態度は、学習効果も意欲も高まって行かないだろう。小集団での学習にしろ、各自が積極的にとり組まねば、理解の定着もしっかりしなくなる。課題に対する個人の考えを大切にし、わからない児童は、何がわからないのかを意識化し、そのことに注意を集中させたい。また、わかったと思う児童には、自信をつけさせたい。自分で自分の学習を気づかいながら、1つ1つを確かめて行く指導法をとろうと思う。

また、潜在的にもっている向上心（欲）を、自分の理解度を見つめさすことによって、次への意欲をふるい立たせることにもなる。

(2) 授業後より授業中の自己評価の大切さ

学習態度は、短期間で指導して目標を達成できるものではないが、授業内容は限られた1時間の授業の中で目標達成しなければならない。1時間ごとの授業は、常に新しい事柄を理解させるよう

に進むことを要求される。

授業後の学習に対する自己評価は、次への反省や意欲づけの面では効果的であろう。しかし、私は授業後に、たとえ少数の児童であっても「わからない」と評価した場合、その児童にとってその授業は満足する授業でなかったことになる。授業後「わからない」とならないように、学習過程の中でつまづきを正したいと思う。そうして、1つ1つの事柄を確実に理解させて行きたい。

(3) 自分の考えをまとめて文章化する。

社会科では、事実にもとづいて、自分の考えと相手の考えを互いに理解し合って学習することが大切であろう。話し合いで、自信のなさから他人の言動になびくことは好ましくない。自分の考えを文章化して、より明確にさせて話し合いに臨ませようとはかった。

4. おわりに

小集団を使った学習を進めれば、児童の参加度も高く、活発に学習するようになる。しかし、ひとりひとりが他力本願的なとり組みをしたら、「学習」の伸長は期待できないだろう。教師がひとりひとりに目を向け、学習の節々で即時評価及び自己評価して授業を進めることは、落ちこぼれをなくす点から大切なことだと思う。

課題に対する最終的な判断は教師にあるのだが、児童たちが発見できない見方・考え方を資料や事実を通して、いかに気づかせ、理解させるかといった技術を修得する必要がある。

（資　料）　自己評価の実際例

（・「幕府」の言葉を教える。
・鎌倉の場所を地図で確認させる。）

課　題

源頼朝は、なぜ鎌倉に幕府を開いたのだろう。

（Ｈ・Ｙ男）　　（注：たて書き）

自分で評価する。

△	・関東平野の広い土地があるから。 ・（鎌倉は）山に囲まれてるので敵から守りやすいから ・（鎌倉は）敵がせめて来たら、海に逃げれるから。	→ 自分で考えたこと。
○	・関東地方は、源氏の味方が多いから。 ・（京都より）西の方は平氏の味方が多かったから。	→ 班での話し合いで、新しく知ったこと。
◎	・京都には、平氏と親せきの天皇がいるから（政治）がやりにくいから。	→ 学級全体での話し合いで新しく知ったこと。
◎	・（平安時代の貴族の生活を想起し）ぜいたくな生活をきらった。（平清盛と源義仲の話を聞く）	→ 教師の指導によって（考えの確認をし）新しく知ったこと。

第５分科会（社会と生活）

社会生活における社会的意識をどう育てるか
――５年　農業学習の導入を通して――

兵庫県　姫路市立旭陽小学校　　池田正弘

1．はじめに

今日、私たちは高度に発達した（諸外国及び過去の日本の社会と比べて）社会に住んでいる。この高度に発達した社会にあって望まれるのは、互いの人権の尊重を基盤とした個々人の生活の充実である。このうち生活について考えた場合、その中味は地方により、家庭により大きな差異があり、個人個人の努力ではどうにもしようがない状態、あるいは人権を無視された生活を送らされている場合も見受けられる。そこで、同じく生命を持った私たちは人々の協力や支え合いをもとに、より良い生活を求めて、環境をいかしたり、つくり変える工夫や努力が必要となってくる。そのために学習の場では、まず自分たちがおかれている現状と地域を正しくつかまなければならない。これと並行して、人間尊重の精神からも各自の能力を十分伸ばし、支え合いを育てるためにもバズの導入が大切でないかと考える。

2．同和教育と社会科の学習

社会科においては社会科の目標を達成することが同和教育に通じる。したがって表面的な理解にとどめず、子供たちが社会的原理や法則をつかみとり、さらにその背景をも追求するような学習指導を展開する必要がある。また社会科学習の中に同和教育的内容が含まれている場合には、その内容を深めていく過程で同和教育のねらいに焦点をあてた指導を展開し、差別についての科学的認識を養わねばならない。これと今一つ大事なことは、学習のすべての場で、どの子も大事にした指導がなければ人権尊重の学習とは言えず、その達成に効果的と言われているバズの位置づけが重要となってくる。

５年の農業学習では、主な農産物及びその分布、土地利用などの特色を理解し、農業の盛んな地方の具体例を取り上げ、人々が自然条件を生かしながら技術の改良、経営の改善などに努めていることを理解させる。また農家の生活の変化と機械化、兼業との関連にも目を向けさせ、食料確保の上で農作物の生産が大切であることを理解させるといった教科のねらいがある。しかし私たちは、政策的に見逃されてきた弱い農業や農家、工業等との格差（収入面中心に）さらに現在もとられている政策などにも目を向け、正しく社会の現状や在り方を理解させねばならない。

3．具体的実践

○児童ならびに地域の実態からスムーズに全国、代表的な地域を取りあげての学習に入ることがむずかしい。そこで見学や統計資料を活用し、地域を中心とした農業生産の実態とそこに存在する不合理な点をとらえ、自己とのかかわりで今後のあり方を考える態度や能力を培おうとした。さらにそのため、農業を行っている家庭の実態をとりあげ、動機づけとし、自分たちの親（家庭）の、地域のかかえる問題を追求させ、そこから日本の農業一般へ入ることを試みた。

○校区の実態

・周囲には農地が広がっている（姫路市の農業振興地域の一つで校区面積の８割近くが田畑）とは言え、純農村とはほど遠い。すなわち、２割近くの家庭が田畑を有しているとは言え、すべてが小規模で、その結果兼業農家がほとんどである。さらに、全国の農家と同じでわずかながらも農業離れの傾向にある。

・少ないながらも国鉄の駅を中心に商店がならんでいる。工場は大規模工場は校区にはないが隣接校区にはいくつかある。地場産業としては皮革工場が数軒ある。

・この校区にも宅地開発の波がしだいにおし寄せ、毎年６・７０名ほどずつ児童数が増えている。

旭陽校区専業と兼業農家数のうつりかわり（戸）

	総数	専業	第１種兼業	第２種兼業
S35年	503	18	77	408
40年	492	13	75	404
45年	479	11	65	403
50年	453	2	5	446
52年	448	3	6	439

規模別農家数のうつりかわり（戸）

	0.1～0.3ha	0.3～0.5ha	0.5～0.7ha	0.7～1ha	1ha以上
S35年	240	145	67	40	11
40年	237	142	63	39	11
45年	235	140	58	36	10
50年	232	139	54	24	4
52年	242	133	45	21	7

○児童の実態

・姫路市の農業については五年生までに、おもな農産物生産活動について、土地の様子や交通などと結びつけて学習しているがとらえ方は浅い。例えば、田畑を有する家庭の子供であっても農業の手伝いの経験がなかったり、栽培物を知らなかったりする。これらの実態をふまえて地域ならびに日本の農業の生産活動の様子や人々の苦労、生産向上へ努力、今後の農業のあり方を追求させていかなければならない。（田畑を有する家庭の児童３５名中１２名）

小　単　元　「農家のくらしとその動き」

(1) 単元の目標

・自分たちの地域の農業ならびに専業農家の現状について、生産活動と自分たちとのかかわりから見つめ、日本の農業には種々の問題が生じているのがわかり、今後の日本の農業について目を向ける。

・各種の資料の活用により、種々の問題の発生原因や背景を追求していく態度や能力を伸ばす。

(2) 単元の構造　　〔農家のくらしとその動き〕

A 変わりつつある校区の農業 ③ ──→ B 専業農業の動き ②

どのような物が作られているだろうか
農業生産の方法や生活はどうだろう

○おもな農作物と時期
○経営の規模
○おもな機械
○農業経営の変化
○兼業農家の生活

農家の人々はより良い生活を求め土地利用や生産方法に工夫や努力をしたり、

農業だけで生活するためにどんな工夫や努力がされているだろう

○おもな農作物と時期
○米作りと利益の多い作物
○農業協同組合の働き
○専業農家の生活

米作中心の農業だが米作りや農業専門の家は減っている。これは農業だけでは生活しにくく、会社へ勤めだしたからだ。

兼業農家に変わりつつある。

専業農家は経営規模も大きいが、もうけの多い作物を一年を通していろいろ作っておられる。しかし値段が一定でないので問題もあるようだ。

(3) バズの導入例

A次第2時

問題（兼業農家が増えてきているのはなぜだろう）

予想（全体の場で）

○田が少ない農家が多く生活できないから
○お金がよくもうかるように
○会社づとめの方が農家よりよくもうかるから
○農業は仕事がきついから

予想が論理性に欠ける。しかも自分、地域と関係さした思考ができていない。
すべての児童が学習に参加しているか

学習の過程
事実提示
問題発見
予　想
仮　説
検　証
適用吟味

教師の補助発言

（昔は田が少なくても生活できたのだろうか。KさんやM君の家の田の広さは昔のままだよ）

グループバズ

S．僕はあんまりわからへんけど生活が苦しくなったので会社へ行くようになったんやと思う。

N．それやったら昔もそうやと思う。だからほかに会社へ行けるように何かができたんだと思う。

T．僕はNさんの言ったことやけど会社ができたんやと思います。

S．みんなのんを聞いとって思たんやけど車や機械ができて働きに行きやすくなったんやと思います。

K．私は機械が作られて田んぼの仕事が早く楽にできだし、車やったら便利だからよけいに会社へ行くようになったんだと思います。会社もつくられたりあったりしたんだと思います。

S．この校区に会社はあまりなくても近くには会社があるし、車やと便利やからや。

K．車は関係ないけど、機械使いだして時間があまるし、遊んでおくのもったいないから会社へ、

T．会社へ行ったらお金も入ってくるけど、もったいないぐらいの理由では会社へ行けないと思うよ。働く時間や日がきちっと決まっとうから。

N．私もT君と同じです。それよりも楽しようと思って機械を使いだした。でもお金がいる。それで会社へ行きだしたんだと思います。

（全員大体意見がまとまる）

T．兼業農家になってお百姓さんはお金がようもうかり、家を大きくしたり、クーラーや車なんか買いよってんだろう。

S．兼業農家ではいろんな物を作ったり、一年中物を作っている家もあるよ。だから工夫しよってんや。

K．私もS君と同じです。この間、となりの家の田がうめられたけどそれは田を売ったからだそうです。だから兼業農家でもよくもうかるとは決まってないと思います。

⋮

出てきた仮説

①農家では機械を使いだしたために時間ができ、会社へ行けるようになったのだろう。

②小さい農家が多いうえに、いろんな品物が必要になったので会社へ行きだしたのだろう。

③農業だけでは生活できなくなり、つとめる所もあったからだろう。

④農業はしんどいし、もうけも多くないので会社へ行きだしたのだろう。

仮説をまとめるバズ（全体バズ）

教師の手だて……規模別に兼業と専業農家の割合を示した資料提示

A．専業農家はほとんどなくなっていますがあるのは1ha以上の広い田畑を持った農家だけです。だから僕はやはり②と③のまとめがよいと思います。

B．僕は②と③も良いけど①も関係していると思います。それは学校のまわりの田でも機械をよく使っておられるし、機械がなかったら②や③はできないからです。

C．私はB君と同じで――です。それと今では車がたいていの家にあり、会社へ行きやすくなったことも関係していると思います。

A．B君やCさんのを聞いて3つとも関係しているのだと思いました。

D．僕は④も関係していると思います。機械を使って仕事しているけど田植えや暑い日の仕事はしんどいと家の人は言っていました。

E．でもそれやったら専業の農家はないはずです。

D．だから専業は減ってきています。でもまだ専業があるのは、田が広いと作り方なんかで工夫でき、もうけも多くできるからだと思います。

（①・②・③・④すべて関係していることに気づく）

(4) 考　察

上記のグループの思考が完全に正しい方向へ進んでいるかということについては疑問もあるが、思考に深化、広がりはある。このことがバズなしの授業でも可能だったかも知れない。しかし、すべての児童の能力を主体的に伸ばせたかというとバズの導入の有効性は言うまでもない。とりわけ社会科学習においては予想から仮説に練りあげる段階はさまざまな意見交換が必要である。出された意見を修正し、補い、広め、高次の思考へと進む段階であるため、さらにまた全員参加の学習の精神からも、しかも、すべての児童の尊重、意見の尊重という点を考えても、この段階へのバズの導入をまっ先に考えねばならない。なお地域をおさえる学習にバズの導入は能力の劣る児童を伸ばすという点で大変効果的だ。それは思考そのものは苦手、浅くても地域観察という点では他の児童と同じ場合が多い。したがって、劣等観・先入観をうえつけることなく「自分もできるんだ、発表してみよう」という動機づけとなる場合が多い。

私たちは、優秀児、優秀児の発表だけに目を向けてはならない。むしろ……

3．問題点

・現在ならびに最近の郷土をとりあげての学習をすすめる場合には、児童の経験（見学中心）を基盤として、学習は力動的に行ないやすい。しかしそれが過去（児童経験のない場合）にさかのぼる場合にはデーター的な物も不足して学習が進めにくくなる。――→ 検証が表面的に流れてしまう。

・「見放された農業」「将来性のない農業」といった意識をうえつけてはならないが、社会の傾向をどう児童に理解させるか。

第5分科会（社会と生活）

地域を中心として社会状況を適確につかませる教育内容を考える

兵庫県　姫路市立白鷺中学校　　高 礒 忠

1. ＜ねらい＞

地域的課題を中心としての社会的認識の成立を教科学習（社会科学習）を通して、より豊かで、確かなものに再構成し、変容したい。

2. ＜現状は＞

(1) 子供らのおかれている生活を究明させたり、自分の生き方を追求させる社会科が社会についての知識を与え、その知識の詰め込みに終始する暗記学科になり切っている。時間不足のため進度が遅れるといっては悪循環をくり返している。

(2) 中学3年生の95％が高校進学を希望し、その中学生が進学有名校めざして、他人の失敗を喜ぶ入試競争をしている。残りの5％についてその進路保障が十分でない場合がある。

(3) かっては他校区からの越境通学者が多く、いわゆる有名高校への進学率が高く、名門校といわれていた意識が残っている。

(4) 姫路市の中心部を校区にもち、大部分が商業地域である。経済的に上・下の差が大きく、戦後外国人となった人もかなり多く、土着の住民の少ない所である。子供らとの対話が乏しく、ものを、金銭を与えておけば親子の断続はないと考える親が多い。

3. ＜そのために＞

(1) 地域的課題を把握するための観点

①地域的課題とは地域社会の人々によって解決されるべき生活上の具体的な問題である。

②地域的課題を把握するための観点は、地域の人々が生活を維持し、環境を整備してこの中から重要な地域的事象を選択し、これを子供らの学習として組織化する。地域的事象は他からの働きかけによる経済的理由などのために生じることもある。また地域住民自身のための協力がもとになっている事象もある。

(2) 地域的課題をふまえた学習

①地域的課題は大人と子供でその解決の仕方や態度に相違があっても、その重大性に変わりない。

②子供が地域的課題をとらえるには地域の実態を十分に理解する。

③教師が正しく現状を把握する。

④直接経験から具体的に地域を認識させるだけでなく、地理・歴史・公民などの社会科学の知識やみかた、考え方を教える。

⑤地域的事象の中に特殊なものと普遍的なものをみつけ、地域や日本社会の課題を主体的に受けと

める。

⑥地域的課題をもつ学習と社会科学習の内容の系統性との関連は全て小中高一貫したものを考える。

(3) 社会科での地域的課題の把握

①地域の現実に足をふまえて考えようとする姿勢を育てることである。即ち社会の科学的認識を形成するという社会科の基本的なねらいをどうかゝわらせるかが問題である。

(4) 社会的認識の対象

①社会現象である。社会現象についての諸事実の構造的なつながりや、そこによこたわる倫理や法則性を発見していくことである。

(5) より確かな社会的認識

①科学的に究明する。

②総合的な認識をする。

③社会の現実性に近づき、社会現象を構造的に把握する。

(6) 社会現象の構造

①時間的、空間的構造をもち常に働き、変化し、発展している。

②人間が課題解決に努力した歴史、また現在すゝめている姿、さらに将来しなければならない課題的構造である。

(7) 社会現象のとらえ方

①法則性を把握する。

㋐物と物によって

㋑人と物、人と人の関係で

4. <それでは>

(1) 教科学習のとりくみについて(主として社会科学習)

①カリキュラムの立案と実現の中心に行動科学を入れる。

㋐私は近視眼的な子供の社会認識の形成には反対である。生徒の社会認識に総合性をもたせる観点が教科指導上の急務である。現代は社会現象がとらえにくくて総合的に把握しないとだめである。そこで行動科学をとり入れて人間行動の面から総合的に把握する傾向が現われている。

㋑社会現象は個々の社会的行動に還元されるから人間の諸行動の観察や測定でとらえることができる。

②学年の配慮

どの質(校種・学年・時期)で取り扱うか。重複しているから取り除くのでは早計であり、くりかえしだけでもいけない。背景や横のつながりや対立する矛盾を行動的に認識させ、その中にある法則性の発見が大切である。

③あるべき社会科

社会現象の背後にあるものを規定している規則や法則性を科学的、総合性、構造的に把握していくことが大切である。

第５分科会（社会と生活）

社会科の学習におけるバズの成立条件
――学習を深めるための資料と問題意識との関係――

静岡県　静岡市立大里中学校　　安居院 達 男

1．バズをただ取り入れても無駄

世界恐慌の授業で、アメリカ合衆国のようすを押えた上で、「なぜ、世界恐慌がおこったのか」という課題を出したところ、それまで、顔をあげて発表し合っていた生徒たちは一斉に黙ってしまった。教師としては、日本の戦後の不況の原因を学習したあとなので、考えられるはずだと思ったが、さにあらず、「班で話し合ってごらん」といっても、沈黙は 10分も続いた。「こいつら、けしからん」と心の中で思いながらも、紙をわけて、「わからないことを書け」と命じた。いや、書かせておどろいた。「恐慌ってなに」というのから「日本は戦後すぐ不景気になったのに、アメリカは？」「貿易をしていると、どうして恐慌になるのか」など多くの疑問が書かれてあった。「教師失格かな」と思いながらも、ただ話し合わせても無駄だ、何が必要かと考えてみた。

(1)　子どもが黙っていることの意味を考えること。

無気力、課題不鮮明、学習方法不明確、未解決、集団意識未成熟、消極性など。

(2)　考えさせるもとになる基礎が、確実になっているか

(3)　発問が、具体的で段階を押えたものであるか。

「世界恐慌がなぜおこったか」の発問の中には、㋐アメリカ合衆国がなぜ不景気になったか。㋑その合衆国の不景気がなぜ全世界に広まっていったのか。の２つの内容があるから考えにくい。あるいは、両方わからないと意見が出しにくいというわけである。

2．バズ学習において、より学習を深めるための条件

バズ学習をとり入れた授業をよく見る。準備過程 →中心過程 →確認過程と授業は流れ、それぞれで課題が提示され、スムーズに学習が進められていく。　バズ学習についての研究も浅い私が、これを批評するのは生意気だが、何となくもの足りないものを感じる。この「もの足りなさ」はどこからくるのだろうかを考えてみると、

・課題が生徒にとって、対決に値するものであるか

・準備課題と中心課題、あるいは授業の展開の中に、生徒側に立った発展的必然性に起因する場合が多い。課題意識の拡大があるのだろうか。

ア．個人個人（全員）が、自分なりの意見をもって、バズに参加すること。

勿論、全てのバズがこの条件をみたさねばならぬわけではないが、社会科における中心課題のバズは各人が各様の意見をもって参加して、はじめて「広い視野に立って、社会事象をみつめ」ていこうとする社会科の目標にせまることができる考える。では、全ての生徒が「自分なりの考え方」をもてるようにするため条件は何だろうか。

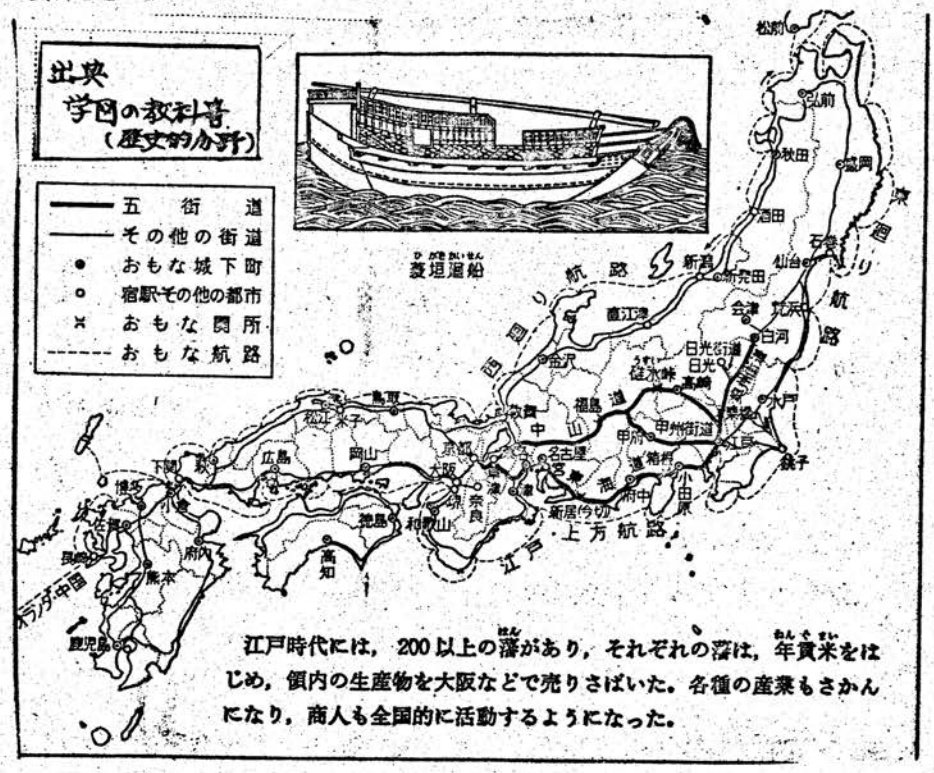
・課題を考えるための基礎的要素とその解決法が生徒の身についているか。

◎その課題を解決しようとする意欲（課題意識）が育てられているか

◎その課題を生んだ事実に対する認識が、具体化されているか、　などが重要なポイントだと思う。

(イ) 課題意識を高める資料の扱い

課題意識のないところには学習は成立しないが、例えば、「江戸時代の交通の発達」の学習で、下記の資料をどう扱ったらよいだろうか。



〔例１〕

この資料を、授業の準備過程のところで提示すると「五街道とは、東海道・・・・を起点と終点、道は海岸線を」などという読みを 80 %の生徒がする。

〔例２〕

五街道とその整備についての準備過程を終えて「なぜこのように整備されたか」という発問をして生徒の道路に関する考え方を出させた上で、この資料を提示すると「先生おかしいよ、なぜ、大阪に五街道が通っていないの」という読みを 98 %の生徒がする。

この両者の読みの違いはどこから来たのだろうか。〔例２〕の場合は、生徒の道路に対する考え方「道路は、物資の輸送や人の交通のためにある」に対して、この資料の京都、大阪間の４ミリが作用し、「大阪は天下の台所」という既習の考え方をもとにした自分たちの道路についての考え方が打破された結果にほかならない。そこで、「五街道は何の目的で整備され、物資はどこを通ってはこばれたのか」という中心課題が必然的に生まれ、学習が発展していくのである。

(ウ) 具体化、イメージ化は、個人の考え方を生みだす基礎、

例えば、四大文明発生地、エジプト文明の学習で「歴史の舞台」としてのナイル川とその周辺のイメージがなければ、生徒はそこに生まれた文明を理解していくことは不可能だろう。生徒たちはいろいろな疑問をもつ、(・砂漠の中になぜ人間が住めるか、・ナイル川のほかにも大きな川はあるのに、・氾濫するとなぜいいの、などがその主なもの)その疑問を地図帳・写真・文書(ナイル川氾濫のようす)で具体化していってはじめて、「ああ、そうか、天文学・測量学の発達したのは、こういう理由があったのか、国王の権力が強いのはこの必要性からか」と考えていくことができるようになる。

3. 社会科の好きな子どもを育てよう。

以上、資料と課題意識、具体化の問題について述べてきたが、この2つが欠けている課題は課題として成立しないし、バズ学習も単なる形式として終ってしまうだろう。生徒たちが「先生の社会科が好きだよ」という根拠は何だろう。先生の顔やスタイルではなく、その先生の授業での教え方の問題であり、きびしく自分の考え方を追いきれたり、あたたかい援助を受ける中で、生徒が「自分は伸びているな」という実感を味わえた時に生まれる信頼関係が「好きだ」という根拠だろう。その意味で「先生の社会科」である。私たちは、すこしでもよい授業をして、社会科の好きな子どもをひとりでも多く育てていきたいものである。

(くわしくは、当日発表資料を参照して下さい)

第５分科会（社会と生活）

歴史的意識を育てる社会科学習
相互作用を生かした指導を通して

愛知県　春日井市立高座小学校　　田本安広

1. はじめに

本校では、とこ数年来、「相互作用を生かした学習指導の研究」を現職教育のテーマにして研究を進めてきた。研究は、基礎的事項から入り、現在では、よい課題の設定方法・指導過程のあり方・評価の方法の追求をする段階にまで達している。

私もバズ学習研究の一員として、全教科にわたりバズ形式の学習指導を続けてきたが、現在でも、全ての教科について、活発に話し合いがなされ、深い時点までの思考の追求がなされているとは言いがたい。とくに歴史の学習は、児童にとって、遠い昔の他の地での出来事という感じがするようでピンとこないようだ。そのため、教師の質問に対しても、教科書に記載されている事柄を読み、答えるだけという児童が多かったようだ。そこで、発表力の少ない社会科の学習を取り上げ、歴史意識を育てるための手段を研究することにした。

2. 研究の方針

この研究では、相互作用を生した学習指導を通して、子ども達に次のような効果があらわれることを仮説としてたてた。

- ○学習に対する参加度の拡大を図ること。
- ○知識・理解の拡充を図ること。
- ○資料活用能力を伸ばすこと。
- ○歴史に対する興味・関心を増すこと。

→ 歴史意識の育成

3. 研究の方法

授業を通して研究を深める。その方法としては、次のような手段を用いることにした。

- ○事前テスト ―――― 子どもの知識力・興味度を知る。
- ○課題の設定 ―――― 思考の深まる指導過程になるよう考慮する。
- ○指導過程の構成 ―――― 話し合いの深まる課題を考える。
- ○課題ごとにおける即時評価 ―――― 理解度・参加度を知る。
- ○プリテスト・評価表 ―――― 学習の反省・次時への意欲づけ

→ 子どもの歴史意識の育成

上に示したことを達成するために、何回も学習指導案をたて、実際に授業を行い、研究を深めることにした。

4. 研究の内容

(1) 歴史学習前の実態

歴史意識について調べた結果は、次のようである。（５月当初調査）

(ア) 歴史上の人物について

児童に知っている歴史上の人物を書かせたところ、次の３名が特に多かった。

徳川家康　豊臣秀吉　織田信長

上記以外の人物としては、源義経や平清盛が出てきたくらいであった。このことから、児童の歴史上の人物についての興味は薄かったと思われる。

(イ) 作文による歴史意識

「昔の生活について」という作文を書かせた。書いてあったことを要約すると次のようになる。

○食物・道具・衣類 ――― 自給自足の生活 ――― 苦労

○現代と昔との比較

現代は昔に比べて便利 ―― 食物・機能・交通・通信・医学

○身分制度がはっきりしていた。（江戸時代のことらしい）

児童作文の内容は、現代社会と昔との比較が多く、現代社会に生まれてよかったというものがほとんどであった。

(ウ) プリテストの結果

社会科年表テスト（歴史学習前、53.5.10 実施）

別紙のとおり

予想されたことであるが、正答数が少なかった。

(2) 歴史意識を育てるための方法

(ア) 予習課題は、教科書や児童が持っている資料集の中から、次時の学習に関係のあると思われる図や写真を指定し、それを見て、気がついたこと、考えついたことをノートに記録させるものである。最初のうちは、忘れてくる児童が見られたが、指導をした結果、それもなくなり、今では全員がやってくるようになった。この課題は、毎時とはいかないが、できる限り多くの機会をとらえて実施している。

教科書の本文を読んで来させるという予習課題は出さないことにしている。それは、事前に教科書を読んでしまうと、学習時に興味を示さなくなり、児童の思考が固定してしまうからである。

一方、図や写真を見て考えることは、文を読むことに比べて時間がかからず、児童によって、いろいろな考え方が出てくることが期待できるからである。

(イ) 資料の活用

資料は、児童が持っている資料集の他に、ＴＰや教師が探したものを中心に使用している。また新聞に載っている歴史上の事柄を折りにふれて使用したこともある。

児童の中には、自分で資料を探して活用したり、学級児童に紹介したりするものが出てきた。

資料の使用は、児童を学習に集中させるために効果があると思う。

(ウ) 時代の特色を理解させる。

学習を進めていく上で必要なことは、単に教科書の内容に追従していくのではなく、その時代時代の特色を児童に意識理解させることであると考えている。それによって児童はポイントをつかみ、印象を強めることができるからである。

特に児童に指導をしたことは、その時代に中心となった人物、及び貴族と武士の区別、また、時代ごとの文化の特色、農民の生活の仕方である。

(エ) 課題と即時評価

大課題は、1時間の学習中、最大限3つ位にしている。それ以上の課題を提示することは時間的に無理があること、内容を追うのに夢中になりポイントが薄らいでくることが予想されるからである。

1時間の授業を効果的に流すには、教師自身の課題に対する取り組み方と、課題を精選することが必要になってくる。

また、課題を提示した後には即時評価が必要である。評価は、相互活動、指名発表、挙手、ハンドサイン、反応器、ノート記述などの方法をとった。

即時評価をすることにより、次のような成果が期待できる。

○目標への到達度を知ることができること。

○学習のまとめができること。

○児童の理解度を、教師自身が把握することができ、教師自身の反省材料になること。

○これから努力する方向をつかませることができること。

(オ) 評価表の利用

1時間の学習内容を反省させることや、学習意欲を高めるために評価表を利用した。評価表には、学習内容の理解度と学習中の態度を、自己及び班で話し合って記入させた。

評価表を使用することにより、児童は本時の学習目標はもちろん次時の学習目標をも把握することができ、意欲化を図ることができること。また、よい評価を得るために学習に集中できるという効果がある。ただ、児童がする評価はとかくあいまいになり易いので、教師がある程度の基準を示してやる必要がある。

(3) 授業の実践例

単元　貴族の世の中（2／11）

本時の学習

目標　○平城京の造営を通して、貴族の権力、財力を理解させる。

○しっかりした考えをもって、話し合いに参加させる。

学習過程

過程	学習活動	指導上の留意点	評価

略

	平城京を造った目的は何か考えなさい		
中心過程	○なぜ、平城京を造ったのか考える。 ・各自考える。 ・班で自由に考える。 ・発表する。 ○平城京がつくられたわけをまとめる。 ○ノート整理をする。	○なぜ平城京を造る必要があったか、しっかり考えさせる。 ○寺院が多いことを思い出させ、考えるためのヒントとする。 ○机間巡視をする。	平城京が造られたわけがわかったか。 （自由会話法）

略

（授業の流れ）

	教師の指導と観察	児童の活動
事前指導	使用資料 （平城京の地図と平城京の模型を記入したＴＰ）	○平城京は大きな都であった。 ○寺院がたくさんあった。 ○学習課題を聞く。
課題提示	○なぜ平城京を造ったのか考えよう。	
個人思想	自分で考える。考えたことを忘れないようにメモをする児童が多い。資料を探している児童もいる。	○自分で考える。 ○ノートにメモをする。
相互活動	班長が司会をして、意見を出させていた。大きな声で発表していた児童が目立った。	○班で自由に意見を出し合う。 ○活発な話し合いをした。
発　表	（話し合いの深め方） ひとりの児童の意見に反対付け足しがあった時は、教師ではなく、発表児童がその児童を指名して新しい意見を聞く。教師の発言を少なくするための工夫である。発表が横道にずれそうな時	○天皇がかわったから都を移した。 ○大きな都が必要であった。人口が増えた。 ○交通の便がよかった。

のみ、教師が助言を与える。

まとめ		
課題提示	○平城京に、お寺がたくさんあったのはなぜだろう。 （平城京の地図を見せる。）	○課題を聞く。
個人思考		○自分で考える。
相互活動	（隣り同志で意見の交換をしていた。机間巡視をする。）	○隣り同志で話し合い意見を出す。
発表	（児童なりの考え方をもとに意見を出していた。）	○お寺参りをする人が多い。 ○仏教を取り入れようとした。 ○仏教を信じていた人が多かった。 ○苦しいこと、つらいことがあった。 ○天候が悪く、農作物の収穫が減った。
助言	○なぜお寺参りをするのだろう。	
教師説明	都が平城京へ移ったのは、悪病がはやったり、凶作があったので、それらから逃れるためであったことを説明した。	
まとめ	○平城京を造った目的についてまとめよう。 （政治・社会の両面についてまとめた。）	
確認	（元気よく発言していた。）	○平城京を造った目的について隣り同志で話し合う。
ノート整理		○天皇がかわった。 ○大きな都が必要であった。 ○地理的条件がよかった。 ○悪病・凶作から逃れる。

（授業に対する考察）

自分の考えをメモにとって活用させること、資料の読み取りを正しくさせること。班や全体の場での話し合いを深めるため、話し合いのルールの徹底をはかること、子どもなりの考え方を大切にして授業を進めること、児童同志の意見を戦わせることに留意して指導をした結果、たいていのねらいは達成できたように思う。児童は粘り強く考えていたし、意見の交換もなされていた。

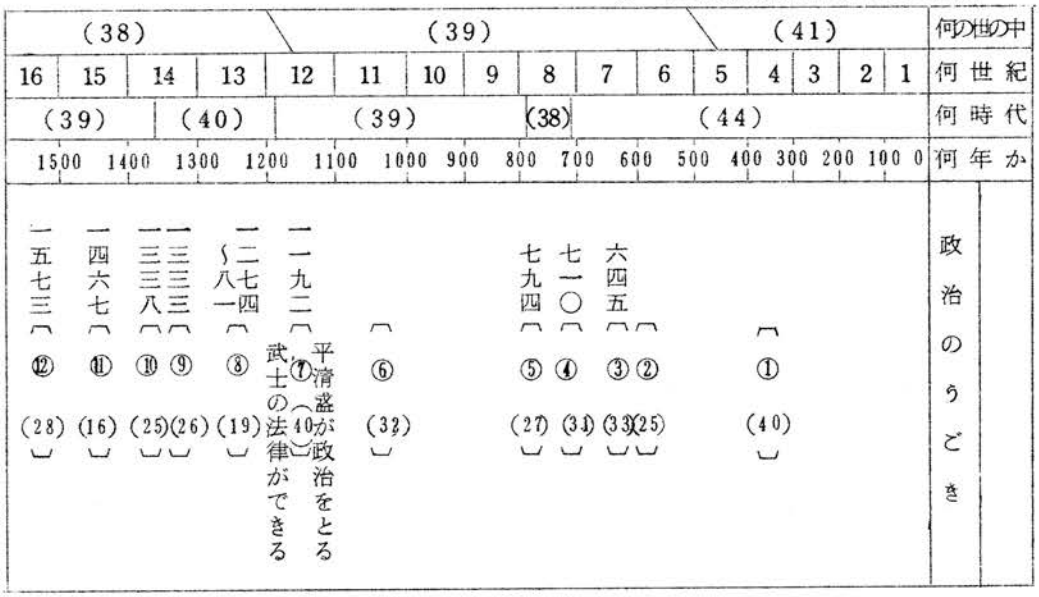
また話し合いの時のルールも守れていたように思う。ただ、結論を導くのに時間がかかったように思う。それは、適当な資料が無かったこと、事前指導が不十分であったことに原因があるように思う。

4. 単元の学習を終えて

(ア) ポーストテストの結果

社会科年表テスト（学習後53.7.28）

（　）内の数字は44名中の正答数



（ポーストテストの考案）

プリテストの時と比べ、時代名を書くことができるようになったと思う。政治の動きについてはだいだい予想通りの正答数であった。年表をおぼえることが苦手な児童が多いので、特別に良い結果が出るとは思われなかったからである。ただ、時代と政治の動きについて、児童が関心を持つ傾向が出てきたように思う。

なお、応仁の乱についての正答が少ないのは、授業ではまだ取り扱っていなかったためと思われる。

(イ) アンケート調査の結果

○歴史学習について

好き	普通	嫌い
○おもしろいから ○いろいろなことがわかるから ○資料を調べること	○おもしろい時と、そうでない時があるから ○年号をおぼえるの	○おもしろくないから

が好きだから　　が苦手だが、他は好
○調べることがたく　　きだから
さんあるから

以前に比べ、歴史学習が好きになった児童が増えていることは嬉しいことである。反面、年号をおぼえるのは嫌いとか、おもしろい時とそうでない時があると回答した児童には、教師自身、おおいに反省をしなければいけないことである。今後は、今まで以上に、児童を飽きさせないための工夫をしなければいけないと考えている。

(ウ) 評価表

社会科評価表

単元「貴族の世の中」　　6年〔　〕組　氏名

時	学習することがら	月　日（曜日）	よくできたか	話し合えたか	楽しくできたか	反省することがら
1	東大寺の大仏について調べる	6月14日（水）	○	○	○	線がぐちゃぐちゃになってしまった。
2	平城京について調べる	6月16日（金）	○	○	○	字がとてもきれいに書けた。
3	遣唐使について調べる	6月19日（月）	○	×	○	班で話し合いをするときに話せた。
4	奈良時代の文化について調べる	6月20日（火）	○	○	○	となりの人とよく話し合えた。
5	奈良時代の農民のくらしについて調べる	6月21日（水）	○	○	×	へんな字でかいてしまった。
6	平安京について調べる	6月23日（金）	○	○	○	平安京がなぜできたかという理由がよくわかった。そのころの貴族のくらしがわかった。
7	荘園のおこりについて調べる	6月26日（月）	○	○	○	荘園の意味がよくわかった。
8	平安時代の文化について調べる	6月28日（水）	○	○	○	平安時代の貴族はぜいたくな人たちだな。唐のまねをやめて日本風にかわったのでうれしい。
9	武士のおこりについて調べる	6月30日（金）	○	○	○	ごう族がなぜ武士になったかわかった。
10	平氏の政治について調べる	7月3日（月）	○	×	○	はじめに平氏と源氏がたたかって平氏がかった。でもあとから源氏がしかえしとして源氏がかった。
11	貴族の世の中について調べる	7月5日（水）	○	○	○	今日はまとめのようなものだったのでだいだいよくできた。
12	テスト					

（評価表について）

評価は○×とし、1時間の学習終了時に記入させた。全てについて○であることを願うのであるが、それは難しいことであるようだ。ただ、それぞれの項目について○をつけた児童が多かったことは嬉しいことである。また、「反省をすること」の項目についても、児童なりにいろいろなことを書いており、教師の反省材料として活用できた。今後も、評価表を使用して授業を進めたいと思う。

4. 実践のまとめ

人を指導するということは難しいことであると思う。毎日毎日指導していても、満足な授業であったと思われるものはめったにない。数年来教師をしていて、恥しい限りである。ともあれ、この半年間、子どもの歴史的意識を育てるために授業を続けながら研究を進めてきたわけであるが、得られた成果として次のようなものをあげることができるだろうと思う。

○児童が学習に集中できるようになったこと。つまり、学習への参加度が高まり、歴史学習についての理解力が即進されるようになったことである。

○歴史の学習について興味を示し、歴史学習が好きになってきた児童が増えてきたこと。

○相互活動を好み、教師の説明を聞くより、自分達で話し合ったり調べて解決しようとする傾向が見られるようになってきたこと。

○授業が始まる前に、班で協力して復習や予習をすることができるようになったこと。

○先人の偉業に気がつく児童が増えてきたこと。

○評価表を使用することにより、学習の理解度を児童自身が知ることができ、児童自身の反省材料になること。また、予習・復習の大切さが身についてきたこと。

その他、教師側の成果としては次のようなことをあげることができると思う。

○相互活動をすることにより、多数の児童の発言を聞くことができるようになった。

○課題の精選化や学習の組み立てをすることの必要性にせまられてきたこと。

5、おわりに

相互作用を通して、子どもの歴史意識を育てることを試みたのであるが、まだ十分ではない。今後教師自身が勉強をしなければいけないと思うことはたくさんあるが、その中でも代表的なものを列挙したい。

○話し合いを深めるための、よい課題の設定条件

○適確な事前指導のあり方

○学習中、女子より男子のほうが活発である。女子を活発に参加させるための方法。

社会科年表テスト（歴史学習前53.5.10）

（　）内の数字は学級児童44名中の正答数

何の世の中	（13）	（12）	（12）	
何世紀	1・2・3・4・5	6・7・8・9・10・11・12	13・14・15・16・17・18・19	19・20

何時代	（4）	（4）	（3）	（4）	（4）		（11）	（11）	（14）	（23）

何年か：0　100　200　300　400　500　600　700　800　900　1000　1100　1200　1300　1400　1500　1600　1700　1800　1850　1900　1950

政治のうごき

年	番号	正答数	
〔　〕	①	(3)	〔　〕
〔　〕	②	(2)	〔　〕
六四五〔	③	(2)	〕
七一〇〔	④	(1)	〕
七九四〔	⑤	(2)	〕
〔	⑥	(1)	〕
平清盛が政治をとる			
一一九二〔	⑦	(4)	〕
武士の法律ができる			
一二七四〜一二八一〔	⑧	(2)	〕
一三三三〔	⑨	(1)	〕
一三三八〔	⑩	(2)	〕
一四六七〔	⑪	(2)	〕
一五七三〔	⑫	(4)	〕
一五九〇〔	⑬	(4)	〕
一六〇三〔	⑭	(3)	〕
一七一六〔	⑮	(5)	〕
一八五三〔	⑯	(7)	〕
一八六七〔	⑰	(4)	〕
一八六八〔	⑱	(6)	〕
一八八九〔	⑲	(2)	〕
一九〇四〔	⑳	(4)	〕
一九一四〔	㉑	(3)	〕→
一九一八〔	㉒	(5)	〕
一九二五〔	㉓	(4)	〕
一九四一〔	㉔	(9)	〕
一九四六〔	㉕	(14)	〕

第５分科会（社会と生活）

社会生活における社会的認識をどう育てるか。

豊高校区教育推進協議会　住吉光彦（豊中）

1. はじめに

本来教育のあり方は、生活に根ざした教育を考え、生活行動の中で地域的課題に主体的に取り組み郷土社会の未来像をつくりあげていく生活態度の育成にあると考える。

地域の人たちが、自分の手で、地域の歴史、漁業・農業の経営・改善・生活などを科学的に考えていくところまでの見通しをもって教育にあたるべきであろう。たしかに、農村にしろ、漁村にしろ、自分たちの地域が、将来どのように変るのか、どのように変えたらよいのか、迷路におちこんでいる状態は包みかくすべくもない。これらの課題にこたえるには地域を教材化することをおいて他にはないと考える。そこで、この課題に取り組み、解決するためには、幼稚園・小学校・中学校・高等学校が、各々独自の歩みを続けていくのではなく、各々が、独自性を持つ中で、その担い手である子供の全発達段階でとらえなければならない。

以上の観点から、系統性のある地域の教材化を「縦軸」とした教科編成を中心に取り組みを始めた。

2. ねらい

地域を学習の対象とし、それを通して、児童・生徒の生活する地域を知り、課題を見つけ、その課題解決に取り組む態度を養う。学習に際しては次のことがらに留意して取り組んでいく。

(1) 児童・生徒の生活経験や、生活環境を考慮し、その基点から出発した授業法を考える。

(2) 教師は、児童・生徒とともに地域を知る努力をする。

(3) 視聴覚機器の効果的な方法を考える。

3. 教材化にあたっての基本的な考え

(1) 児童・生徒の活動（生活）の場である地域事象を教材化することによって、地域社会を正しくとらえると同時に、広く社会事象を系統的・総合的にとらえるようになる。

(2) 全教育活動の中で、幼稚園・小学校・中学校・高等学校の一貫した教育計画の中でこそ真に実現できる。

4. 取り組みの内容と方法

(1) 家庭から資料を引き出す。　(2) 学習のしおりを作成　(3) 年間指導計画表の作成

(4) 地域の史跡・文化財の観察を実施　(5) 生徒の意識・知識の調査を行なう。

5. 実践例

第6分科会（自然と生活）

探究心と探究力を身につけさせるバズ学習

兵庫県　新宮町新宮小学校　　平　野　　博

1. 研究テーマとその要旨

日々のバズ学習の取り組みの中で子ども達は好ましい人間関係をつくりつつあり、競合現象もなくなって来ている。ともに協力して課題を追求する民主的共同的な学習態度が定着したとき、バズ学習の究極の目的である、学習集団の高まりと、個人の高まりという点でこれでよいのかという不安と反省を感じた。そこで本年度は、バズ学習の中で、とくにグループ内における集団思考の高まりに研究の視点をあて、ひとりひとりの考えの質を高めるために、子どもたちみんなの考えを大切にしながら、バズ学習の中で、つまずきや、抵抗をのりこえて学習する主体的な子どもの育成をするには、どうしたらよいかを研究のテーマとした。

2. 研究経過　　指導の方針

① 子どもひとりひとりの探究意欲をたかめ自然を探究しようとする構えを習慣化し、集団思考を高めるにはどうすればよいか。

② 自分の考えで問題に挑戦し考えぬき、グループの友だちと磨き合い高まり合うバズ学習の展開にはどう取り組むとよいか。

3. 研究経過の概要

○ 教育の目標は、「子どもひとり、ひとりの個性を伸ばし、能力の可能性を開発する。」にある。理科においても、子どもひとりひとりに自分なりの考えをもたせながら、互いに他人の考えと比較し、磨き合い、はげまし合いながら「考え」を、より確かなものに鍛えあげていくようにしなければならない。　ここにバズ学習の重大な意義があると思う。

本年度は、子どもの発達段階に即するように、次のような学年別の指導方針を決めた。

(1) 低学年　「物を漠然と見たり当たりまえと考えたりしないで、疑問をもってかかる学習へ」

㋐ ペアバズの中での、子どものつぶやきを大切にする。

低学年の児童が、自然に接して呼ぶ言葉は、実に創造そのものであり新鮮である。直観としてのひらめきを大切にするため机間巡視しながら、子どものつぶやきをとりあげ学習をすすめる。

㋑ あさがおの伸びを調べる方法を子どもとともに考える。

○ きんぎょは、まばたきするだろうか。というつぶやきが、きんぎょの観察を活発にした。

○ あさがおの栽培で、朝顔はどの部分がもっとも大きく伸びるだろうというつぶやきが、朝顔に等間かくのしるしをつけさせ、しるしのつけ方も多様な発想が見られ、興味深くす

すめられた低学年ではとくに教師のはたらきかけが大切である。　子どもひとりひとりの考えや、発想を、教師が認め賞揚しグループでほめることによって学習が生々と展開する。

(2)　中学年　「あて推量から確かな予想を立て確かめる学習へ」

㋐　中学年の課題設定では、比較する要素をとり入れ、いつも比べる考え方を伸ばしていく。

課題づくりの時疑問が、個々の子どもの課題となり、グループの課題となり、やがて学級全体の課題となる。子どもの自然認識は、課題解決の過程の中で育つものと考えられる。子どもが対面した新しい事実と、自分の先行経験と比べることによって説明できないものが疑問であり、これを解決のめあてとしたものが課題である。更に教師から言えば指導目標でもある。

㋑　子どもの思考のつまづきと必要が、探究心を更に高めさせる。

3年生の紙玉でっぽうの学習では、はじめから透明な筒を使うことが、子どもの思考を深めることをさまたげているのではないかが、教師集団の事前研究で問題となった。自由な材料で紙玉でっぽうを作らせる。水道配管用の太いポリエチレンの管を使ったものは、期待に反してとばない。玉のすき間からの空気もれに気づいた。竹の紙玉でっぽうもとばないのは、竹のわれ目からの空気もれに、バズ学習の中から気づいた。多様な材料の紙玉でっぽうの比較から、玉をとばすのは空気かが、問題となり　これを実証する必要から透明な筒が必要となっていった。そうして更に空気の存在を確かめるために、水中の玉うちが展開されていった。

(3)　高学年　グループのひとりひとりの考えを大切にし、考えを多様多極化し探究する学習へ

㋐　ひとり調べは、子どもの考えを深化

課題は教師にとっては指導目標であるが、子どもにとっては解決しなくてはならない問題である。その課題を子どもひとりひとりが適確にうけとめるために、予想から解決への学習で「ひとり調べ」を重視した。自分なりに考えたことを、自分の手で調べ、その予想や結果を全体に発表したり討論で吟味したりして、集団の思考を高める。

㋑　実験のつまづきは自然を探る心を育てる。

「ろうそくはどのような燃え方をするのか」の学習で、T児はろうそくを「しん」と「ろう」にわけてもやす。しんだけではすぐにもえつきる。ろうだけでは火がつかない。ひとり調べの結果が話し合われる。「しん」と「ろう」が、一しょになったときもえつづける。T児のつまづきとグループの話し合いが学習を興味づけ意欲をわきたたせる。更に課題をひとりひとりに意欲づけ思考をゆさぶるために、予想を3つの例題として提示考えさす試みもしてみた。

4．おわりに

一斉学習で学習の楽しさを失ってしまった子らに、学習の楽しさをとりもどすのがバズ学習の大き

な使命である。理科の学習で、子どもたちにとって楽しいことは、自らの視点でとらえた課題を、自分の発想に基づいて意欲をもって主体的に物事に取り組んでいる時である。自分の探究した夢中に取りくんだ考えや主張を、グループの仲間が耳をかたむけ、意見をのべてくれることである。バズ学習はこのように真に人間性回復の学習として、個人思考や集団思考を高めてくれる今後更に深めたい。

第６分科会（自然と生活）

自然をみつめ、とらえる力をどう育てるか。

―― 6年　電磁石を通して ――

兵庫県　姫路市立八木小学校　　撰　　鑾

1．はじめに

教師は常に、自ら自然に働きかけ、自然のきまりを探っていく子どもの育成をめざしている。

子供は本来、自分で調べていくことが好きである。調べていく過程でいろいろなことに接し、調べ上げた時には大きな感動を味わい、それが次の活動へのエネルギーとなっていく。

だから、教師は、まず、子供が調べてみようという気持ちを抱くような場を設定しなければならないと思う。

2．実践例

（Ａ案）　電磁石づくりから導線のまわりに起こる磁力のはたらきを理解させる。

教師サイド．授業はスムースな展開（子供にとってはやらされている。）

（Ｂ案）　コイルにできる磁力を追究していくなかで導線のまわりに起こる磁力のはたらきを理解させる。

児童サイド．つまずき．失敗．やりなおし、バズ活動の必然性（教師は助言者）

3．実践上の留意点

(1)　自由操作などを通して、子どもの手で学習課題を見つけさせ主体的活動を喚起する。

(2)　授業の最初に与える素材は子どもたちの興味．関心を呼び起こすよう工夫する。

(3)　意図する方向へ導く手段として、発問や指示にたよらず、共同検討の場で相互に情報を交換したり、素材の与え方によって子供たちの活動をコントロールする。

4．今後の課題

- 期待する活動に導くため．学習意欲を盛りあげるための素材の工夫と準備物の問題
- 個々の子ども、小集団に対する適切な助言

第6分科会（自然と生活）

子ども自身に気づかせ考えさせ、主体的に問題を解決していく理科指導

兵庫県　姫路市立城南小学校　　山　本　　剛

はじめに

理科学習は、自然の事物現象を対象にし、それらに対する働きかけを通して科学的な理解をはかるとともに、科学的に正しく判断したり、調べたりできる能力や態度を育て、自然を愛する豊かな心情を培うことである。つまり自然の事物現象に子ども自身が働きかけ、体の五感を通して自然のすばらしさ、ふしぎさを感じ、積極的に働きかけることである。自然認識は、このような態度や心情を育てる学習の中で身につけていきます。

1. 理科学習のねらうもの　―― 自然認識の変容 ――

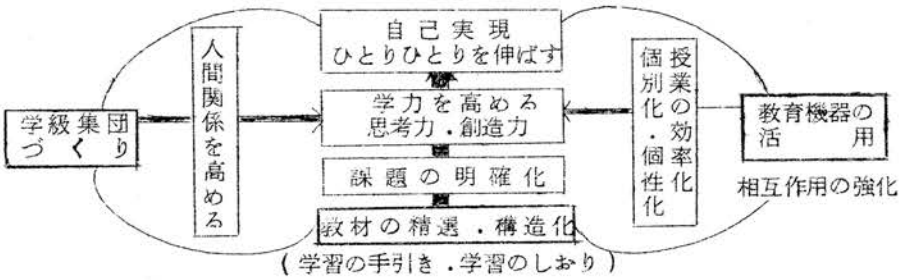
理科学習は、子ども達が生来もっている自然への興味や疑問が、自然への意欲的な探求心をゆさぶり主体的活動となって自然をさぐり、規則性を見つけ出していく過程で自然認識の基礎的な科学の見方、考え方、扱い方を育てるとともに、科学的概念を身につけていくことである。つまり子ども達の自然認識を一層科学的なものに育成していくことである。このような自然認識を育てるためには、

- 子ども達の自然認識の発達の一般的な傾向を理解すること。
- ひとりひとりの子どもの自然認識の実態を把握すること。
- 主体的な認識活動するような学習指導の場（集団づくり）と指導方法（バズ学習）（教育機器の活用）を立て実践すること。
- 子ども達が主体的に働きかけるような自然環境、施設の整備充実をはかること。

2. 本校における理科学習指導

① 本校教育全体のしくみ

本校では、豊かな人間関係をつくること、たしかな学力をつける二つの目標を同時達成するためにバズ学習をとり入れました。更に地域の実態を考え、本校教育の大きな柱として、1　学習集団づくり、2　教育機器の活用、3　教材の精選・構造化の三柱を立てました。



② 理科学習指導の重点

自然認識を深め育てるために学習指導における重点は、1 課題づくり――子ども達自身が課題意識をもって自然の事象や現象を探ること。 2 視聴覚機器の活用――子どもと子ども、教師と学習者の相互作用を一層強化し、主体的な活動を押し進める。

1 課題づくりのとりくみ

2 視聴覚機器の活用

③ 理科学習のための自然環境の整備・充実

校舎内外の各施設

- ○ 学習園　　○ 地学園（岩石と気象）
- ○ 飼育舎（うさぎ，にわとり，あひる）
- ○ 栽培園（学年園，理科栽培園） 温室、苗床

本校のおかれている地域的特性を考えて施設経営を行っている。

④ 理科学習実践例と反省　6年「森林」　（別紙にて資料作成）

3. あとがき

自然認識を育て深めるためには、自然の事象や現象の中で子ども達に直接経験を多く得させなければならないが、やゝもすると理科学習が科学概念の修得が大部分を占めるようになり勝ちである。評価もその点に重点が置かれ、知識の量で理科学習の評価がなされている。自然を愛する豊かな心情は、単なる知識概念の獲得だけでは培われない。自然を調べる能力や態度、科学的なものの見方や考え方を育てるためには、理科学習はどうなければならないか、もう一度考え通してみたいと思います。

第6分科会（自然と生活）

自然を見つめとらえる力をどう育てるか。

豊高校区教育推進協議会　岡　田　　真（豊小）

1．地域実態

島の大部分は段々畑で、柑橘類が栽培されており、水稲田は無く、菜園もわずかである。もちろん山は頂上付近まで開墾されており、森林にも乏しい。また小さな島なので河川や湿地帯なども無い。しかしながら、農業や漁業が主産業であり、海浜動物や草花に接する機会は多い。そういう面で、自然環境はやや単純ではあるが、都市部の児童、生徒に比較すると、はるかに恵まれてはいる。

このような自然の中で生活している児童、生徒の自然を見つめる力、とらえる力はどうであろうか。また、生物の飼育栽培をする態度や、自然に対する愛情が育っているのだろうか。残念ながら不充分なのである。島内どこにでも蜜柑がありながら、花はどのようになっているのか、あるいは、花はいつごろ咲き、実はどのようにできるか、どんな病虫害があるのかも知らないことが多い。道のほとりや蜜柑畑にある草や花の名前もほとんど知らないし、それらを使って遊んだり、木の実を採って食べたりすることもない。栽培に関しても、あまり積極的な態度は見受けられない。

2．とりくみの方法

このような地域実態の中で、私たちは、今までとりくんで来たことを見つめ直していく必要がある。その中で、地域の教育課題は何なのかを明確にしていき、幼稚園、小学校、中学校、高校まで一貫した教育内容、教材を創造していく必要がある。しかしながら、各校がそれぞれ独自の研究主題のもとにとりくみを進めてきたわけであり、同じ方法、内容を造りあげていくことは困難な面もあった。そこで、統一してとりくめることから出発し、実践を重ねる中でより明確な一貫性は生まれるだろうし、広げていくこともできるのではなかろうか。

まず地域の教育課題としてはっきりしていることは、この地域の主産業は柑橘栽培であるからにして、自然に対する愛情を育てること、栽培技術や積極的に栽培していこうとする態度、あるいは、品種改良とか、旱害、塩害防止等につながる科学する態度を育てることなのであろう。

具体的なとりくみの方法としては、まず植物教材を中心にとりくんでいく。児童、生徒が課題意識をもってとりくんでいくようにするには、教材の課題化をどのようにしたらよいか考えていく。認知的目標と態度的目標を設定する。認知的評価と態度的評価方法を考えていく。　児童、生徒が課題意識を持つことができるように自然環境の整備を工夫する。効果的に視聴覚機器を活用していく。

以上のような視点で環境整備を、授業を組織化していく。

3. 実践例

幼稚園

小学校

中学校

高等学校

4. 反省と課題

- 地域の自然を課題化していく。
- 態度的評価方法が不十分なので研究を深めていく。
- 児童、生徒間のコミュニケーションを分析する。

第6分科会（自然と生活）

学ぶよろこびを味わえる子どもをめざした授業の創造

―→ 理科の実践から ―

岐阜県　土岐市立泉中学校　　小　島　幸　彦

1. はじめに

☆ バズ学習との出会い

私が教師になった頃は戦後のベビーブームの波が中学へ押し寄せ、高校入試に対して親も教師も異常な激しさを持っていた。親の強い要求もあって第7時限、第8時限の補習授業を薄暗い螢光灯の下で続けたことを記憶している。

当然のことながら子どもたちはお互いが敵であり、テストは1点でも多く取り、いい高校へ入ることがすべてであった。一方、アウトサイダーは非行に走り、当時集団万引事件が大きく新聞に報道されたりした。こうした深刻な事態の中で見い出したのが塩田先生の『バズ学習方式』なる著書であった。以来19年、人間的な成長と学力の向上を願って、バズ学習とのおつき合いである。

「石の上にも三年」という諺があるが、20年近く「バカのひとつおぼえ」といわれながらの実践は非行の低年齢化が叫ばれている昨今、本校ではここ数年来皆無であると胸を張れるまでになった。集団の醸成をねらうバズ学習の原理は部活動にも見るべき成果を示し、今年度はテニス・水泳・ブラスバンドの各部が岐阜県大会で優勝したのを筆頭に市大会、地区大会での優勝旗の数は17本にのぼっている。

学習面については、子どもたちに動的なレディネスを持たせて授業に臨ませるため、村上芳夫氏の主体的学習の理論をバズ学習の理論に加味し、課題の与え方について研究を続けてきた。

こう書き並べていくとすべてが順調に進んでいるように思われるが、やればやるほど突き当る壁の大きさを思い知らされるのである。こんなとき、我々は大変ショッキングな事実に直面した。それは一昨年、第11回全国バズ研を本校で引き受けたとき、つぶさに学校の様子をご視察下さった塩田先生の感想が「まだ八開中学校のレベルである」ということであった。我々の実践を振り返ってみるとき、学校教育をとりまく諸条件を外ぼりから埋めてはきたが、どうしても教育の中核としての『授業』にまで十分迫り得なかったことを反省している。

☆ 集団過程から授業過程（認識過程・指導過程）へ

子どもたちの学校での生活の大部分は教科の学習である。各教科の指導が教育の大切な柱の一つであることは言うまでもない。しかし、ここ数年来の研究は、学習の主体者である子どもたちが前面に出て、ひとりひとりの子どもの学習参加の仕方を追求するいわゆる集団過程の研究が主流であった。

「子どもの集団の高まりは教師集団の高まりまで達する」を合い言葉に子どもと共に職員集団も高まろうと努力してきた。しかし今なお教科指導では「子どもはよく育っているが、授業が粗い」ということが授業研究の反省として出てくるのである。

やはり教科指導は最終的には個々の教師の力量にかかわる問題であり、職員集団の研究のあり方の再吟味を迫られているのである。今こそ我々は子どもが教材（価値）を習得していく過程<認識過程>、教師の介在の仕方<指導過程>を問題にしていくことが、重大な課題であると考えている。こうした研究は地道で大変な労力を必要とするであろう。ひとりひとりの子どもを熟視すればするほど数多くの都合の悪い状態が見えてくる。こうしたものを見ることは手数がかかっていやだというより、ほんとうはこわいのである。小手先の教育技術ではなしに、1時間1時間の授業を通して、子どもに学ぶよろこびを味あわせること、学習することを好きにさせるにはどうしたらいいだろうか。

2. 教えても、学習していない現実

2年理科　「水の分子の運動 ── 墨汁粒子のブラウン運動の観察」より

物質を微視的に探究していくとき、物質は粒子からできていること、その粒子は激しい運動をしていることをエーテルの気化、水銀管の観察、硫酸銅の拡散、線香の煙や墨汁のブラウン運動などから事実にもとずいて考察させようとした。

本時のねらいは「墨汁の粒子が不規則に運動しているのを観察することにより、水の粒子（分子）が激しい運動をしていることを推定できる」ことであったが、Y男は「墨汁はミズスマシのように動き回っていた」とノートに書いているし、K子は「黒い粒が川のように流れている」と書いていた。

X男は墨汁の動きを、1年で学習したゾウリムシなど水中の微生物と同一視し、無生物である墨汁の動き回る原因をエネルギー的に考察しようとしないで、ただ目の前の事実に気を奪われ、学習の流れの中へは入りこむことができないのである。

K子はこまかい運動には気付かず、液全体の流れを見ているだけである。前時とのつながり、本時の学習課題から墨汁の粒子の運動を見るとき単に「川の流れ」ととらえることは、Y男と同様に墨汁を動かす水の粒子（分子）の存在にまで考えを発展させることはできないのである。

顕微鏡の倍率を600倍にして観察することは技術的にもむつかしく、これを克服して観察をすることができたときのよろこび、予想だにしなかった墨汁の粒子の激しい動きなど、子どもたちは生き生きと学習に参加しているが、教科の本質からすると、Y男やK子は学習をしたとはいい得ないのである。

観察にかかる前に本時のねらいを十分に時間を取って話し合わせたが、結果的には目の前の事実に気持が向いてしまうのである。

2人に共通していることは、事象のどんな事実を問題にしていくかが、自分の思考体制の中で明確に位置づいていないことである。

別の見方をすれば、自然を見るときの見方や考え方、感じ方が育っていないといえるのである。即ち思考の筋道（系統）が不十分であることを意味する。

我々は毎日毎日子どもと共に学習しているが、ともすると教師のひとりよがりや自己満足の授業であって、本当にひとりひとりの子どもの内に育つ思考の筋道にまで迫っていないのではないだろうか。まず手はじめにひとりひとりの子どもを知るために授業の記録を取り、教科の本質とかかわって授業

そのものを厳しく吟味していきたいと考えている。

3. 授業の創造

(1) 学ぶよろこびを求めて

子どもが学ぶよろこびを味わう授業とはいかなるものであろうか、ブルーナーは子どもの学習動機として次の4点を上げている。

ⓐ 親や教師を喜ばせなければならない。（賞罰）

ⓑ 同級生を相手にしなければならない。（競争と協同）

ⓒ 自分自身がやり通したという感じをもちたい。（成功感）

ⓓ 子どもが興味を感ずる教科の微妙な魅力

ⓐ～ⓒのような方法はバズ学習でも大切にしているもので、ある程度の効果を期待することはできるが、決して万能ではない。最終的にねらうものは授業そのものが子どもにとって魅力的であり、子どもの積極的な自己活動を誘発するようなものにしていくことが重要であると思う。こうした意味で、ⓓの「子どもが興味を感ずる教科の微妙な魅力」の存在は多くの示唆を含んでいるといえる。

理科の学習にあてはめて考えるならば、自然界にひそむさまざまな論理を自らさぐり求め、解き明かし、その力で自然の姿を統一的にとらえ直すことへのよろこびを味わわせてやることであると考える。

(2) 求める授業像

全職員で共通に求める授業をイメージし追求することは、研究の方向や評価の観点を焦点化することができる。我々が求める授業の全体像は次のようである。

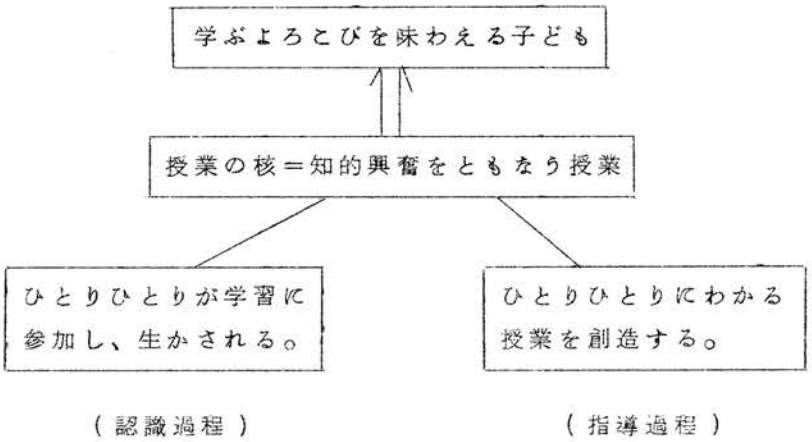
○ ひとりひとりが学習に参加し、生かされる。（子どもの側）

○ ひとりひとりにわかる授業を創造する。　（教師の側）

さらに、全職員が求める授業の核を「知的興奮をともなう授業」とした。紙数の都合でくわしく書くことはできないが、授業の核とは次のようにイメージしている。

> 今まで安定していた秩序や見方・考え方・価値観などが新しく出現した教材によってゆさぶりをかけられ、今まで知っていたことや経験したことではどうにも説明のつかない新しい事態に追いこまれる。こうした場に直面したとき、それをどう判断し、どんな選択をすべきかを迫られる。このとき困惑・葛藤・不安などが発生し、重苦しい沈黙が起る。こうした沈黙ののち子どもたちが「おかしい」「なぜか」と矛盾や疑問を意識することが知的興奮の芽生えであり、問題が明確に焦点化されて意識されることが知的興奮の頂点にあるといえる。これは授業で登らなければならないヤマを意識したということであり、ヤマを登り終わるまで知的興奮は継続するといえる。

かんたんに図示すると次のようになる。



1時間1時間の授業にもヤマ場があると考えるが、毎時間とも同じ質のヤマが存在することはありえない。ここでは5～10時間を単位として「知的興奮のともなう授業」の設定を考えた方が現実的である。

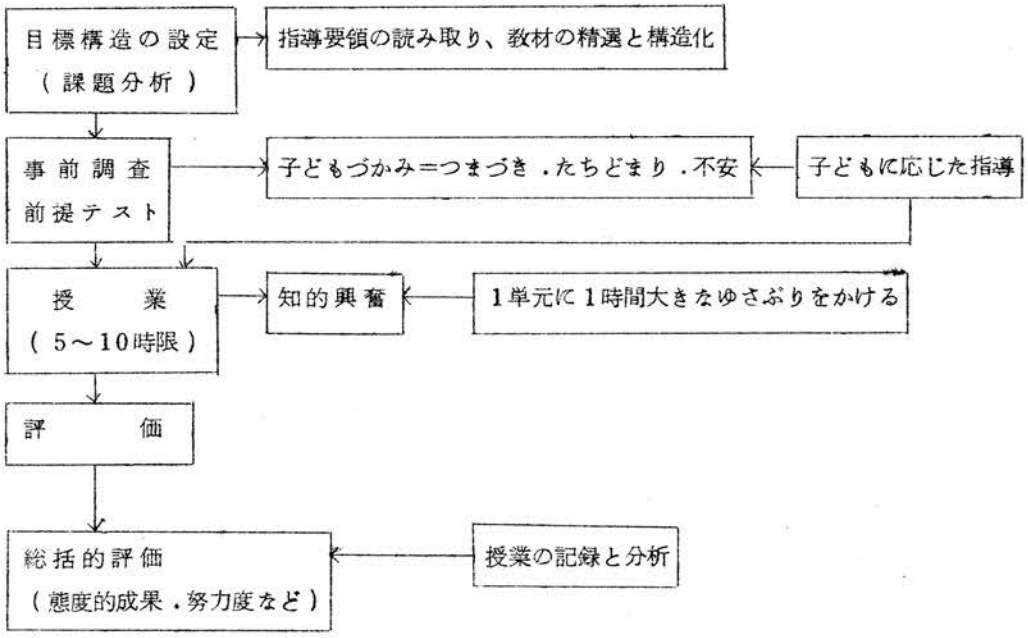
(3) 授業創造の具体的方進

教科書に載っているから、高校入試に出題されそうだから授業をするのではない。ともすると我々は、当面する問題に目を奪われ「何を」「どのように」教えるかということのみを考える。例えば今の子どもにとって「オームの法則」を学ぶことはどういう意味があるのか考えたことがあるだろうか。子どもたちのうち将来オームの法則を使用する必然に迫られるのはほんのわずかである。それでもなおオームの法則を学ぶことの意味は何なのであろうか。

ここで「何のために」オームの法則を学ぶのかという教育本来の目的を考えてみる必要がある。理科の独自性を大切にすることは言うまでもないが、他教科との相互関連を見極めながら学校教育目標を指向するよう留意したい。

1時間の授業の中には多種多様な要素が複雑にからみ合っており、簡単に創ることはできないと恐れをなしている。例えば①教材の精選と構造化、②授業過程（指導過程と認識過程）、③コミュニケーション（複数の人間の相互作用）、④授業形態、⑤学習意欲など数え上げたらきりがない。また、その授業の根底には、教師がどんな世界観に立っているのかという教育哲学の問題が存在している。私が1時間の授業をするということは、私の持ち合わせている教育理論や教育技術のすべてを投入するということである。

現在も粗末な時案を書いて授業に臨んでいるが、せめて学期に1単元（5～10時間分）ぐらいは根本から考え直したカリキュラムを作って実践し、評価してみたいと思っている。



4. 実践記録

――2年　理科「物質と原子．分子」より……別紙にて

第７分科会（数と生活）

分数計算でのつまづきの分析

愛知県　春日井市立篠木小学校　　加　藤　一　成

1. はじめに

昨年度市の算数サークルで３つの部会（教材教具研究部会、学習形態研究部会、授業系統研究部会）を構成して、それぞれの問題点を研究するうちにある課題の構成が理解できても結論に到る過程で小数や分数の計算が必要で、それができないために課題そのものまで放棄せざるを得ない。こうして挫折感を増大しているこどもがかなり多いのではないかという憂慮から本年度は、児童が一番つまづきやすい分数一本に的を絞って研究することになった。とりあえず昨年度の３つの部会を一つにまとめ分数のつまづきの実態を調査することになった。さらにその実態にもとづき次の研究方法を用意した。

研究方法

(1)　分数の四則に対する子どもの実態を調べ、誤答例を分析する。

(2)　分数の四則を理解するための基本的事項の必要最小限のものを網羅し各学年の指導計画にくみこむ。

(3)　教具の活用、学習形態（バズ学習）のくふう

(4)　到達目標の具体化したものをテスト問題として作成し、一題材を指導する前後に、プリ．ポーストテストを行い指導の成否を検討する。

(5)　分数に対する苦手意識の度合いを併せて調査する。

９月にこの実態調査をもとにして、五年の分数（異分母分数の加減）の指導案づくり、授業研究とすすみ、今後さらに少なくとも三年間の継続研究を計画している。

2. 分数計算の分析

五月の初め、サークルの推進委員全員で問題を十分検討し作成する。対象児童（３年５３３人、４年４７３人、５年４８８人、６年４７３人、中学二年８６人）

(1)　全体分析（資料１）

(ア)　帯分数の計算

４年から帯分数がでるが、どの問題に対しても帯分数が計算の中に入ってくると出来が悪くなっている。特に５年以上の異分母で通分が必要の場合ははなはだしい。この問題を作成するとき教科書（啓林館）を中心に作成したので、推進委員の中には、帯分数は教科書の計算では、軽くしか扱っていないので無理ではないのかとか、各学校でこの問題を実施したとき、どうして教科書で扱っていない帯分数の計算を出題させるのかという意見を受けた。しかし分数を量的に理解するには、帯分数の計算もどうしても必要である。ためしに教科書を見てみると、計算の後にくる応用問題には、帯分数を立式に使う問題がひじょうに多くでている。ただ単に、計算操作が複

分数一操作的レベルのみでとらえている。

雑困難だから扱わないというのは、分数の応用力が伸びず、分数のつまづきを生ずることになる。分数の意識調査をしてみると、分数は計算は簡単で好きだが、応用問題はむずかしいから嫌いという児童が多いのもこの現われであろう。この分析で整数のまじった分数が以外に出来が悪かったことも考えて、ただ単に計算操作がむずかしいからというのではなく、ここに分数のむずかしさ、日本における分数指導のむずかしさを見るようである。

(イ) 整数と分数

$8\times\frac{5}{6}$，$4\div\frac{1}{3}$などは、$\frac{5}{4}\times\frac{6}{5}$，$\frac{1}{2}\div\frac{1}{3}$と誤答率を比較すると、はるかに悪い。特に上の学年に程悪くなっているのは、注目すべき点だろう。これは教わった時から日がたったから忘れてしまったといえばそれまでだが、後で述べる定着度から考察すると指導方法が問われるだろう。この整数の入った分数計算は、教科書にもひじょうに問題がある。三年生では、練習問題の中に1問扱われているだけで、時間をかけて指導することも無理である。別単元で分数と整数の指導がなされるが、今の指導課程では分数の指導の中で、この関係を指導するのは無理で、ただ機械的に指導してしまう場合が多いようだ。

(ウ) 約分

$\frac{3}{5}+\frac{4}{5}$，$\frac{7}{8}+\frac{5}{8}$同じ程度の計算でも約分を必要とする問題となると極端に悪くなる。ただ約分の場合は、多くの場合約分そのものができないというのではなく、約分を忘れたという不注意による場合が多いようで、上の学年にいくにしたがって誤答は少なくなっていくようである。帯分数など計算が複雑になっていくと、答を約分することがむずかしくなるので、計算の途中で約分をさせる指導は、ぜひ必要であろう。

(エ) 定着度

小学校三・四・五・六年と分数計算が多少の不徹底があるが定着しつつあるが、中学校での分数計算力が極端に落ち込むのは、日が経て忘れる。ドリル学習不足など原因はあると思われるが、小学校での定着がしっかりなされていない場合も大きいと思われる。六年の一組で、同じ問題を使って、6月と9月に定着度を調査してみた。

席番	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15
誤答数 6/17	5	9	6	0	0	6	9	0	4	17	2	16	／	3	9
誤答数 9/2	5	8	0	0	0	1	12	0	5	9	6	15	4	3	6

席番	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30
誤答数 6/17	7	41	5	7	13	2	6	8	11	10	2	3	17	4	2
誤答数 9/2	9	54	4	4	17	3	2	7	13	6	2	1	18	2	3

席番	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41
誤答数 6/17	6	8	12	／	6	5	19	13	10	6
誤答数 9/2	5	16	8	／	5	3	29	16	14	5

この表を見ると満点のこどもは、夏休み後にやっても満点であり、誤答数の少ないこどもは、6月のときと比較してあまりかわりなかった。反対に6月に誤答数の多かったものは、さらに誤答数が多くなっていることがわかる。

(オ) 通分

一番誤答が多いのが通分であるが、詳しくは後日の資料で示すことにする。この分析からでは帯分数→仮分数→通分の操作の過程でのまちがいが半数以上みられことに留意したい。

3. むすび

実態分析をすることによって、いろいろな問題点を見い出すことができたので、これを踏み台にして、指導案、学習形態、教具の活用、到達目標を決め、三年間着実に実践していきたいと思っている。

第７分科会（数と生活）

自由バズの実践

― 算数科での積極的な相互作用と人間関係改善をめざして ―

三重県　上野市立依那古小学校　　野　口　俊　史

1. 自由バズの方法

(1) 教師が課題を提示する

(2) 各個人で課題に取り組み、「理解できて説明できる」「理解できたが説明できない」「理解できない」を全員にわかる方法（表示板を使う等）で示す。

(3) 全員立ち上がり、「理解できて説明できる子」を中心に自由にグループを作り話し合い取り組む。

(4) 理解できた時点で自分の席にもどり、自分自身で確認する。

この状態で考えられる結果として次のことがあげられる。

① 理解できない子は自分から説明を求めに行かねばならず、どこがわからないかをより明確にし、又、理解できなければすわれないから説明の聞き方もより真剣になる。

② 理解できた子は説明を求めにきた子がすわるまで説明しなければならず、より真剣に説明する。

③ 自分から聞きやすい子を選ぶから、お互い遠慮なく課題に取り組める。

④ 子供達自身も教師も、クラス全体の状態を知ることができる。

⑤ だれかが言ってくれるまで待ったり、聞いていればいい、答えさえわかればいいといった依頼心や甘えがきかなくなり、無駄話や妨害もできなくなる。

⑥ ほっておかれる．ほっておくという状態がなくなり一人一人が確実に参加する。

⑦ 緊張が持続する。

以上のことを頭において実験を行なった。

2. 実験内容及び結果

小学校６年生５クラスを対象に (ｱ)自由バズ (ｲ)個人で取り組んだ後班で取り組む (ｳ)すぐ班で取り組むの３つを比較した。比較内容は次の３つである。

(1) 話し合いの内容をテープに取り、「学習に関したこと」「無駄話」等の量を調査した。

(2) 事前テスト．事後テスト．把持テスト．転移テストにより学習の成果を調査した。

(3) アンケート（楽しかったですか等）により、子供の満足の度合を調査した。

その結果として

(1) 話し合いの中味は、自由バズでは無駄話がほとんどなく、説明もポイントがしぼられていた。

(2) 各テストの結果も自由バズで上．中．下位ともおおむねすぐれていた。

(3) 満足の度合いもおおむね良好だった。

3. 現在クラスで行なっている実践

(1) クラスの実態（4月新学期）

○ 男女が机を大きく離し、教師の剣幕でやっとくっつけるという状態であった。

○ 一匹狼的な子が男女共多く、攻撃的な荒い言葉と何も言わず他の子を無視する子の両極端でけんかが絶えず、とても話し合ったり発表できる雰囲気ではなかった。

○ テストの結果に対する熱心な親が多く、普段の授業の意欲、遊びさえ子供は意欲を示さなかった。

この状態においては班の話し合いなど入りこむ余地はなく、低学年での実践といわれる二人バズもできなかった。そこで班でのバズから自由バズへの移項という考えから五月に入って直接自由バズの導入を行なった。

(2) 自由バズの実践

○ 子供で作った班をこわし教師主導型でソシオメトリックテストにより、班を作った。

○ 算数科で自由バズを取り入れ、話し合うことを知り、慣れさせることにした。

理解した子も理解できない子も話しせねばならず、いやでも他の子を意識し、又、「すわる」という明確な形をとるから少々話しにくいなんて言ってられないようになる。その間、教師から「説明することはくり返したり説明の仕方を知ったりとても本人は得することになるんだぞ」「説明でわかった子は発表しないと説明してくれた子に悪いぞ」「あの子が言えないのに説明した子は平気か」とはげました。少しなりとも親しい子同士のグループであるため、この言葉も通用した。又、個人に聞いたり、アンケートをとったりして、子供の状態をつかんでいった。

（経過）

○ 1～2回目　のろのろ立ち、グループを作るのさえつまっていた。おっかなびっくりって感じだった。

○ 3～4回目　慣れから「おれのとこへこい教えたるで」「わかったか」と言うことばが聞かれ出した。

○ 6回目　よくできる子が質問をうけながら「あれ、わからんようになってきたわ、もう1回考えるわ」とつまり、説明できる子同士の交流も始まった。

○ 7回目　説明を聞いていた子が「おいおまえのおかしいぞ、こうや」と逆に説明しだした。

○ その後　初めて男子が女子に説明を求めたり、説明できない子も話しを活発に行うようになった。

（二学期になって）

学習でとにかく話をする糸口としての自由バズによって友達同士の交流に発展した。班を自分達で作るといい今の所文句も出ていない。班ノート、班遊びなどにぎやかな班になってきた。学級全体でドッチボールをという恐る恐るの私の提案もスムーズにできた。しかしまだ自分の意見は言えても、その意見を深めることはまだまだで、特に学級会で問題を感じる。バズ学習の実践記録の多くに見られる班作りの道がやっと見えてきたという所である。

4. 課　題

(1)　算数科のように「理解できて説明できる子」が明確であり説明もしやすい科目以外での自由バズは、どのように行い、また効果が期待できないものだろうか。

(2)　バズ班がうまく言っている時、自由バズを使うことの長短は何だろうか。そんなクラスの雰囲気かわからないので予想しにくいため。

(3)　班の一人一人がやらねばできないような活動はどんなものがあるだろう。

第７分科会（数と生活）

計算でのつまづきの分析から　指導内容を考えてみる。

豊高校区教育推進協議会　　屋　敷　　光　（豊浜中）

1. はじめに

今日まで、私たちは、各自で「自然認識を育て、数学的な物の見方．考え方を培うことをめざして取り組んできた。そのなかで教育内容が実態にあっていないこと、実態（子どもの姿）も真にみえていないことに気づかされてきた。

具体的には、私たちが「わからない」として切り捨てている子どもの「わからなさ」を発見すること、つまり、限りなく個を追いかけ一人一人のつまづきの要因を発見することを続け、克服に向けて働きかけることが教育内容そのものであることを経験的につかんだ。特に、数の概念がつかめず、基礎計算ができないために、算数．数学と聞いただけで拒否反応を示し、理解を非常に困難にしている現実がある。そこで第一歩として、基礎計算について調査をし、誤答を分析し、つまづきをみつけ、まず基礎計算力をつけることに取り組んだ。分析の結果まちがいにもルールがあるのに、それをたださず、まちがいとし、できない子というレッテルをはっていたこと、そして、ますます学習意欲を奪っていたことに気づかされた。

以上のことを各自、経験的につかみ、取り組んでいたが交流を深めることで、よりよい中味が創造できることもあって、しだいに校内で、地域での交流がなされるようになった。

今年度になって初めて、幼小中高の教師が一堂に会し、話し合う場がもたれた。各校とも基礎計算力の向上をめざすといった共通のテーマに取り組んでいたので、そのまとめを出し合い、整理するなかから数と生活をどう結びつけていくかをさぐり、さらに発達段階に応じた指導内容を検討し、教育内容の創造をめざそうということになった。幼小中高一貫した教育内容の創造をめざして、協同した取り組みの緒についたばかりである。

2. 実　態

小学校　　整数の加減については、低学年に繰上り、繰下りを忘れている者が目立ち減法で３．４年生の中に例えば３００４－１３２６＝１７８８または、１７７８とした誤答が目をひく。整数の乗法については、九九の誤りが目につく。小数の加減については、整数の場合と同じことがいえるが、乗法について見ると積の小数点の位置、除法ではあまりの小数点の位置の誤りが目につく。分数では、同分母分数の加減は何とか出来るが、異分母分数の加減になると通分についての理解が出来ていない者が目立つ。

中学校　　正の数．負の数の加減法と分数について以下の問題に誤答が多くみられた。

$-2-(-78)\cdots-80$　$-36+(-27)\cdots-7$　$\frac{5}{3}\div\frac{1}{2}\div3\cdots10$　$\frac{1}{2}:\frac{1}{3}$を整数比に直せ…$2:3$　0.8を分数に直せ…$\frac{8}{10}$　$(\ )(+\frac{1}{2})\div3=\frac{1}{3}\cdots(\ )=2$　$1.5, 0.1, 0, \frac{1}{5}, \frac{7}{3}$ を大きい順

に並べよ…… $\frac{7}{3}$, 1.5, 0 , 0.1 , $\frac{1}{5}$

以上から( )を使った式の計算・負の数どうしの式の加減法の出来が悪い。このことから負の数の概念および分数の概念が充分につかめていないことがわかる。

高等学校　小学校・中学校の実態として示されていることが、克服されないままに高校へ進学してきているものが若干名いる。彼らの中には、九九の一部を6×8＝42などと誤っておぼえている者、0の意味が分からず1と混同し0×2＝2としている者、位取りが分からない者、整数の加減乗除では、繰上り、繰下りを間違っている者もいる。分数，小数，負の数，文字式（方程式を含む）になると誤りが多くなっている。例えば、3X－X…3　2X＋3X…5X　$\frac{1}{2}$X＝4…X＝2　が見られる。一方、定義仮定に基づいて自分で考え問題解決できる力を持っている生徒もいる。このように格差が大きいのが実態である。

3. とりくみ

小学校　52年6月に各学年別の基礎計算の問題を作成し、52年と53年6月末に調査した。これをもとに次のような指導を行なっている。誤答をその場で指導・授業の最初に5分間テストで指導・朝の会で10問ドリルをする。ドリルの時間週2回20分ずつ指導・放課後個別指導・班長を中心にしてグループでお互いに高まるよう指導・前学年の問題を指導し系統的に指導・カードを使いかけ算九九基礎計算の練習。なおどれだけの効果があったかを調べるために第2回目の調査を10月に実施する。

中学校　1回目のテスト実施後補充の時間を使い（ ）を含んだ式については（ ）をはずした式をかかせることにした。数直線を使用するよう指導した。このことにより負の数の加減に効果があった。10分間テストの中へ基礎計算帳の問題を入れて結果を集計し、カルテとして残し30分学活に利用した。これは教師が前面に出るのでなく学級集団の中でとりくめるよう配慮した。

高等学校　毎年新入生に対し、基礎計算を中心にした学力検査を実施してきた。その分析に基づいて、サブテキストを作成し、授業内容と結びつけつつある。教育内容の精選にせまられ、多くの生徒が、比較的興味を示す三角関数からとり上げている。関数を1つの柱として微分積分をとり上げることで方向づけをしている。その中で基礎計算力を含め到達目標が達成されたかどうか、確認テストをくり返し達成されない事柄については、個別指導・グループ指導・いっせい指導などを行なっている。

4. 課題と展望

今日までの私たちの取り組みは、系統的なものではなく、一人一人の子どもを追いきれず、個の課題を明確になしえていない。調査をもとに、いくらかは授業に生かすことはできた。

しかし、個人的な取り組みに終始しがちである。これを一般化していくことは、大きな課題である。まずは、基礎計算力を中心にしたつまづきの克服をめざし、二度と同じような子どもをつくらないために系統的な問題を作成実施し、個人カルテに残し、授業内容と結びつけた指導内容、指導方法の検討をしていこうと考えている。

今日、受験体制からくるゆがみもあって、生活からかけ離れ、学問追求に流れ、知識をつめ込む傾向が強くなっている算数・数学教育の在り方もみつめ直さなければならない。もっと生活と結びついたものにし、発達段階に応じた内容を検討して、地域の実態にあった幼小中高一貫した内容・教育方法の創造をめざしていかねばならないと確信している。

第７分科会（数と生活）

ひとりひとりの児童を着実に伸ばす算数科の教育実践

兵庫県　姫路市立安室東小学校　　堀　江　光　明

1．指導要領改訂の方向

o　現行の算数・数学教育を根底からくつがえそうとしたものでなく、基礎的な知識・技能をもとに数学的な教え方や処理の仕方の育成が、今後とも大切な算数教育の目標であることは明白である。

2．算数科の学力

o　算数科の学力を云々する時、ともすると児童の計算力の低下という点を問題にし、そこから一歩も出ないで、計算力をつけることこそ算数科の最大の目標であるかのような議論を耳にすることがよくある。　勿論、計算技能の習熟も大切な目標の１つには相違ないが、例え題材が「数と計算」領域であっても、学習の過程を通じて、創造性、価値判断力、社会性、算数科でいえば、数学的な考え方や態度を育成することが大切である。

すなわち、算数科で培わねばならぬ学力を次のように考えたい。

数の概念、計算の原理・法則、図形の概念、測定の原理など換言すれば、もとになっている考え方を理解することによって、子どもたち自らで算数をつくりあげていく力を身につけること。

3．ひとりひとりの児童の学力を伸ばす算数科の授業はどうあるべきか。

☆ひとりひとりの児童の算数の力は、日々の算数科の授業の中でこそ高めなければならない。

(1)　ひとりひとりの児童を生かした算数科の授業とは、――――ひとりひとりの児童が、学習課題について、何らかの思考活動を行い、その結果を小集団→学級全体で集め、その中からより数学的に価値の高いものを見つけだし、全体で決定していくことを原型とする。

(2)　望ましい算数科の授業を成立させるための条件

算数科は、特に系統性の強い教科である。したがって、ひとりひとりの児童を日々の授業の中で生かすためには、最低、次の条件が必要である。

① 単元導入に際して、その単元の学習目標に到達させるために最少限必要な ㋐既習の知識・理解 ㋑技能 ㋒ もとになる考え方（単元学習のための児童のレディネス＝算数の基礎学力＝基本的・基礎的事項）の実態調査と事前指導 ⟹（できるだけ簡単に、尚、計算技能は、短期日に習得させられるものではない。従って、学年頭初より継続的に指導しなければならない。）

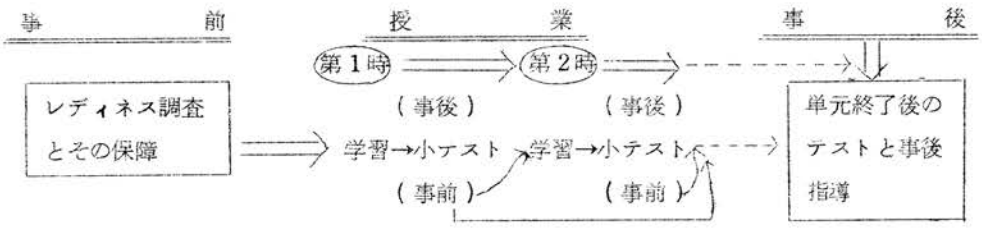
② 児童の実態と学習目標から導入問題と吟味 ——→ 学習課題は、多面的な見方のできるものが望ましい。

③ 学習過程を発見的に組み、その過程に全員が参加でき得る学習形態を明確に位置づけることが大切である。（小集団バズ）

④ 原則として、毎時間ごとの小テスト（練習、発展問題）の位置づけと、復習バズ

⑤ 単元終了後のテストと事後指導

以上は、1単元をサイクルとした場合の算数科学習指導の原型であるが、1時間、1時間を取りあててみても、事前 ——→ 授業 ——→ 事後といった教育実践（日々の授業に対する構え）が必要である。



4. 実践例

(1) 計算技能の継続指導中で、「わり算なのになぜ引き算するの？」とのA子のつぶやきにどう答えてやったか。

(2) 7.25÷2.5 ——→ 25) 72.5 と 250) 725 どちらの計算方法により価値を認めるのか。

(3) 第1時～第4時の学習が第5時にどう生かされたか。——（求積指導の例）

5. おわりに

ひとりひとりの児童の算数の学力を日々の学習の中で高めていくためには、児童ひとりひとりの実態にメスを入れ、つまづきの原因をとり除き、児童の学習に対するレディネスを高め、課題に対して解決のための何らかの手がかりや意欲を有する状態をつくってやることが大切である。

そして、算数科の学習においても、ひとりひとりの児童が学級集団の中にあって、ものごと〔数学的に価値のあるもの（わかりやすく、簡単で、広く使える方法）〕が決定されていく、その過程の中に積極的に参加することにより、算数の基礎学力（レディネス）だけでなく、創造性、価値判

断力、社会性等を身につけ、現代社会に必要な学力、能力を身につけていくのだと考え、日々実践に努めている。

きちんと保障されていない → [illegible]

~~[illegible]~~

[illegible]

[illegible]

[illegible]

第８分科会（健康と生活）

体育科の授業における評価方法の試み

愛知県　豊田市小清水小学校　　野　村　豊　治

1．実践のあゆみ

(1)　体育科のバズ

授業中のほとんどを動的な場面で占められている体育学習においては児童同志の相互作用を中心に人間関係の高まりを軸とした主体的な学習がなされ、話し合いも単に言語による表現にとどまらずお互いの心にふれ合うものがあってはじめて高まり深まりもする。また体育科は身体活動を通しての学習が基本となっている。したがって絶えず身体活動を通しての思考でなくてはならない。身体活動の中におけるさまざまな心の動きを中心バズに対して「周辺バズ」として位置づけ、この周辺バズを重視することが中心バズの内容を豊かにし、話し合いを活発にさせるものと考えてきた。

(2)　単元の構成と展開

児童個々の能力がじゅうぶん発揮でき、創造性が発揮できる豊かな学習を要求し、いろいろな運動が数多くマスターできる学習「発表会を目標とした組み合わせ学習」を考えた。これは単元のまとめで行なう発表会を目標に、個々の児童が自分のできる種目を組み合わせて自分のできない種目や学年の課題種目を加えて児童が自分の課題として設定するもので、児童にとってみれば、自分のできる種目から始め、自分の運動を創造し、自分の能力に合わせ、自分なりにまとめて発表するものである。

2．主題設定の理由

発表会形式による指導過程を組み立て、体育科の授業に取り入れてきた。その結果、児童の学習に対する意欲的な傾向や器械運動などでは、種目の組み合わせによる創造的・自主的な活動が見られるようになった。しかし、ひとりひとりの児童をみつめていくうちに、わたしたちは次の問題について話し合うようになった。

①　総合練習時における評価のあり方

②　・なんとなく集団にとけこめない児童
　　・規律の守れない児童
　　・消極的な児童
　　} 指導のあり方

このような話し合いの中より個人差や運動の持つ特性をふまえたうえで「体育学習を通しての人格形成」をどうしたらよいかについて取り組むことにした。

3．研究の内容

(1)　評価のねらい

学習評価は、評価をする立場から大別すると、授業者側の評価と児童による評価に分けることができる。

前者は体育学習で言うなら、学習者が何に興味をもち、どのような学習効果が生み出されたか、それらのためにどのような指導や援助が教師側でなされたか、体育の具体的目標達成のためにどのような用具や施設を必要とするかなどである。

また後者は児童の個人的な成長、グループの成長、学級集団の成長など児童の変容を児童自身の目で評価することにある。この幅広い評価活動のなかで私たちは後者の評価を前面に押し出し、それに付随してくるものとして前者をとり上げていくことにした。

(2) 学習カード

児童たちの自主的な活動を促す　だとして、学習カードを用いた。そのねらいは次の通りである。

ア　個人用学習カード

(ア) 技能を分析して図示し、その要素を連記することにより技能を把握させる。

(イ) プリーポーストテストの意味を含ませ、実態を授業者が把握するとともに、個々に問題点を見つけさせる。

(ウ) 技能評価法の役割をもたせ、技能の進度をみる。

イ　グループ用学習カード

(ア) 単元の学習内容を網羅することによって、その単元の授業計画をわからせる。

(イ) 個人の問題点・前時の反省をもとにグループの目標をたてさせて全員に共通の価値観をもたせる。

(ウ) 反省し、次時の課題を考えさせることから、自らを見つめて改善していこうとする態度を育てるとともに、授業者が次時の目標を修正する目安とするものである。

また、1単位時間の中に、次のように学習カードを使っている。

過　程	学習内容	児童の活動
準　備	基本的技能の練習	個人カードにて問題点を把握する。
中　心	学習カードを使ってグループの目標づくり	・個人から出た問題点、前時の反省からグループの目標をつくる。 ・目標達成のため練習方法を話し合う。
	グループでの練習	・問題点を解消するための練習をする。
確　認	代表グループの発表	・グループの目標が達成されているか発表する。
	学習カードに反省 次時の課題をつけさせる	・目標の達成度を評価し、次時の課題を考える。

(3) 授業分析カード

授業者の授業に対する評価を研究するにあたって授業分析カードを使用した。その主な理由として次のようである。

① 体育学習中に記入することで、運動量が確保されないのではないか。

② 体育学習においても<個人の取り組み→グループでの情報交換→学級全体での情報交換→教師の補足修正とまとめ→個人の確認>という一般的な方略は有効であるか。

③ 課題提示、発問によってどのような学習活動が展開されどのように学習効果が生み出されたか。グルーピングはいかにあるべきか。

4. 実践を通して

ア. 個人用学習カード

身体の各部のみ使用する技能は、学習カードを図示することにより定着しやすいが、全身の力を要する技能要素は習得しにくく、さらに細かい指導の手だてが必要であろう。

集計表(別紙)からもわかるように、1校時と最終時における技能の定着度は明確である。また技能要素によっては1校時に高い数値を示していても伸び率の低いものや、逆に1校時に低い数値であっても伸び率の高いものがあり、児童の実態把握や内容の修正に役立った。

問題点として

○ カードのつけ方が主観に陥りやすい。

○ 技能要素の取り上げ方を検討する。

イ. グループ用学習カード

グループの目標が授業を重ねるに従って態度的な目標から認知的な目標へ発展していき、個人カードの技能要素の問題点をグループで解消し、記録を伸ばしていこうと意欲的に取り組めるようになった。

問題点として

○ 1グループの内でつまづく技能要素が個々にちがう→グルーピング

ウ. 授業分析カード

運動量を一概に時間で評価することはできないが、カードを使い慣れることで、記入する時間も短縮され、技能練習の時間が多くとれるようになった。またカードで目標を明確にするため、活発な効率よい練習ができるようになった。

5. ま と め

私たちは、「体育学習を通しての人間形成」をねらいとして、児童に自分を見つめさせ、課題を把握させるため学習カードを用いた。そして個人の問題をグループで話し合うことによって「グループ全員が一人のために」という協力精神を自己、相互評価を通してねらってきた。しかし、日々活動している児童を、より社会化していくためには「自己に厳しく、他人を思いやり、意欲的に取り組める」ような評価活動をさらに推進していかなければならない。同様に私たちも授業分析カードに工夫を加

え、常に反省しながら意欲的に研究に取り組む姿勢である。

第８分科会（健康と生活）

健康な生活を送るためにはどうしたらよいか。
ー 体育の動きづくりを中心に ー

兵庫県　竜野市立小宅小学校　　郡　安　義　之

1. はじめに（本校健康教育の歩み）

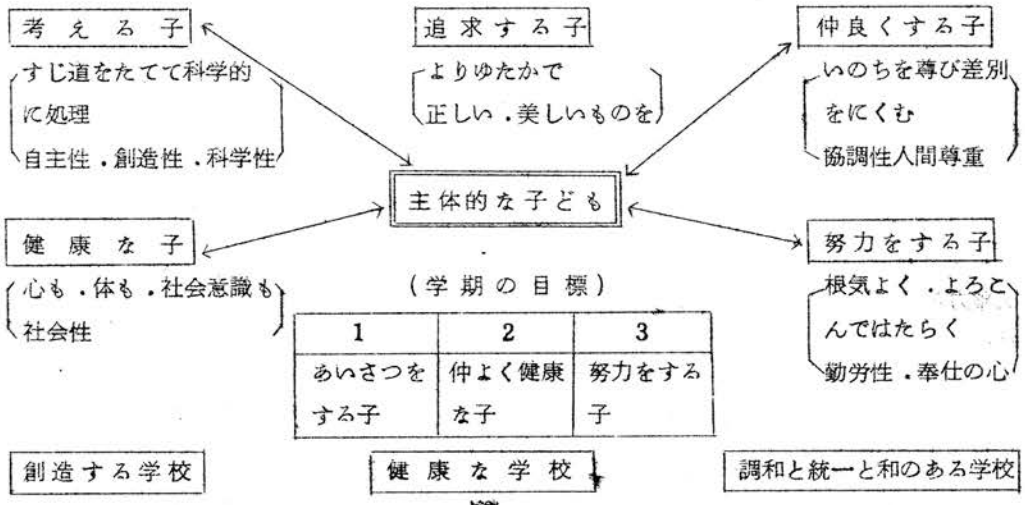
人間尊重の本義を理解し、創造力に富む知性と教養を身につけ、たくましいからだと、誠実で豊かな心をもち、意志の強い実践的行動人の育成をめざす。

(1) 魂のふれあう教育……真の教育は教師と児童相互における敬愛と信頼の上になりたつ、形式のみにとらわれず、心を大切にし、師弟同行の姿において、魂のふれあう教育をすすめる。

(2) 探究的な眼……創造性は高い知性の中でこそ養われるものであり、知性のないところに創造性は育たない。そのため教科指導の役割はきわめて大きい。構造化された教材の道すじを、児童がつまづきながらも、自発的・主体的に思考を積み重ねていくよう絶えず、学習指導の方法を工夫改善し、探究的な眼を育てていく。

(3) 伝統ある健康教育……昭和43年 10月文部省保健体育表彰を初め同年11月には学校安全表彰、以来兵庫県健康優良学校として12年間表彰を受け、また、その間に学校給食優良校として表彰された輝しき伝統ある本校の健康教育の足あとを踏みこえて、ねばりや根性のある児童へと努力する。

2. 本校教育の全体構造



こんな学校に

◎健康はいのちの泉
- ○肉体的、精神的、社会的に健康
- ○強じんな体力と意志力
- ○すぐれた英和と判断力
- ○自分をおさえるきびしさ

◎いのちを大切にする
- ○安全先行、危険予知の判断力
- ○自分のからだは自分で守る．自覚
- ○きまり正しい行動

◎自分で自分の健康法をつくる
- ○スポーツのサークル活動
- ○四分野の生活化．習慣化

◎不満感．不安感．疎外のない生活
- ○心の健康
- ○仲間づくり
- ○豊かな環境

↓

たくましいからだと豊かな心

こんな手だてで

◎ 新しい健康教育の推進
- ○ ひとりひとりにしみこませる
- ○ 体力到達目標の自覚と汗にまみれた練習（小体育会．業間運動．検定）
- ○ 目と歯の健康（姿勢．ブクブクうがい．歯みがき）
- ○ 仲良く楽しい給食
- ○ 発達段階に応じた性教育（カリキュラム．応個指導）

◎ いのちを大切にする自覚
- ○ 通学路の安全　登下校の指導
- ○ 安全点検……毎月安全の日

◎ 花と鳥とうた声のある学校
- ○ クラブ活動　全校音楽
- ○ 一人一鉢栽培

◎ 過保護から脱脚
- ○ たんれんの重視

3．調整力と根性をつちかう体育

精神と身体の調和的発達をねらう体育学習のねらいは単なる強い身体や運動技能のみでなく、児童の心身の調和的な発達をはかるために、身体の運動によって生活力を高め、技能を伸ばしてよりよい生活を目ざし社会生活に必要な態度を身につけ、自分だけでなく一人一人が健康で安全な生活を目標としている。本校児童は、引っこみ思案で気力に欠ける傾向がある。運動能力として、柔軟性．調整力．敏捷性．瞬発力をバズ学習の中で伸ばしていきたい。

4．学習教材の構造と教材づくり（資料別紙）

(1)　マット運動の動きの系統

動き ＼ 学年	1	2	3
いろいろ　歩く	犬・あひる	馬・あひる－にわとり	かに・にわとり・尺取虫
さかさに　なる	うさぎ	かえるの足打ち	かえるのさかだち足かけ倒立
平面で回る	横回り・ゆりかご	横回り２人組・前回り	前回り（連続）
高いところで回る			
低いところで回る			
形をきめて回る			

動き ＼ 学年	4	5	6
いろいろ　歩く	かに・小人・尺取虫	あざらし・小人・くも	あざらし・馬・くも
さかさに　なる	手押車 頭支持倒立	倒立・腕立て側転	背支持腕立前転
平面で回る	前回り・うしろ回り	前回り・うしろ回り	前回り・うしろ回り
高いところで回る	とび箱前回り	とび箱前回り	とび箱前回り
低いところで回る		とびこみ前転	とびこみ前転
形をきめて回る		開脚前回り	倒立前回り
		開脚うしろ回り	伸脚前回り・うしろ回り

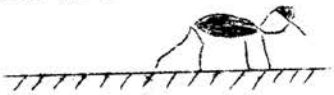
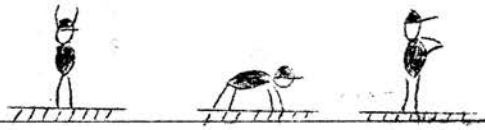
(2)　教材づくり

5年の「とびこみ前転」までには、どのような過程を経てきたのだろうか。段階指導を考え、ひとつの教材目標を達成する段階において、教材づくりをしている。例、とびこみ前転のおさえどころ、逆さ姿勢からとびこんで回るので強い腕の支え、ひじのゆるめ方、空間での腰ののび、からだをまるめてまわるタイミングをつかませる。児童に与える目標・遠くへ手をつく、ま上から腕をささえる。着地の足が手より前・ひじのまげのばし・腕の支えと足のひきつけ。児童の困難点として、両足ふみ切りができない。腕がまがって体重を頭で支える。手のつく位置が踏み切りに近い。

教材として　うさぎとび→うさぎとび前回り→直立から腕立伏　→その場とび回り→補助腕立て回り→台上から前回り→障害物とびこしのとびこみ前転→とびこみ前転へと学習を展開し生活化へ結びつけている。

5．体力増強に向けての事例

◎　調整力を養う運動として、ひとりで、どこででもできる運動から、二人で　また二人以上で主として床の上でできる運動、ボールを使った運動、棒を使った運動、なわをつかった運動、タイヤを使った運動、施設を使って調整力を身につけさせる。（例　低学年）別紙資料

プログラム ① 主として 低学年	
ひとりで どこででもできる運動	
運　　動	変　　化
ア 四つ足で歩く 	・前後左右　・大また 小きざみに ・はやく　・ゆっくり ・上向き 下向き 三つ足
イ かけ足して 片足とび	・自由な方向へ　・合図で方向をきめる ・片足とび 両足とび ・左右交互とび （音楽 歌 ゆうびんやさん）
ウ 歩いて とんで すわる	・運動する長さを変える ・大またで　・速く （音楽・歌 ジェンカ）
エ 上下左右で手を打つ 	・その場で ・歩いて・走って・とんで ・手と足を打つ （音楽 リズムに合わせ）

◎ 体力づくりと生活化

1学期の小体育会は陸上運動、走を中心に、また水泳記録会、市内7校による競演 2学期は、運動会・相撲大会・サッカー大会を実施している。

検定種目には、鉄棒検定・水泳検定・なわとび検定等を行い、児童は自己の記録に挑戦している。

◎ 業間運動での体力づくり 例 なわとび

運動意欲を高めるために学習ノートや検定表をもって練習したり、新しいとび方を工夫する。個人の課題に向って、学級ごと学年ごと、曜日をわけ実施している。

今後の課題

- 基本の運動と体操領域の研究
- ローテイション方式とバズ学習との関連性について

第８分科会（健康と生活）

健康な生活を送るためにはどうしたらよいか。

－ 体力増強に向けての授業の中での動きの工夫を中心に考えてみる。－

豊高校区教育推進協議会　佐々木　力　也（久比小）
村　田　俊　六（豊浜中）
鎗　野　由紀江（豊　高）

(1) 豊浜中保健体育科授業研究

授業者　村　田　俊　六
記録者　第８分科会々員

1．日　　時　昭和５３年６月２９日（木）　６校時

2．学　　年　２年Ａ組　男子　１５名（班編成～５名ずつの３班）

3．単　　元　器械運動（とび箱運動）

4．目　　標　○ 各運動の技能を正しく理解し身につける。　○ 自己の技能の程度を知り、互いに協力し合い、計画的に練習する。　○マナー・健康・安全に対する態度を育成し、生活面に利用できるようになる。

5．指導計画（１２時間）

- ○ グループ編成・学習計画……１時間
- ○ 鉄棒……３時間
- ○ マット……４時間
- ○ とび箱（腕立て斜め開脚とび・腕立て水平とび……１時間
- ○ とび箱（腕立て閉脚とびの発展）……１時間
- ○ とび箱（腕立ての前転）……１時間
- ○ とび箱（発表会・反省・評価）……１時間（本時）

6．本時の目標

○ 自己の技能の程度を知り、今まで学習してきた技能を正しく理解し、身につける。

○ マナー，健康，安全に留意しながら、互いに技能を発表し合い、協力して直し合う。

(2) 授業記録

時　間	授業展開	生徒の活動・気づき
	・用具の準備	
	・集合・整列・挨拶	
	・準備体操	・全員声も大きくハキハキしていた。　・体育委員が中心になって進めて行く。　・その間、教師は

		用具の点検
8 分 (8 分)	・柔軟運動	・二人組で、一部、一人は補助をする。 ・柔軟の補助は生かされていた。 ・ゆっくりのリズムがあってもよかったのではないか。 ・一種目を重点的にしてはどうか。
	・補強運動 (両手つきはなし30回 ・腕立てうさぎとび)	・個人差があって、余裕のある生徒とない生徒がいた。(数をこなすだけで精一杯の生徒、みんなに遅れまいと必死になっている生徒がいた)
4 分 (2 分)	・本時のねらいを確認する。 マナー ・健康 ・安全に留意しながら互いに技能を発表し合い協力して直し合いながら技能を身につける	・生徒自身、緊張感が感じられる。 ・教師の話が少し長かったような気がする。この時、教師の視線は生徒にほとんどなく、生徒の視線も教師に向いてない生徒も半分くらいいたようだ。 ・教師の話を聞く時の態度はよかった。
4 分 (5 分)	・課題提示 とび箱運動ではどんな点に注意してやればよいか	・あるグループの場合 各個人順番に発表していた。いつのまにか、まとめ役がいて順番に発表させていた。全体的に声が小さく、そばにいても聞こえにくかった。そして、即席にできたリーダー格がまとめて、みんなに確認していた。この班の場合、即席リーダーが発表していた。

・班バズの内容

＜1班＞ A君「態度をよくする」B君「具体的に？」C君「話をしない」B君「ふざけてしない」O君「呼ばれた時声を思いきり出す」B君「着地でつまづいても最後まできちんとする」A君「水平とびの時遠くへ手をつく」C君「手のつきはなしに気をつける」 △B君が発表～～を発表 ＜2班＞「水平とびの時遠くの位置に手をつく」「思い切りふみ切る」 「恐れないで遠くへとぶ」 △代表者の発表 同じ ＜3班＞ A君「思い切りする」B君「手のつく位置に注意する」C君「ふざけてしない」O君「勢いをつける」E君「着地に気をつける」C君「しゃべりながらやらない」 △O君が

	発表〜〜線を発表	・各班発表〜教師は一つ一つとりあげ、補足、重複していたが、班の全発表内容を最後まで聞いてから、教師がまとめることが少なかった。 ・発表者の意見を聞く態度〜各班の代表者が発表する時、その発表者の方に向かないで、班内に向いて耳だけで聞いていた生徒も少しいた。 教師「呼ばれた時は手をあげて大きく返事をすること」
10分 (10分)	・練習方法指示 ○自分の練習するとび箱の選択 ○とび箱をとんだあと次の人の演技を見て批評してから帰る ・練習	・練習バズ 声が小さく、内諸話をしているみたいだった。ハッキリ批評してやる生徒とそうでない生徒がいた。「ええ」と一言、うまくできた生徒への批評する生徒に表情がない。 (全体的に授業中、生徒の表情がなかったような気がする) 直接、とび箱の上で不充分なところを批評してあげていた生徒もいた。0君は、ちゃんとみて大きな声で批評し合っていた。生徒で、もっと教えあうようなところがほしかったような気がした。
	・教師模範演技もかねて生徒といっしょに練習	・うまくできない生徒への具体的な指導があまりなされていなかった。教師は、はげましの言葉をかけてやるのがいいのではないか。(気持をなごませる)
20分 (15分)	・発表会 ・危険防止について説明 ・発表会	・一人一人の演技に対して評定を出し、その理由を発表しあう。演技者は教師の呼び名に大きく返事して、手をあげてから演技する。(活気がある) 演技に対して各班それぞれ一名ずつ発表、最初は順番に発表していたが後半になって雰囲気になれて、自主的に発表して、やっといいムードになっていた。しかし、発表者が決まってきていた。後半になると隣同志で発表者の演技に対して雑談していた。 ・発表の内容〜規定 ・自由演技の評点とその理由 1班 A君 3.いきなりがない (斜) 4.着地の時声がでた 4.いきおいがなくなる B君 3.手のつき出しが悪い (閉) 5.すべてよい C君 3. (斜) 4.空中で体勢がくずれた 3.つきはなしが悪い 2班 A君 4.空中で足がまがった 4.いきおいがない (閉) 4.空中姿勢が悪い B君 4.着地の体勢が悪い 5.すべてよかった (前) 5.すべてよい C君 3.着地の体勢が悪い 3.いきおいがない

	D君 4．ふみ切りが悪い （水） 4．足がひらいた E君 4．着地が悪い （閉） 5．	（水） 4．いきおいがない D君 3．体勢がくずれた 4．着地がよかった （閉） 4．足が開いた E君 4．技能が少し悪かった 5．よかった	
	3班 A君 3．手のつき方が悪い （閉） 4．スピードをとめた B君 3．とんだ時足がまがった （閉） 4．返事が小さい C君 4．着地が悪い 4．思いきりふみ　っていない （閉） 5． D君 4．着地の時、体勢が悪い 4．首をまげる （水） 4．手のつきはなしが悪い	（閉） 5． E君 4．足がまがっていた 4．ふみ切りでスピードが なくなった （前） 4．腕のつき方が悪い	
4分 (10分)	．確認．評価．反省 ．集合．整列．挨拶 ．あとかたづけをする	．最初に班バズしたことに対しての確認があったらよかった。 ．時間不足であった。	

(3) 反省．課題

時間不足になり、確認段階で生徒にバズさせる時間がとれなかった。発表会で一人二種目の演技をさせたのが、時間オーバーの原因の一つになったように思う。演技と演技の間隔を十分にとりすぎたり、生徒も緊張していたためにスムーズに動かなかったりしたのも原因の一つのように思う。二種目にした理由は、最初の演技し、注意された点を次の演技に生かすように考えたからである。一人の生徒が演技をする時、その演技者の班の者は補助．準備にまわり、他の二班は演技を採点する活動になっていた。この時、スタート地点に一人待機さすようにしたらよかったように思う。

次に、生徒一人当りの運動量であるが、一人の生徒が瞬発的に動いた時間が、準備運動（8分）、練習（2分10秒）、演技（18秒）と計10分28秒であったことが、運動量が少なかったように思う。運動量を確保するために、もう少し練習時間をふやす必要があったのかも知れない。また、一部の者だけが採点をし、少数の者を補助．準備にまわし、その他の者は練習をする方法が考えられるが、個人差があるために、各とび箱の高さが違う段階練習であるため、一つだけのとび箱で発表演技、他のとび箱で練習するというのが困難であるし、混乱を招く恐れがあるように思う。いずれにしろ運動量の確保は必ず必要である。次に生徒に自主性を持たせる点であるが、前半はある程度よかったよ

うに思うが、後半、授業がスムーズに流れなくなり教師が前面に出すぎたように思った。生徒達も多数の先生方が参観されていたので極度に緊張していた。ここは、教師が緊張をときほぐす指導が必要だったように思う。

班バズ、班活動をより以上に活発にすることにより、班員が協力し合って、お互いの技能を高め、特に運動技能の低い班員をみんなが助けることが必要に思う。また、体力増強は言うまでもないが、スポーツマンシップにのっとったマナーのよさを身につけることによって、心身ともに健康な人間に育てるとともに、体育の授業で培った体力、マナーを少しでも実生活の中に生かせるような指導が、今後の大きな課題のように思う。

第８分科会（健康と生活）

意欲を持って取り組むための相互作用を生かした学習指導

― 体育の授業を通して ―

愛知県　春日井市立高座小学校　　土　居　正　広

体育の時間になると、ほとんどの子どもたちは喜んで取り組むようであるが、高学年ともなるとそれぞれに運動能力差も大きくなり、または題材によってはあまり好きではないとか嫌いだという子もでてくるようである。できない子はどうせやってもうまくならないんだという劣等意識がでてき消極的な活動になってしまい運動することの楽しさを失なってしまうようだ。こうならないようにその子なりの目標を持たせ１時間１時間の活動をより活発にさせ運動することの喜びを味わせたい。また、よくできる子にはより高い目標を持たせ、さらに意欲化を図るようにして、目標達成のためにお互いに協力し合い助け合って授業に取り組むような態度や気持ちがでてくればと思う。そうなれば全員がそれぞれの目標を持って積極的・意欲的に学習にのぞみ、楽しさや喜びを味わうことができるであろう。この積み重ねがやがては運動の好きな子に育っていくのではないだろうかと考え、この研究に取り組んだ。

2. 研究内容

(1) それぞれの題材における児童の実態把握――事前調査・意識調査

(2) 実態把握をもとにしての題材全体を見通しての授業の組み立て――実態に即した課題の設定

(3) 目標の達成状況や活動の意欲化・意識化を図るための評価表作成

(4) (1)～(3)をもとにしての授業実践

(5) 授業実践のまとめ――事後調査により目標達成状況の把握、考察と今後の課題

3. 具体的な取り組み〔実践例〕

〔走り幅とびにおける実践例〕

本題材における目標――踏み切りゾーンに足を合わせて踏み切り、スピードを生かして高くとぶ。

(1) 事前調査の結果により十分でないことがら

○まっすぐ助走できない。	24(%)	○踏み切りがうまくできない。	64(%)
○そりとびのフォームができない。	94	○力強く踏み切れない。	76
○スピードを生かしてとべない。	48	○高くとべない。	67

子どもたちの走り幅とびに対する意識として

○とぶことはむつかしいことではない。

○記録を伸ばすにはどうしたらいいかよくわからない。

○とぶフォームや、踏み切りゾーンに足を合わせるのはむつかしそうだ。

(2) 事前調査をもとにした授業構成（指導の要点）

○記録を伸ばすという意欲を持たせる。
○まっすぐ助走させる。
○スピードを生かして高くとぶことができるようにする。
○踏み切りゾーンに足を合わせることができるようにする。
○力強く踏み切らせる。
○そりとびのフォームを覚えさせる。

※ 走り幅とびはどんなことかはよく知っているが、記録をより伸ばすための助走・踏み切り・フォーム・高さはわかっていないようだし、事前調査の結果からもこのことがうかがえる。まず自分の欠点を知り、これを練習を通じて改めていけるような授業構成にした。

(3) 評価表の作成

資料①

(4) 授業実践　資料②

第1時の反省……○踏み切りゾーンに合わせるのはむつかしく感じたようなので、ゾーンの幅を太くしたり、踏み切り板を使って練習させた。その結果、子ども同志で活発に練習できたようだ。

第2時の反省……○そりとびのフォームを理解させるつもりで事前指導の段階で副読本の写真を使って説明し、話し合わせたが、実際に練習してみるとむつかしく活動が不活発になってしまった。

○高くとべない子がわりと多かったのでゴムひもを使って練習させると、その感じがつかめたようで、班での活動が活発であった。

第3時の反省……○3時間目ということで、評価表を見て今までの復習として十分でない点を練習して中心過程へともっていった。練習のポイント・友だちの運動を見るポイントがわかってきたようで活発に行なっていた。

(5) 授業実践のまとめ

事後調査の結果

○まっすぐ助走ができなかった。	12(%)	○踏み切りがうまくできなかった。	18(%)
○そりとびのフォームができなかった。	42	○力強く踏み切れなかった。	15
○スピードを生かしてとべなかった。	18	○高くとべなかった。	24

記録測定結果　資料③

記録が伸びた原因

○高くとぶことができるようになった。
○スピードにのってジャンプできるようになった。
○強く踏み切れるようになった。
○助走から着地まで流れるようにできた。

記録が伸びなかった原因

○高くとべなかった。
○踏み切り線を気にしすぎてスピードにのりきれなかった。
○そりとびを意識しすぎてかえってフォームがくずれてしまった。

今後の課題

○記録が伸びなかった子に対する練習方法・指導のあり方はどのような形で行なうと効果的であるか。→評価表の活用方法

○班でお互いに評価する場合のより具体的な観点の与え方はどうあったらよいか。

○個人指導はどのように行なうとよいか。

○11月教材へどのようにつなげていくか。

走り幅とびの授業を終っての子どもの感想

○記録を伸ばすにはむつかしいと思った。	67(%)
○記録を伸ばすにはどうすればよいかわかった。	85
○目標がほぼ達成できてよかった。	76

〔器械運動における実践例〕

(1) 事前調査結果

資料④

① とび込み前転についてうまくできない子の原因

○とび込むのが恐そうで普通の前転になってしまう。(特に女子に多い。)

○踏み切ってから手を着く位置との間の幅が狭い。

○とんだ時の高さがないので頭をついてまわってしまう。

○とんだ時のひざや腕が伸びていない。

○頭を入れるタイミングが悪い。

○腕のつき方が悪い。

○助走して両足踏み切りができない。

○助走のスピードが生きてない。

② 器械運動についての調査

資料⑤

好きな子	
○自身を持って行なう。	○できないからおもしろくない。しかし、できたらいいなあという気持ちが強い。
○楽しい感じで行なう。	○自信がないようである。
○挑戦してやろうという気持ちが強い。	○はじめからあきらめている。
○恐がらない。	○恐さをいだいている。

※ 特に嫌いだという子には、教師やまわりの子たちではげましてやり、少しでもできたらほめてやりながら自信をつけさせ意欲を持たせたい。たとえできなくとも努力の大切さをうえつける指導が必要だ。できる子には、よりきれいなフォームを目ざすなどの高い目標を持たせる。

(2) 事前調査をもとにした授業構成(指導の要点)

○とび込むということになれさせ感じをつかませる。

○ある程度の高さをとべるようにする。

○頭を入れるタイミングと背を丸くして回る。

○助走を生かす。

※　どうすればうまくできるかというポイントがわからないので、前転にスピードをつけたものだけになってしまう。なかには普通の前転もうまくできない子もいるので、こういう子もふくめてそれぞれの能力に応じた目標を持たせ練習させる。お互いの欠点を見合うことによってアドバイスやはげましをしあって練習させ、目標達成に近づけたい。

(3)　評価表の作成

資料⑥

(4)　授業実践

資料⑦

第5時の反省……○技術面での指導が事前指導の段階で不足したので、相互活動の場面で適切なアドバイスができていなかった。

○指導のポイントがいくつかあったが、どれも並列的な指導のため目標達成のためにはよくなかったようだ。

○遠く、高くとぶことのできる課題設定が十分でなかった。

○とんだ幅を何んらかの形で測定できるというような具体的な課題設定が必要であった。

○評価の観点が教師と子どもとの間にずれがあったようだ。

(5)　授業実践のまとめ

事後調査の結果　　資料⑧

うまくできない原因

○とびこむという恐さがとれない。

○助走のスピードが生かされていない。

○高さ・幅が十分でない。

○回るタイミングがよくない。

今後の課題

○本時の目標にせまるような課題の設定はどういうものか。→取り組みやすい課題から高度なものへ。

○相互活動を活発なものにするための事前指導のきめ細かさ。

○相互評価を適切なものにするためのポイントの指導のし方。

○練習時の評価のあり方。→即時評価

○能力別にグループを編成し、グループごとの目標を持たせる方法。

○年間を見通した課題の設定の必要性。

4．実践を通しての考察

①　授業構成

事前調査・意識調査→調査に基づいての目標にせまる課題の設定（本題材・年間を見通したもの）→評価表作成→授業

授業の流れのワンパターン

前時の想起・本時の練習内容・目標の確認
↓
個々に目標を把握（個人目標）
本時の課題に対する取り組み
課題に取り組むための事前指導ー教師
↓
○副読本等を使っての説明
○教師による示演
相互活動による課題への話し合いー児童
↓
○副読本を見て・示演を見て
○評価表を見て
相互活動による課題への取り組みー児童
○1人1人見る視点を分担

○1人1回の演技のたびに評価
○くり返しての練習（練習量を多く）
○できない子へ協力・補助
○できる児童は次の課題へ
○活動中、必要に応じて話し合い
↓
確認過程における活動へ
おたがいの演技を見て評価
事後指導

② 評価表を使っての効果

○具体的な項目を表してあるので、一つ一つの分節課題に取り組みやすくなった。

○相互活動においてお互いに評価しやすくなった。

○一つ一つ到達段階が明確にされており、達成の喜びを感じられるようになり、あまり好きでなかった児童の意識の変容がみられてきた。

○態度目標は班での協力・仲間意識をより強くしてきた。

○お互いに評価しあうことで見る目がでてきた。

○評価表を使って授業以外でも練習するようになった。

○年間を通して前回の到達状況や学習状況がよくわかり目安にできる。

○評価表があると、取り組みやすいという児童の声が多い。

○はげましのことばをお互いにかけ合うようになってきた。

※ 評価表を使うことによって児童は課題に対しての取り組みがスムーズになり、到達段階がはっきりしているので練習の様子を見合って相互批正をすることにより活動が活発にできるようになった。指導する側からにとっても役立つ。

特にあまりできない子にとっては、1時間の授業の中で〔○〕が一つでも つくようにとがんばるようになってきた。以上のことからも相互活動における評価表の使用には色々な効果がある。

5. 今後の研究の方向

○年間を見通した授業構成と実態に即した課題設定（目標にかなった課題）

○個人目標の具体化――評価表を生かして

○目標にかなった評価

○相互活動を通しての相互評価

資料①

体育評価表〔体操と陸上運動〕

4 班

目標	Ⓐ 体操	全身を動かす運動によって色々な力をつけることができるようにする。
	Ⓑ 走り幅とび	ふみ切りゾーンに足を合わせてふみ切り、スピードを生かして高くとぶことができるようにする。
	態度	班で協力し合い、のうりつよく練習する。

①	石川千利世	②	宮田久美子	③	中原 満	④	足立恭章	⑤	柘植一葉
⑥	中山真理子	⑦	田中辰治	⑧	井村光紀	⑨	稲垣 靖		

種目		課題	月	日		①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨
体そう	1	うさぎとび	6	8	木	○	○	○	○	○	○	○	○	○
	2	かえるとび	6	13	火	△	△	○	○	△	△	○	○	○
	3	ジャンプ	6	13	火	○	○	○	○	○	○	○	○	○
	4													
	5													
走り幅とび	1	まっすぐ助走する練習	6	8	木	○	○	○	○	○	△	○	○	○
	2	ふみ切りに合わせる練習	6	8	木	○	○	○	○	○	○	○	○	○
	3	そりとびのフォームの練習	6	13	火	○	△	○	△	△	×	△	○	○
	4	力強くふみ切る練習	6	13	火	○	△	○	△	△	○	○	○	○
	5	記録をのばす	6	15	木	○	○	○	○	○	×	○	○	×

使用器具	まきじゃく・砂ならし・スコップ・ライン引き・ふみ切り板(2)・マット(2)

記録	月/日	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨
1	6/8	237cm	237cm	304cm	234cm	245cm	258cm	289cm	309cm	330cm
2	/15	276cm	265cm	332cm	258cm	271cm	245cm	315cm	355cm	327cm
3										
目標		270cm	267cm	320cm	300cm	275cm	280cm	310cm	360cm	360cm

班の活動	6/8(木)	○	目標はしっかりできた	目標が達成できてよかったと思う。
	6/12(火)	△	そりとびのフォームがうまくできなかった	そりとびのフォームはたいへんむつかしいので、あまり気にせずにとぶように。
	6/15(木)	○	ほとんどの子が前よりのびた。	目標が達成できてよかったと思う。

感そう	そりとびはとてもむずかしいと思った。 ほとんどの子がまれより記録がのびてとてもよかった。 班でよく協力できた。

資料②

第 1 時

	走り幅とびの練習をしなさい。		
中	○ 記録の測定をする。 ・自分にあった助走距離・スピードとび方でとぶ ○ 本時の練習の要点を知る。 ・まっすぐ助走する。 ・踏み切り線に合わせる。 ・教科書を見て話し合う。	○ 記録の測定をさせ、目標を持たせる。 ○ 自分にあったとび方でとばせる。 ○ 本時の要点を教科書等を使って知らせる。 ・ 短助走から強く踏み切り、遠くへとばせるようにする。 ・ 踏み切り線に合わない距離だけ、走り始める線を前や後ろにさせる。	○練習の要点がわかったか。 （自由会話） ※
心	○ 練習を班でする。 ・5～6歩を全力走する。 ・踏み切り係は、足があわない距離を調べ、とんだ人に知らせる。	○ 班で係を決め、助走フォーム等をおたがいに教え合って練習させる。 ○ 高さが低い場合にはゴムひもを使って練習させる。	○練習ができているか。 （巡視・個人指導） （相互批正）

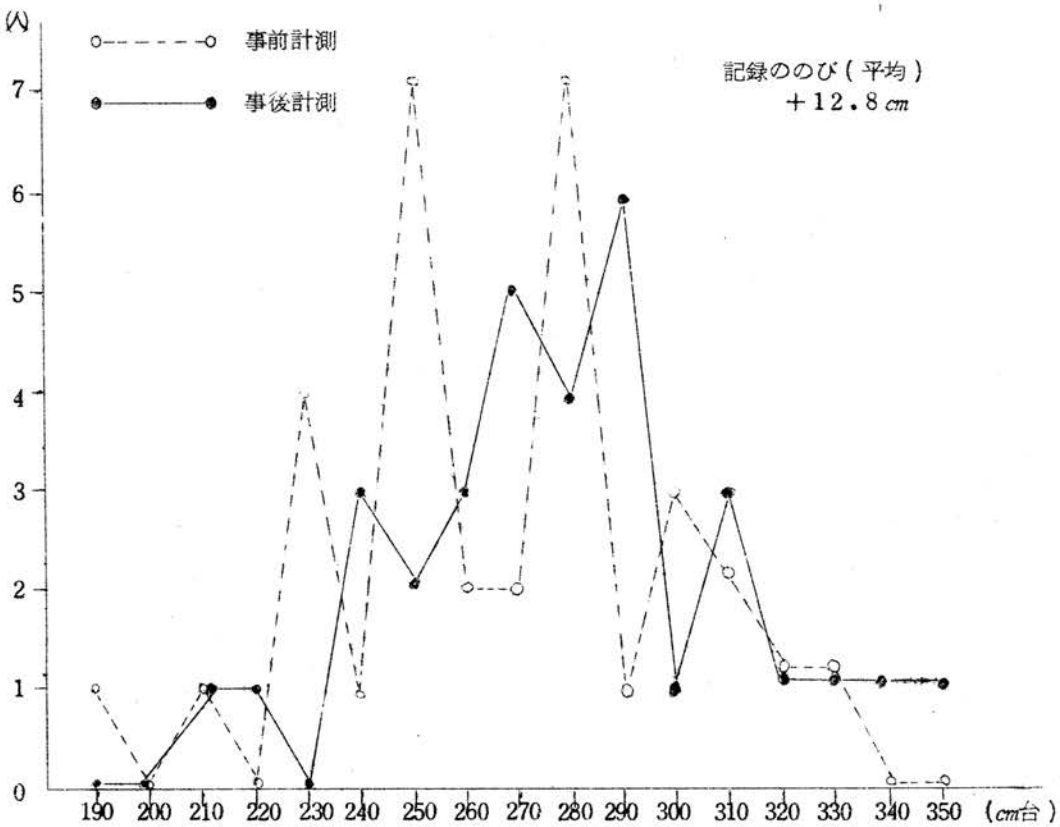
第 2 時

	走り幅とびの練習をしなさい。		
中	○ 踏み切り線に合わせることに気をつけてとぶ。 ○ そりとびのフォームについて知る。	○ 前時で踏み切り線に合わせることが十分でなかったので復習させる。 ○ そりとびのフォームについて説明をする。 ○ きき足で踏み切ってとべるように指導する。	○踏み切り線に合っているか。（観察）
心	○ そりとびのフォームに気をつけて練習する。 ・班で順番、係を決めて行なう。 ・おたがいに見合って練習をくり返す。	○ 踏み切り線に足があっているか。そりとびのフォームはできているか。班でお互いに調べさせる。	○そりとびのフォームでとべているか。 （相互批正） （巡視・個人指導）

第 3 時

	走り幅とびの練習をしなさい。		
中心	○ 今まで学習したことに気をつけてとぶ。 ○ 10 ～15 mを全力助走してとぶ。 ・助走後半の全力走のスピードのまま強く踏み切る。 ○ 踏み切り線にあわせてとぶ。 ○ そりとびのような動作でとぶ。	○ 踏み切り線に合わせる。 そりとびのフォームで、きき足でふみ切ることに留意させる。 ○ 力強く踏み切ってとぶように指導する。 ○ 係を決めてそれぞれの場所で助走のスピード、踏み切り線、そりとびの動作を見合わせる。	○今まで学習したことができている分（観察） ○ポイントをおさえてとべているか。 （相互批正） （巡視・観察）

資料③



資料④

（32人中．1人は長期見学）

		倒立（補助）		足かけ上がり		足かけ前転		転向前おり		とび込み前転	
じょうずにできる	男(人)	5	8	6	12	2	7	7	12	3	5
	女(人)	3		6		5		5		2	
ふつうにできる	男	10	19	7	13	6	10	8	16	9	14
	女	9		6		4		8		5	
できない	男	1	5	3	7	8	15	1	4	4	13
	女	4		4		7		3		9	

資料⑤

（33人中）

		とび箱		鉄棒		マット	
すき	男(人)	10	15	6	13	10	16
	女(人)	5		7		6	
ふつう	男	3	7	7	13	4	8
	女	4		6		4	
きらい	男	3	11	3	7	2	9
	女	8		4		7	

資料⑥

体育評価表〔体操と器械運動〕

1 班

目標	A	とう立(ほ助)	手のつき方、目のつけどころを正しくして、体重がささえられるようにする。
	B	足かけ上がり一足かけ前転.転向前おり	足かけ上がりと足かけ前転が連続してでき、転向前おりでおりれるようにする。
	C	とびこみ前転	両足ふみ切りで、遠くに手をついて、せ，こし，かかとの順について前転ができるようにする。
	D	体操	いろいろな運動によって、身体を全身的に動かして、調整力や筋力をやしなう。
	E	学習態度	友だちの運動を、よく見たり、見てもらったりして、気づいたことを進んで注意し合い、楽しく学習する。

①	小島洋二	②	稲垣実智代	③	加藤美智	④	倉本淳	⑤	角田裕子
⑥	藤田圭	⑦	松浦由美	⑧	松本和良	⑨	富田操		

種目	課題	月/日( )	1	2	3	4	5	6	7	8	9
A	押し上げ・頭支持とう立の練習	7/1 (土)	△	○	見学	○	△	○	△	○	○
	片足でけってとう立の練習	6/30 (金)	△	○	/	○	△	○	○	△	△
	シールは何色？		●	●		●	●	●	●	●	●
B	足かけ上がりの練習	6/30 (金)	△	○	/	○	△	△	○	○	△
	さか手に持ちかえ前転の練習	7/1 (土)	△	△	/	○	△	△	△	△	△
	転向前おりの練習	7/1 (土)	△	△	/	○	△	○	○	△	△
	3つの運動の練習	7/3 (月)	△	○	/	○	○	○	○	△	見学
	3つの運動をとぎれないように練習	7/3 (月)	×	△	/	○	△	△	○	△	/
	シールは何色？		●	●		●	●	●	●	●	
C	台上から前回りの練習	7/5 (水)	○	○		○	△	○	△	○	△
	2～3歩助走から、両足ふみきりの前転練習	7/5 (水)	△	○		○	×	○	△	○	△
	しょう害物をとびこして前転の練習	7/6 (木)	△	△		○	×	○	△	○	×
	ふみ切り点と手のつく位置の間をだんだん遠くしての前転練習	7/6 (水)	△	○		○	△	○	△	○	△
	シールは何色？		●	●		●	●	●	●	●	●

	月.日.( )	E	安全	反省のことば	先生より
班の活動	6/30 (金)	△	○	能りつよくできた。	目標の〔E〕が0になるように努力しよう。
	7/1 (土)	△	○	できない人ができるようになった。がんばって、できるようになった。はく手があまりできなかった。	できない人ができるようになったのはうれしいことだね。
	7/3 (月)	○	○	きのうまではあまりできなかったけれど、協力しあってやったので、できるようになった。	協力し合って、できるようになったのはたいへんいいことだね。
	7/5 (水)	○	○	学習の態度よかった。	態度はよかったけれど、課題はもう少しだな。がんばろう。
	7/6 (木)	○	○	目標も守れたし、のうりつよくできた。	

感そう	

体育評価表〔体操と器械運動〕

班

目標	A	とう立（ほ助）	手のつき方、目のつけどころを正しくして、体重がささえられるようにする。
	B	足かけ上がり一足かけ前転.転向前おり	足かけ上がりと足かけ前転が連続してでき、転向前おりでおりれるようにする。
	C	とびこみ前転	両足ふみ切りで、遠くに手をついて、せ，こし，かかとの順について前転ができるようにする。
	D	体　　操	いろいろな運動によって、身体を全身的に動かして、調整力や筋力をやしなう。
	E	学習態度	友だちの運動を、よく見たり、見てもらったりして、気づいたことを進んで注意し合い、楽しく学習する。

①	②	③	④	⑤
⑥	⑦	⑧	⑨	

種目	課題	月/日( )	1	2	3	4	5	6	7	8	9
A	押し上げ・頭支持とう立の練習										
	片足でけってとう立の練習										
	シールは何色？										
B	足かけ上がりの練習										
	さか手に持ちかえ前転の練習										
	転向前おりの練習										
	3つの運動の練習										
	3つの運動をとぎれないように練習										
	シールは何色										
C	台上から前回りの練習										
	2～3歩助走から、両足ふみ切りの前転練習										
	しょう害物をとびこして、前転の練習										
	ふみ切り点と手のつく位置の間をだんだん遠くしての前転練習										
	シールは何色？										

班の活動	月.日.( )	E	安全	反省のことば	先生より

感そう	

資料⑦

過程	少しでも遠くに手をついて、とび込み前転の練習をしなさい。		
	○ とび込み前転の練習をする。 ・ 前時学習した台上からの前回りを行なう。 ⑰ ・ 障害物をとびこして前転する。 ・ 踏み切り点と手の位置の間をだんだん遠くして前転する。 ・ おたがいの演技を見合って練習する。 ・ 障害物を使わないでとび込み前転の練習をする。	○ 班で助け合い、注意し合って練習させる。 ○ うまくできない子には個別指導をし、意欲を持たせる。 ○ じょうずにできる子に示演させる。友だちの試技を見せ、わからせて練習する。	○ 少しでも遠くに手をつくようにして、とび込み前転の練習ができているか。 （巡回・個別指導） （相互批正）
確認	班で演技を発表し合いなさい。		
	○ 班でとび込み前転の発表をし合う。 ・ 1人ずつ演技をし、みんなで見合う。	○ おたがいの演技を見合わせ、評価し合わせる。 ○ 見るポイントをおさえさせる。 ○ よくできた子には拍手を送らせるように指示する。 ○ 演技を見て、本時の学習目標の達成度を知る。 ⑫	○ とび込み前転がじょうずにできているか。 （相互評価） ○ 本時の目標がどの程度達成できているか。 （観察）
	○ 班で整理運動をする。	○ 班ごとに集まり、班長を中心にのびのびと行なわせる。 ○ 号令は1人にかけさせ、整理運動の内容については、事前に教師が指導しておく。	
	○ 班で本時の学習についての反省を、評価表を使って話し合い記入する。 ・ 課題の達成度を相互評価	○巡回し、助言する。	○ 本時の学習目標が達成できたわ。 （自由会話－評価表に記入）

過程	する。 ・ 学習態度について話し合う。 ○ 話し合いの終った班から集合する。 ○ 本時の学習について反省を聞く。 ・ 感想を発表する。 ○ 次時の予告を聞く。 ○ 礼をする。 ○ 後片付けをする。	○ 達成度・練習態度について話してやる。 ○ 10月に学習する時の目あてにさせる。 ○ 発汗処理・手あらい・うがいについて指導する。 ○ 協力して、すばやく後片付けをさせる。 ○ 教師は器具庫までついて行き、確認する。	

資料 ⑧

		倒立（補助）		足かけ上がり		足かけ前転		転向前おり		とび込み前転	
じょうずにできる	男(八)	9	15	8	15	4	10	9	16	5	9
	女(八)	6		7		6		7		4	
ふつうにできる	男	6	14	7	14	7	12	6	14	9	16
	女	8		7		5		8		7	
できない	男	1	3	1	3	5	10	1	2	2	7
	女	2		2		5		1		5	

第８分科会（健康と生活）

よりよい授業をめざして

―課題の精選―

愛知県　春日井市立東部中学校　　佐　善　康　郎

1. はじめに

教材（課題）の精選ということがよくいわれるが、実際の授業となると指導書や教育課程をじゅうぶん吟味・検討もしないで利用したりしている。また、経験主義的な発想や、過剰な親切心からあれもこれも教えてやろうとしたりして、ついつい課題の量を多くし、不燃焼な授業に終ったりしている。

課題が多いといろいろの弊害がありかえって生徒の意欲を減退させたりする。思考の深化やドリル（フィードバック）、定着化、相互活動等に要する時間が少なくなったりする。従って生徒側にすれば十分理解できず、要求も満たされないままの授業となり互いに不燃焼に終りいやな思いをしたりする。

現場のわたしたちは指導内容が多すぎるからといって逃げがちであるが、研究を深めこの問題をのりこえていくことが、自己の力量を高め、生徒の欲求を満たす授業へとなっていくと思われる。また、資料や発問の精選が教師側でできていても生徒の実態に即していない場合が多々あったりする。

よい課題とは、やはり生徒の実態に即したものであるべきと考え、実践の中から課題の精選に取り組んでみた。

2. 取り組みの経過の概要

校内の現職教育で共通理解したこと

(1) 授業の成立するための基本的条件

○ 的確な学習内容の指示　○ 授業が生徒自身のもの　○ 教師と生徒の間に望ましい人間関係があること。

(2) 授業をどのように組みたてるか。

準備過程 ⟶ 中心過程 ⟶ 確認過程

課題提示 ⟶ 個人思考 ⟶ バズ ⟶ 発表 ⟶ 教師のまとめ

(3) 課題の重要性

○ 課題の役割

・授業の流れを推し進めていく力　・授業を組み立てる柱　・意図的に問題状況に向かわせる。

○ 課題の提示のために

・授業の目標に即して明確に提示（より課題を発堀していく作業を意識的に、継続的に）

○ 課題への取り組ませ方

・全員がわかることをめざす。　・わかる，できる者の輪を広げる。

・課題と認識（実践）のずれを発見　　・取り組むことの値打を知らせる。

(4)　評価のねらいをどうとらえるか。

・学習目標を把握し到達への見通しを持たせる。・目標への到達度を知り、意欲を持たせる。

・学習前後の理解度を比較し、生徒の変容を知る。・指導計画・方法の改善に役立てる。

以上の内容をおさえて、特に、課題と認識（実践）のずれ、つまずきに焦点化し、サッカーの指導と評価を通して課題づくりを試みた。

課題づくりの取り組み方

教材研究の段階 ⟹ 授業の段階

○教育課程の批判・検討 ↓ ○生徒の実態把握 ↓ ○課題の構成（別紙資料１）	→	○学習課題の提示 ・技能の構造化 ・レディネス ・指導方法・内容 ・負荷 ・発問 ・パスの位置づけ

○課題の実践 ・評価（教師側・生徒側） 精選の効果の判定（ずれ、つまずきの発見） ・修正（生徒側からの精選） （生徒側の多様な反応） (指導計画・内容の改善、組みかえ運動の負荷の検討）

以上の過程を経て課題づくりを行った。その内容は資料１である。

3．実践の中で（実態把握）

(1)　第１時でとらえた問題点とその内容（簡単なルールによるゲームを通して）

	体力面	技能面	戦術面
問題点	○　筋力不足 ○　スタミナ不足 ○　調整力不足 キックに必要な力をいつ、どこに集中するかができない（リセラクセーションを）	○　キックが不安定 (1) ・スイングが大きい ○　ボールコントロールがうまくできない ・トラップがまずい ・浮き球の処理がまずい ・動きながらコントロールができない ○　パスが単純 ○　ヘッディングがまずい	○　攻守の基本的な戦術の共通理解ができていない ・密集型になる。 ・予測したプレーができない ・オープンスペースの使い方を知らない ・守り方を知らない ○　ルールに精通していない

		○ キープ力がない	
対策	○ 補強運動を 〃あざらし〃 ○ チェンジオブペース走を ○ キックの力学を科学的に理解させる	○ キックのフォームづくり ・キックの力学を ・リラクセーションを ・段階的な練習とくり返しやる場の保障 ○ 身体のどの部分が使えるか ・くり返し練習の場を ・ボールに慣れる場を ・ストップと合わせて ・浮き球の処理を意識的にさせる ○ パス・パターンを練習 ・基本的な動きを ・いい位置へのフリーランニング ○ 正しいフォームを ・有効性を ○ 個人技能のレベルアップ ・ドリブル、フェインドで ・自分の体を利用して	○ 技術的特性の理解 ・ポジションワークを ・オープンスペースとマークについて ・攻防の基本について ・戦術の練習（グリッドで） ○ まず覚え理解させる ・カードを作る ・プレイの中で時にふれて

以上のような方法で $^{1}/_{13}$～$^{13}/_{3}$ まで実践した。（ $^{2}/_{13}$～$^{13}/_{13}$は別紙資料で）

4. 実践を通して

よりよい授業をめざして課題の精選に焦点をあて、サッカーについて試みた。指導書等を批判検討し、自分なりの教材感をもって実践した。生徒の反応に注目し、その反応に対して研究を行った。教育課程を検討したなかでの問題点は、ドリルの時間が少ない。段階指導が粗い、2：0のコンビプレーの軽視、ゲームが少ないなどがあった。以上の点に留意し、プラン化した課題を実践させ加除修正をした。

この活動で得たものは、・構造化ができ指導体系ができた　・効果的な展開ができ体力づくりへのつながりもできた　・球技指導のパターンができた　・生徒一人一人の反応に注目することにより、意欲化へとつながった、である。残された問題点についてふれてみると、・技能の構造化と生徒との実態のずれ、つまずきの修正をより確実に、・個人差の配慮の適切化、・効果的なパスの位置づけ、・戦術、ルールのおさえの適切化、など以上のことが浮き出てきた。今後、これらの点に目を向けて

いき、生徒の要求・実態にあった質の高い課題づくりをめざしたい。

なお、11／13～13／13の実践では、球技大会を相まって試合形式の練習を学級討議を重ねた上で実践させた。

全員参加の大会で有意義に進められた。大会を盛り上げるため今までにない個人表彰の部がつくられ、ベストイレブン、得点王、アシスト王、などがつくられ、大会は熱気のなかで開かれた。大会終了は、ベストイレブンとわれわれ教師チームとのゲームも実施され、生徒とのつながりも深まった。

大会終了後は、生徒自身の運営で体育館で表彰式が行われ、スポットライトも点火され、その灯に頬を紅く染めながら上がっていった生徒が印象的でした。

第８分科会（健康と生活）

交通安全指導における豊かな人間づくり

滋賀県　五個荘町立五個荘小学校　　小　菅　融　宣

1．はじめに

本校は昭和５１．５２年度 県教委指定の交通安全指導の研究校として、テーマを「変化する交通環境に適応できる実践的能力や態度の育成」と設定して、その実践に取りくんできた。学級指導．児童会活動．学校行事等広範囲に及ぶ実践の中から特に本稿においては集団登校の指導に焦点をあてて、その実践の経過を述べ問題を提起したい。

2．本校の交通安全教育の基本性

(1)　バズ学習体制による交通安全指導

(2)　学校教育活動の全領域の中で達成する

(3)　地域社会への啓蒙と協力

(4)　将来への志向

3．集団登校指導の必要性

学校において、学校指導の学習を通して、交通安全の意識を高めたり、安全な行動について学習したことが、現実に生かされる場は校外生活である。そこには毎日車が激しく行き来する道路があり、その中で児童が安全な歩行や道路の横断を実践することによって、はじめて安全な行動の定着や習慣化が期待できるのである。

このように意識化→実践化→習慣化へと学習を発展させていく指導過程の中で、習慣化の評価ができる最も適切な場と言えるのは、日常の集団下校の場である。

4．集団登校バズ

本校では１昨年より登校バズを実施している。これは朝集団登校した時、校庭のあちこちの適当な所を見つけ、各分団ごとにひとかたまりになって「今日の登校はどうであったか」と自分や友達の歩行、横断の仕方等について話し合せる。こうした話し合いによって、交通安全に対する意識を高め、ひとりひとりの自覚の上に立って、安全な集団登校を自らの力で実践させることを願っている。

(1)　記録用紙

登校バズ記録	字＿＿分団＿＿＿＿	メンバー（　　人）
（　　月）	分団長（　　）	副分団長（　　）

週		① 出発時刻	② 列をみださない	③ 横断は正しく	④ 各分団で	気のついたこと
1	月　日					

○　バズの項目は分団長会で話し合った時の問題点の中から共通のものとして

①　出発時刻までに全員そろったか（忘れ物はないか）

②　列をみださずさっさと歩けたか（右側2列　雨の日1列）

③　横断は正しく早くできたか（分団長の笛、旗の指示で）

④　分団のめあて

(2)　実践をふりかえって

ア．分団長の声

．今まで出発時刻におくれがちだったが、みんながおくれないように来てくれる。

．さっさと歩けるようになった。車が来た時よく注意されたが、気をつけるようになった。

．挨拶がだれにでもはっきりできるようになった。

．今まであまり話さなかった1年生の子も、話すようになったのがうれしい。

．横断歩道のわたり方もだんだん良くなったが、笛や旗の使い方を工夫するとよい。

．雨の日はきちんと一列に並べるようになった。

．3列ならびをすることがあるが、注意すると1回で聞いてくれるようになった。

．みんなが協力し合って、登校の安全や列をみださないよう守れるようになった。

イ．作文「登校バズに思うこと」分団長5年I子　「わたしは、登校バズをしてよかったと思うことがよくあります。私が「反省やで」と言っても先に教室へ行ってしまうこともあって、その時はいやになります。でもバズをはじめて反省する時、1年生の人達もこの頃は「しっかり歩けました。」とか「よく歩けました。」と言ってくれます。またちょっと横に出たのでいけなかった」とか正直に言います。紙に○や×を書く時は「集合出発時刻は守れましたか」と聞くと、「よかった」「よかったで」「よかっな」と答えてくれます。そんな時1年生の人も答えてくれるのだなと思うと、うれしくなります。集団登校の途中で「足がいたい」と言った男の子がいました。そうなると心配で「もうどうもないか」と何度も聞きます。「どうもない」と言ったのでその時はほっとします。私が「これで反省を終ります」と言うと1年生の人もうれしそうに昇降口へ向って歩いていきます。それを見ていい子だなあといつも思います。それに正直に答えてくれるこ

とと、1年生の人でもいっしょに考えてくれるからです。大きい人は大きい人なりにいろいろ問題もありますが、一つの字の人がまとまって登校バズをすることは大へん良いことだとわたしは思います。

・ この作文の中には、分団長としての限りない責任感と低学年の子を思う上級生としての愛情が深くあらわれていると思う。さらに子ども同志が作り上げていく人間関係が、うるわしくかもし出されている。ここに交通安全以前の深い結びつきができたことを非常に喜こばしいことだと思っている。

5. 集団下校

1日の学習を終えた子はほっとした気のゆるみや解放感から、安全能力を低下させ思わぬ事故に結びつくものである。下校は一斉にはできない（土曜のみ実施）ので学年で同じ方面に帰る友達5～8人ぐらいでグループをつくり、班長をきめ、下校の目あてを話し合って班長が先頭になって下校している。

6. 今後の問題点

集団登校は一般の学習形態と違いメンバーが同学年でなく、1年から6年までと年令を異にする集団であること、また活動の場が殆んど教師の目のとどかない所に多い。そのためリーダーとなる5.6年生の責任は重大であり、彼等は要求されるものは指導性、責任感、愛情……等人間関係を豊かにしていく要素が殆んど含まれている。また、集団のメンバーもこうしたリーダーの立場を各自が理解して積極的に協力していかねばならない。

(1) 安全な行動を身につけさせるためには、くり返し、くり返しして習慣化していくのであるが、反面、比較的変化の少ない集団下校においては、マンネリ化していく傾向がみられる。このマンネリ化を防ぐ、効果的な指導の手だてはどうすればよいか。

(2) 集団登校の問題 ⇄ 学級の問題 ⇄ 児童会の問題 / 個人の問題 を

組織だてた指導体制のあり方はどうすればよいか。

第９分科会（芸術と生活）

音楽性を伸ばしあう　バズ学習

――アンサンブル学習を試みて――

兵庫県　姫路市立砥堀小学校　　柳　内　　翠

＜研究テーマとその要旨＞

音楽科における授業のあり方を追求し、期待される授業像をつかみたいという念願から本テーマを設定し、技術中心に偏するとか、主要教科でないからほどほどにとか、専科に任せておけばよいとか、問題の多い中で、要するに、授業で何を（リズムと旋律の美しさをみつけ出す。）どのように学習させればよいのかをはっきりさせ、音楽は楽しいと感じたり、美しいものを求めようとする心を培っていきたい。

そして、音楽を学習する本質的な楽しさは、単にきいたり、うたったり、ひいたりする作業的な楽しさを指すものではなく、「基礎的な能力の伸長」を基盤に、楽しさを本物にする。「やる気と根気」を育て、感動する「よろこびの心」を育てていきたい。

豊かな感覚で表現する能力を育てるために、「基礎指導」は、特別にとり出して指導するのでなく、仲間と共に考え、それにもとづいて表現活動ができる。『小アンサンブル学習』を試みて、個人の能力をも高めていくことをねらって実践的に取り組んでいる。

＜研究の経過と概要＞

ひとりひとりを生かすアンサンブル学習

バズ学習のもつ特徴を教育や指導の中に導入することから出発して、旋律楽器や打楽器の組み合せによって楽しませる小人数の重奏や合奏で、人間関係を基盤にした一つの包括的な指導方法である。

学習は本来、個人が主体であり、個人のエネルギーの集まりとしての集団でなければならない。しかし、音楽学習の中心になる表現活動においては、多人数の編成による演奏形態で行われることが多く、そこでは、優秀児優先になりがちで、数名の者がその場を支配し、大部分の者が終始受動的な態度ですごしてしまう。このような授業形態を続けていると、個人の立場をおろそかにする傾向が生じ、集団としての機能も弱くなりがちになる。

そこで、児童ひとりひとりを生かし、それぞれの力に応じた音楽活動ができるバズ分団を構成し、それぞれの立場で、自分のパートを認識し互いに合わせながら曲想を創りあげていく学習法を試みた。アンサンブル学習は、小集団の中で音楽によるコミュニケーションができ、各人の自己実現をはかっていくという価値も認めることができる。

指導の形態と方法

1．楽しく学ばせる授業（音楽経験を多くもたせる）

① 一斉 ⟶ ||: 個別 ⟶ バズ :|| ⟶ グループ発表

② ||: グループ ⟶ 一斉 :|| ⟶ 教師の補足修正 ⟶ 個別に確認

教材の取り上げ方や、児童の実態に即して授業形態を変える。

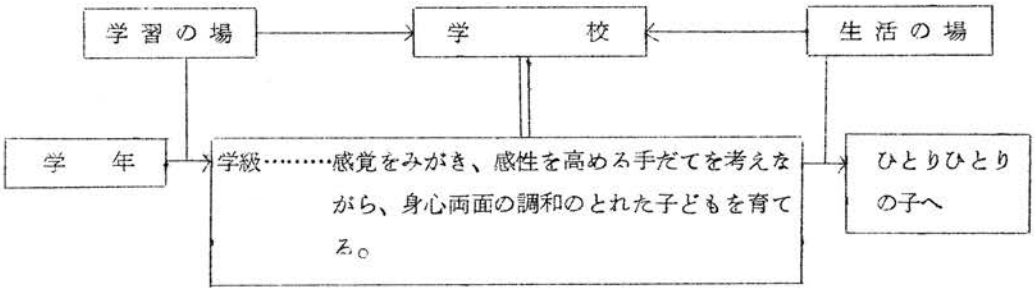
2. 児童の実態をふまえての内容の焦点化

意欲 —— 追求 ——技能の定着—— 感動
(やる気)---(根　気)------(よろこび)----
低位性をもつ児童を中核にグループの支えや、はげまし、協力によって、お互いが伸びあう指導。

砥堀小学校　　第1学年音楽教育基本計画表

学年	期　間	目　　標	指　　導　　内　　容
1	第1学期	リズムを楽しく	○ 就学前に、習った歌、好きな歌、教科書の歌、コマーシャルソングなど、楽しく歌唱しながら、拍感、リズム感等を中心に器楽も加えて指導する。 （打楽器が中心）
	第2学期	合奏を楽しく （小アンサンブル）	○ 鍵盤ハーモニカを中心に簡単な旋律の演奏法を指導し、打楽器と加えての小アンサンブルを指導する。
	第3学期	1.2月 きれいに合わせよう	○ 歌唱では少しずつ曲の味わいの表現を、器楽では拍のそろった気持ちのよい表現をねらって、そろう美しさを体験的にとらえさせる。
		3月 小さな音楽会を楽しもう	○ 好きな表現法で、人の前に出て、ひとりで演奏できる力を養う。

砥堀小学校教育目標	1学年学級経営目標	障害児K子の生活目標
『ともに手をたずさえていける子』 ○ 感情や思いやりの心が深く、互いに協力して向上をめざす。	安心して学べるムードづくり ○ 感じる耳や目、感じる心を育てる。 ○ 明るく楽しい教室	友だちとあそべるようになる ○ わらべうた　あそびの仲間入りができる。
『ねばり強い子』 ○ 強い意志と体力で、計画的に最後までやりとげる。	なかよく学ぶ　うれしさづくり ○ よくきいて　認めあう ○ はげましあい　なかよく学ぶ	教室で学べるようになる ○ リズムあそびに参加する
『力いっぱい　考える子』 ○ 全力をあげて学習や生活にとりくみ、自ら問題をみつけて深く考え、解決していこうとする。	思いやりの深い学級づくり ○ 力いっぱい　とりくむ子 ○ 手をたずさえて学ぶ子	心の解放をはかり、みんなと学習できるようになる。 ○ 音楽会に出演する。



3. 基礎能力の重視

感覚── 技能── 読譜──記譜　　資料（きらきらぼしのアンサンブル学習　実践記録）

教える指導でなく、表現を通し音楽的な語いを豊かにひきだしていく指導の実践。

4. 主体的な学習態度の養成

探究するすじ道を大切にした学習過程	1	2	3
	表現への欲求	学習の必要性の自覚	目あてをもつ
児童の活動	美しく　うたってみたい。	どうすれば　美しくうたえるか。	何に気をつけてうたうか。
導入する段階	読譜活動や聴唱法による旋律がうたえた段階で	曲想をとらえる段階で	曲想がわかれば、何をどのように表現するか

探究するすじ道を大切にした学習過程	4	5
	練　　習	検　　証
児童の活動	目あてを意識してうたう	たしかめ
導入する段階	試行．困難点の分析．練習のくりかえし	自分のものとして　うまく表現できたか

グループの変容とK子の変容

友だちになじめず孤立したK子が、みんなの中で学べるようになったのは、K子をとりまく　バズ分団が変わっていったからだと思う。

バズ学習の成果だと受け止めている。

グループの変容	K子の変容
○　楽器選びのけんか．リーダーの独占とお客さん	6月　　友だちにつれられて、花いちもんめなどして遊ぶ

楽器の音がうるさくて困る等、多くのトラブルを経て話し合いの場がもてるようになる。 o 楽器の特徴を生かしたり、個々のイメージにあったリズムの工夫をする。 o リズム．テンポの正確さを要求したり、音色の美しさを求めるようになる。 o ひとりひとりがかけがえのない演奏者としての姿勢が培われる。	7月 9月 10．11月 2月	飛び出しが少なくなり、教室でレコードをきくようになる。 テンポははずれてくるが、「おうまのおやこ」がうたえるようになる。 グループの支えで、リズムあそびに参加する。 音楽会には、カスタネットで演奏し「うれしいひなまつり」をみんなと声をそろえてうたう。

<問題提起>

- o 児童の能力差をすこしでも少なくするためには、どのような指導をしていったらよいか。
- o 芸能教科の現在おかれている立場はどうだろうか。（学校．父兄－教師）
- o 編曲についての教師の技能をどのように伸ばしていくか。

第９分科会（芸術と生活）

芸術的な表現力をどう育てるか。

－感動し、そして創造へと向う道すじを明らかにする。－

豊高校区教育推進協議会　長　尾　源　一　（豊中）

幼・小・中・高と発達段階での系統を考え図工・美術教育の真の目標を求めるべく豊高校区一貫教育体制づくりにとり組む中で、島の子供達の実体をふまえ島の子供達の生活をみつめる図工・美術教育をテーマとし、実践を通し今後の方向性を見い出したい。

1．地域実態

みかんの島豊町、この島の主産物であるみかんづくりの歴史を学ぶ中で、この地で生きる子供達とのかかわり、親達の実態を明らかにし、身近な課題を求めてみた。

2．主題　「おいこ」に学ぶ　（実践例）

なぜ「おいこ」を扱ったか……。　みかんづくりの主要な農具であった「おいこ」の果した役割。

3．主題から創造への道すじ

㋑　個人研究　「おいこ」について各自調査研究を進める。手だてとして、親・祖父母・身近な人達に語りべとなっていただき、生徒自らの手で学習課題を求めさせてみた。

㋺　主題をどのように捕らえ、どのように主題に迫っていったか。

資料をもとに、おいこづくりのこと・機能・地域での役割を明らかにし、地域により使用目的により異なるおいこの姿を浮き彫りにし、汗の臭い、労働の痕跡から労働に対する認知を深める。実際においこを背負い、おいこの機能、形体美を肌を通して学ぶ。

㋩　個人の課題をグループへかつ全体から個人へどのように返していったか。

個人の資料・体験をもとにバズ。仲間の課題を学び自己の目標を明確にする。

㋥　表現方法

マジックペン・竹ペンを用いての素描。切り絵による協同制作。造形差の追求。

4．相互確認　　自己評価・グループ評価

主題へのせまり方はどうであったか。目標に対してどの程度せまり得たか。

5．展望と課題　　郷土の姿を図工・美術教育一貫体制づくりの中でどのように位置づけ、取組むか。

「感動から表現へ」

東　　登基子

1. 地域の実態と方向性

この地域は、四方が海に囲まれ、岩場や砂浜の美しい姿を見せてくれる。そして山は、頂上まで開墾され、みかんが作られている。その海と山が、日一日と変化する四季折々のすばらしい自然に接しながらも、生徒は、よさを見失ってしまっているのが現状である。そこで、音楽を通して、自然のつくり出す美しさ．すばらしさに、少しでも気付いてくれることを指導の方向にしてやってきた。

2. 音楽の観点から見た生徒の実態

音楽の意識調査を通して、生徒が音楽をどのように受けとめているのか、明らかにしていきたい。

3. 実践例 ―― 中学校 ――

歌唱教材「山のいぶき」をもとに、生徒の活動をとらえていく。

㋑ ソプラノ．アルト．テノールの各パートを、パズ班として音を取っていった。手立てとして、各班の数人に事前指導を行なった。

㋺ 2つのパートを組み合わせて、二声部の響きをつかんでいった。

㋩ 混声三部合唱の重厚な響きに慣れ、より美しい和声をつくっていった。

㋥ 感動から表現へと向かわせるために、体験をもとに歌のもつ内容を意識づけ、表現力を引き出していった。

㋭ 歌を通して、ふるさとの山のすばらしさに気付かせた。

4. 展望と課題

表現力を引き出す難しさを、今後どのように克服していくか。

5. 実践例 ―― 小学校 ――

音楽朝会．ゲームから導入していく授業などの取り組みについて。

6. 幼．小．中の共通課題

問題点などをさぐり出しながら、今後の一貫した音楽教育へとつなげていく。この一貫という言葉の中で、高校の音楽とどのように結びついていくのか、大きな課題が残されている。